

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第532集

# 博 多 59

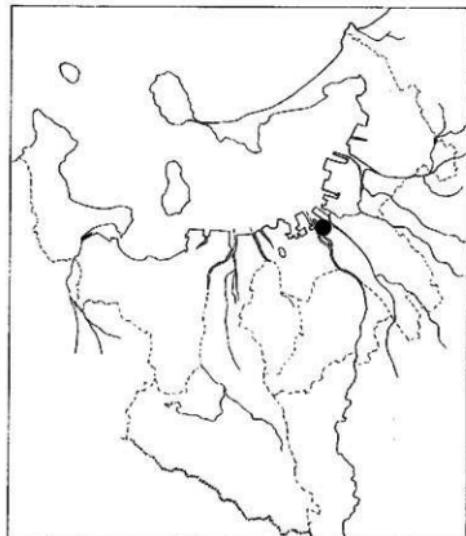
- 博多遺跡群第91次、第93次調査報告 -

1997

福岡市教育委員会

# 博 多 59

- 博多遺跡群第91次、第93次調査報告 -



遺跡略号 HKT-91

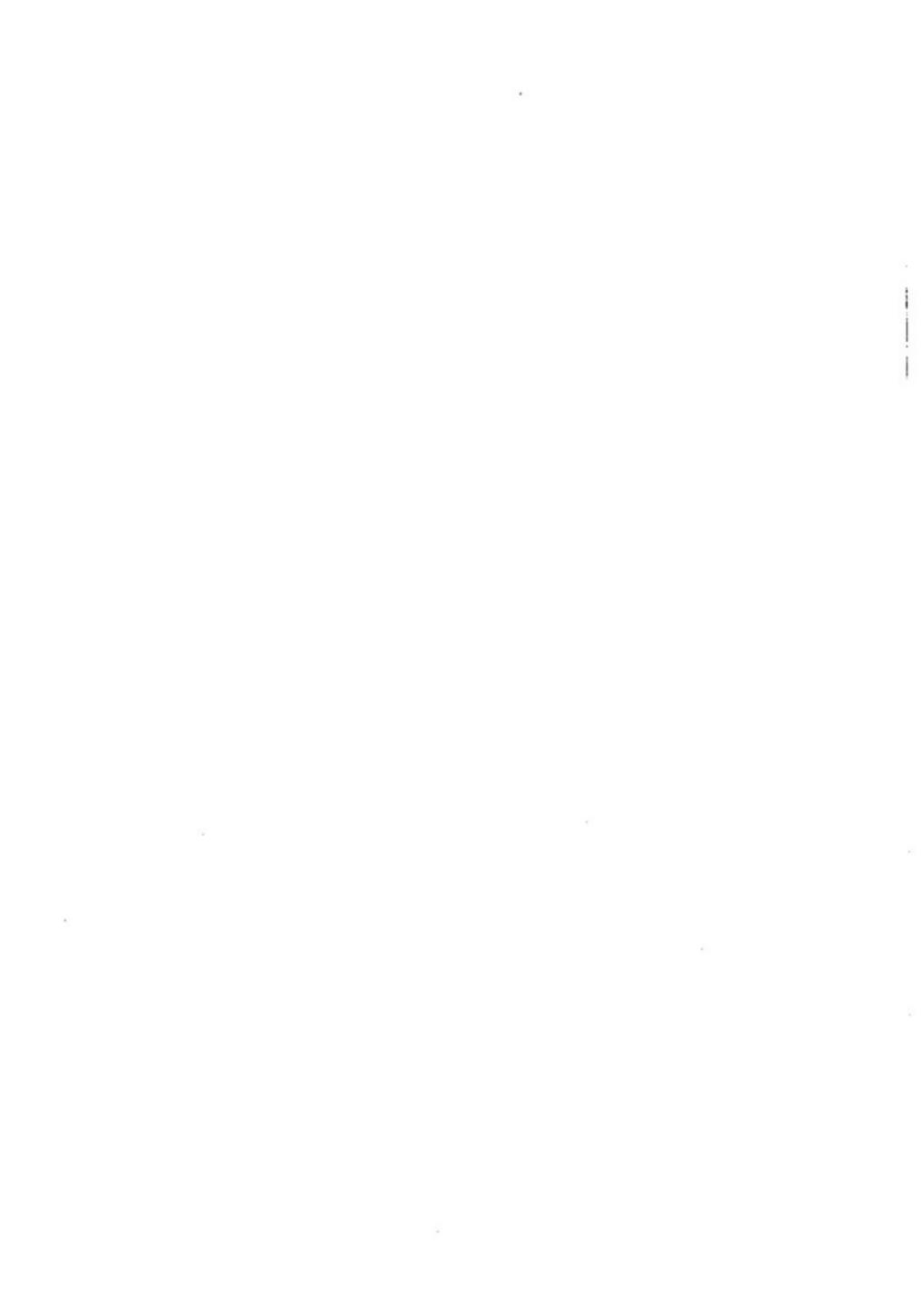
HKT-93

調査番号 9532

9545

1997

福岡市教育委員会



## 序 文

九州の北岸に位置する福岡市域はその地理的条件により、大陸や朝鮮半島からさまざまな文化を受容し栄えてきました。とりわけ、博多遺跡群は古代から中世・近世を通じて繁栄した国際都市であります。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努め後世に残そうと考えています。

本書は博多遺跡群第91次調査、第93次調査の成果を報告するものです。

本書が埋蔵文化財の保護と知識を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表す次第であります。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

## 例　　言

- 本書は、1995年度に行われた民間開発に伴い、福岡市教育委員会が調査を実施した博多遺跡群第91次・93次調査の報告書である。調査の担当は加藤隆也である。
- 本章に使用した遺構の実測は加藤隆也が、遺物の実測図は加藤、入江のり子が行った。製図は加藤、入江が行った。
- 本章に使用した遺構、遺物の写真は加藤が撮影した。
- 遺構の呼称は記号化し土坑をSK、井戸をSE、柱穴をSP、溝をSDとした。
- 本章で用いる方位は全て磁北である。
- 本章の執筆・編集は加藤が行った。
- 第2章Ⅲについては西南大学教授 磯 望氏から玉稿をいただいた。
- 出土遺物のうち、陶器等については「博多出土陶磁分類表」(福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告—博多—福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 別冊 福岡市教育委員会 1984)に基づいて記述した。
- 本報告に係るすべての出土遺物・記録類(図面・写真・スライドなど)は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

遺跡調査番号	9532		遺跡略号	HKT-91	
調査地地番	博多区下川端町134番地		分布地図番号	天神49	
開発面積	99.53m <sup>2</sup>	調査対象面積	67m <sup>2</sup>	調査実施面積	67m <sup>2</sup>
調査期間	1995年11月1日～11月8日				

遺跡調査番号	9545		遺跡略号	HKT-93	
調査地地番	博多区古門戸町83番外7筆		分布地図番号	千代博多48	
開発面積	670.46m <sup>2</sup>	調査対象面積	465m <sup>2</sup>	調査実施面積	465m <sup>2</sup>
調査期間	1995年12月1日～1996年2月5日				

# 本文目次

## 第1章 第91次調査の記録

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の組織	1
II	調査の記録	2
概要		2
1	土坑（SK）	2
2	井戸（SE）	4
3	柱穴（SP）	6
4	出土銅錢・遺構確認他	8
5	小結	10

## 第2章 第93次調査の記録

I	はじめに	11
1	調査に至る経緯	11
2	調査の組織	11
II	調査の記録	12
概要		12
1	第1面の調査	13
(1)	土坑（SK）	13
(2)	柱穴（SP）	25
2	第2面の調査	28
(1)	土坑（SK）	28
(2)	柱穴（SP）	34
(3)	溝（SD）	41
(4)	井戸（SE）	45
(5)	包含層・遺構確認他	54
(6)	トレンチ調査	54
3	小結	58
III	博多遺跡群93次発掘調査地の地形と地質	磯 望（西南学院大学） 65

## 挿 図 目 次

### 91次調査

Fig. 1 第91次調査地点周辺図 (1/2,000) .....	1
Fig. 2 第91次調査地点位置図 (1/500) .....	2
Fig. 3 第91次調査区遺構配置図 (1/100) .....	3
Fig. 4 S K - 01実測図 (1/20) .....	4
Fig. 5 S K - 01出土遺物実測図 (1/3・1/4) .....	5
Fig. 6 S E - 01実測図 (1/40) .....	6
Fig. 7 S E - 01出土遺物実測図 (1/3) .....	7
Fig. 8 S P 出土遺物実測図 (1/3・1/4) .....	8
Fig. 9 出土銅錢拓影 (1/1) .....	9
Fig.10 遺構検出時出土遺物 (1/3) .....	9

### 93次調査

Fig.11 第93次調査地点周辺図 (1/2,000) .....	11
Fig.12 第93次調査地点位置図 (1/500) .....	12
Fig.13 第1面遺構配置図 (1/100) .....	折り込み
Fig.14 S K - 01～08実測図 (1/40) .....	14
Fig.15 S K - 09～14実測図 (1/40) .....	15
Fig.16 S K - 15～24実測図 (1/40) .....	16
Fig.17 S K - 25～36実測図 (1/40) .....	17
Fig.18 S K - 37～41実測図 (1/40) .....	18
Fig.19 S K - 01～02出土遺物実測図 (1/2・1/3) .....	21
Fig.20 S K - 03～13出土遺物実測図 (1/3) .....	22
Fig.21 S K - 14～36出土遺物実測図 (1/3・1/4) .....	23
Fig.22 S K - 37～39出土遺物実測図 (1/3) .....	24
Fig.23 S P - 12～60、403～436出土遺物実測図 (1/3) .....	26
Fig.24 S P - 440～457出土遺物実測図 (1/3) .....	27
Fig.25 第2面遺構配置図 (1/100) .....	折り込み
Fig.26 S K - 42～55実測図 (1/40) .....	30
Fig.27 S K - 56～67実測図 (1/40) .....	31
Fig.28 S K - 68～78実測図 (1/40) .....	32
Fig.29 S K - 79～85実測図 (1/40) .....	35
Fig.30 S K - 86～97実測図 (1/40) .....	36
Fig.31 S K - 98～110実測図 (1/40) .....	37
Fig.32 S K - 47～56出土遺物実測図 (1/3) .....	38
Fig.33 S K - 66～91出土遺物実測図 (1/3) .....	39
Fig.34 S K - 95～109出土遺物実測図 (1/2・1/3) .....	40
Fig.35 S P - 138～331出土遺物実測図 (1/3・1/4) .....	42

Fig.36	S P - 333、334、503～572出土遺物実測図 (1/3) .....	43
Fig.37	S P - 575～600出土遺物実測図 (1/3) .....	44
Fig.38	S D出土遺物実測図 (1/3) .....	45
Fig.39	S E - 01、02、07実測図 (1/60) .....	46
Fig.40	S E - 03、04、05実測図 (1/60) .....	47
Fig.41	S E - 06、08、09実測図 (1/60) .....	48
Fig.42	S E - 01出土遺物実測図 1 (1/2・1/3) .....	49
Fig.43	S E - 01出土遺物実測図 2 (1/3) .....	50
Fig.44	S E - 01出土遺物実測図 3 (1/3・1/8) .....	51
Fig.45	S E - 02、03、09出土遺物実測図 (1/3) .....	52
Fig.46	93次調査出土銅鏡拓影 (1/1) .....	55
Fig.47	包含層出土遺物実測図 1 (1/3) .....	56
Fig.48	包含層出土遺物実測図 2 (1/3) .....	57
Fig.49	トレンチ調査出土遺物実測図 (1/3) .....	58

## 図 版 目 次

### 第91次調査

- P L. 1 (1) S K - 01遺物出土状況（南東から） (2) S E - 01検出状況（南東から）  
 P L. 2 第91次調査出土遺物

### 第93次調査

- P L. 3 (1) A区第1面全景（北東から） (2) A区第2面全景（北東から）  
 P L. 4 (1) B区第1面全景（北西から） (2) B区第2面全景（北西から）  
 P L. 5 (1) S K - 01遺物出土状況（南東から） (2) S K - 02検出状況（南西から）  
     (3) S K - 34検出状況（北から） (4) S K - 45遺物出土状況（北東から）  
 P L. 6 (1) S K - 79検出状況（南西から） (2) S K - 89、90完掘状況（東から）  
     (3) S K - 98、100検出状況（南東から） (4) S K - 110検出状況（西から）  
 P L. 7 (1) S E - 01上面獸骨出土状況（南東から） (2) S E - 01検出状況（南東から）  
     (3) S E - 02検出状況（南東から） (4) S E - 3, 4, 6, 7 検出状況（南西から）  
 P L. 8 (1) S E - 03検出状況（北から） (2) S E - 06検出状況（北から）  
     (3) S E - 07検出状況（北から） (4) トレンチ調査掘削状況（西から）  
 P L. 9 出土遺物 1  
 P L. 10 出土遺物 2

## 本文写真目次

P h. 1	91次作業風景	9
P h. 2	91次調査全景	10
P h. 3	S K -41側面（北から）	18
P h. 4	S K -03遺物出土状況（南東から）	24
P h. 5	B区第1面遺構検出作業風景	25
P h. 6	S P -06検出状況（南東から）	27
P h. 7	S P -18検出状況（西から）	27
P h. 8	S K -98検出状況（南西から）	38
P h. 9	A区第2面柱穴検出状況（南東から）	44
P h. 10	S E -05検出状況（南西から）	48

## 表 目 次

T a b. 1	93次調査出土遺物観察表1	59
T a b. 2	93次調査出土遺物観察表2	60
T a b. 3	93次調査出土遺物観察表3	61
T a b. 4	93次調査出土遺物観察表4	62
T a b. 5	93次調査出土遺物観察表5	63
T a b. 6	93次調査出土貨幣一覧	64

# 第1章 第91次調査の記録

## I はじめに

### 1 調査に至る経緯

1995年7月25日、博多区下川端町134番地における立体駐車場建設に伴う埋蔵文化財課事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの博多遺跡群の北側に位置している。福岡市教育委員会が、これを受けて1995年9月27日に試掘調査を実施した。現況は宅地で、調査の結果、地表下約3.4mの砂丘層上面にて遺構が確認された。よって、面積67m<sup>2</sup>を対象に記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は1995年11月1日～同年11月8日まで行った。

### 2 調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 尾花剛（前） 町田英俊（現）

調査総括 文化財部長 後藤直

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

埋蔵文化財課第2係長 山口謙治

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 内野保基 西田結香

調査担当 埋蔵文化財課第2係 加藤隆也

試掘調査 山崎龍雄 池田祐司

発掘作業員 小山隆一 原章司 尾崎康子 賀山道子 柴田勝子 柴田春代 辻美佐江 土斐崎初菜  
原幸子 高橋茂子



Fig. 1 第91次調査地点周辺図 (1/2,000)

## II 調査の記録

### 概要

調査地点は、博多遺跡群の中でも北側に位置する。調査面積が狭小であるため地山面である黄褐色砂層の堆積方向や傾斜方向などは調査地内においては不明である。また、調査開始前の土留め工事などのため土層の観察は行えなかった。今回の調査は黄褐色砂層上面の1面のみの調査となった。

### 1 土坑（SK）

上坑状のものは不定形のものを含み幾つかみられたが地山の汚れなどもあり、掘方が明確にみられたのはSK-01のみである。

#### SK-01 (Fig. 4, PL. 1)

調査区南西に位置し、SE-01を切る。長軸1.85m、短軸1.1m、深さ0.4mを測り、平面は隅丸長方形を呈する。遺物の出土状況などから廃棄土坑と考えられる。時代は遺物から15世紀代と思われる。

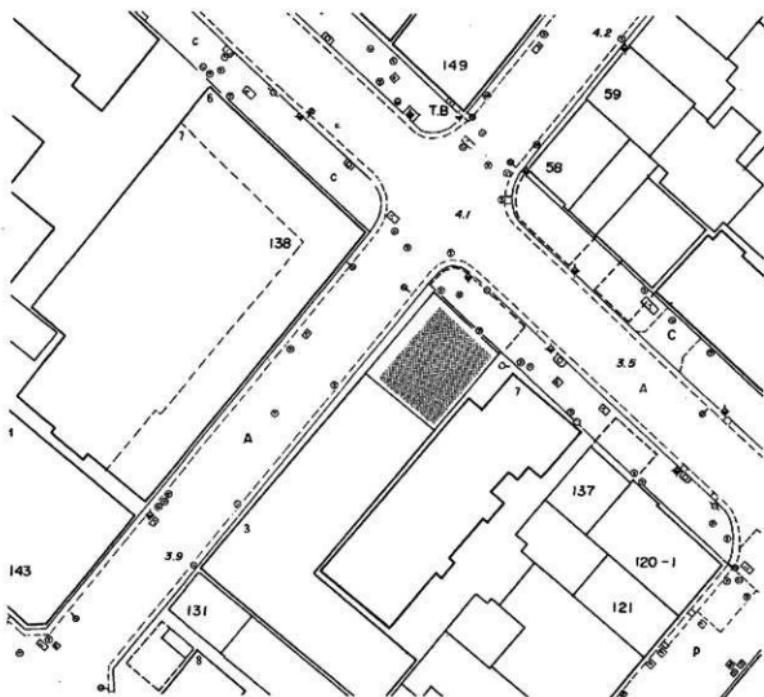


Fig. 2 第91次調査地点位置図 (1/500)

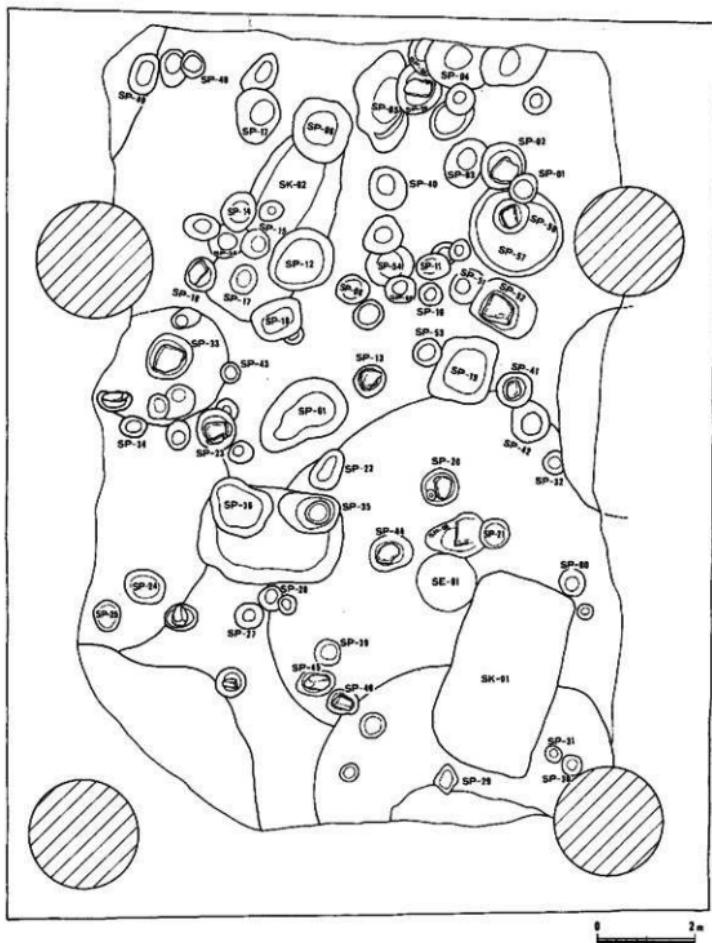


Fig. 3 第91次調査区造構配図 (1/100)

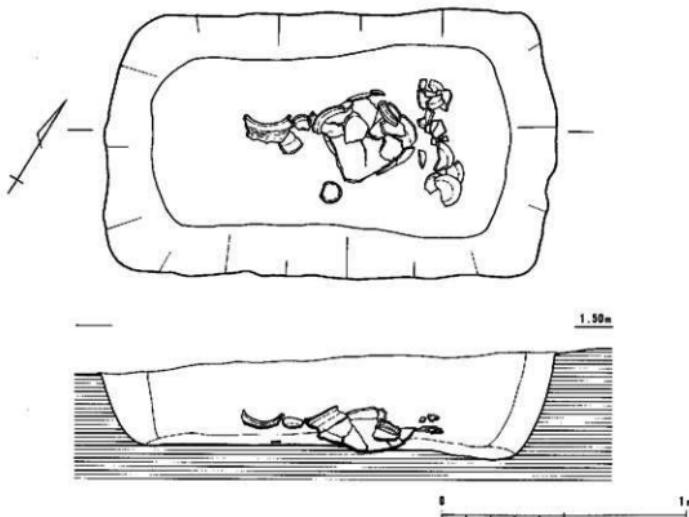


Fig. 4 SK-01実測図 (1/20)

#### 出土遺物 (Fig. 5、PL. 2)

1～6は土師器小皿である。底部外面の切り離しは、すべて糸切りである。1は口径8.0cm、底径6.2cm、器高1.5cmを測る。2は口径7.8cm、底径6.0cm、器高1.3cmを測る。胎土中に雲母がみられる。3口径7.6cm、底径6.6cm、器高1.2cmを測る。4は口径8.4cm、底径7.0cm、器高1.4cmを測る。5は口径7.8cm、底径4.8cm、器高1.3cmを測る。6は口径8.2cm、底径6.2cm、器高1.5cmを測る。7～14は土師器壊である。底部外面の切り離しは、すべて糸切りである。7は口径12.4cm、底径8.2cm、器高2.6cmを測る。8は口径12.7cm、底径8.0cm、器高2.6cmを測る。9は口径11.6cm、底径8.0cm、器高2.8cmを測る。10は口径12.3cm、底径7.8cm、器高2.5cmを測る。11は口径12.6cm、底径9.1cm、器高2.5cmを測る。12は口径12.3cm、底径8.2cm、器高2.6cmを測る。13は口径12.4cm、底径7.6cm、器高2.9cmを測る。14は口径12.5cm、底径8.4cm、器高3.1cmを測る。15は壺である。最大径は胸部のやや上部にあり、口縁は上方にまっすぐのびる。口径22.0cm、底径13.0cm、器高31.3cmを測る。内外面ともにハケ目と横ナデによる器面調整をおこなっており、胎土は焼成が不良のためか瓦質であり、色調は黒灰色を呈する。

#### 2 井戸 (SE)

報告するものは1基のみであるが調査区南西隅、北西隅などに井戸の掘方状の落ちが確認されたが調査区外にのびるために井戸である確証は得られなかった。

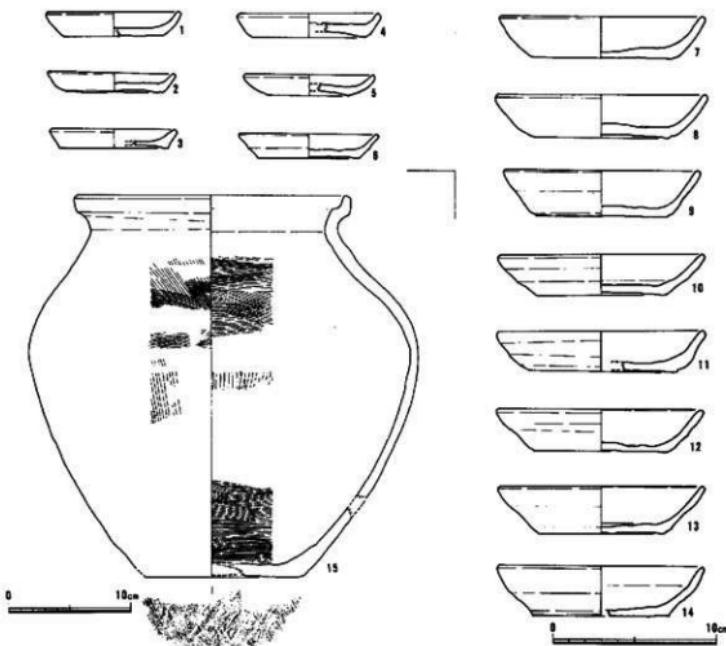


Fig. 5 SK-01出土遺物実測図 (1/3・1/4)

#### SE-01 (Fig. 6, PL. 1)

調査区南西にて確認された。SK-01に切られる。地山面における径は7.7mを測り、中央部に木桶による井戸枠がみられた。木桶は下部の2段が残存していた。上の桶は現存で幅約10cm、厚さ2~5cmを測る板材がみられた。下の桶は現存で幅9~10cm、厚さ5~7cmの板材がみられた。調査時にタガは残存していなかった。また、現在の湧水レベルは海拔0.35mであった。所属時代はSK-01に切られるが、出土遺物にあまり時代差がみられない。時代は1~5世紀代と思われる。

#### 出土遺物 (Fig. 7, PL. 2)

井戸枠内から出土した遺物は25の壺と29の合子である。16~18は土師器小皿である。底部外面の切り離しは、すべて糸切りである。16は口径7.6cm、底径5.2cm、器高1.3cmを測る。17は口径7.8cm、底径5.8cm、器高1.5cmを測る。18は口径7.5cm、底径5.8cm、器高1.1cmを測る。19~27は土師器壺である。底部外面の切り離しは、すべて糸切りである。19は口径12.4cm、底径8.2cm、器高2.4cmを測る。20は口径12.8cm、底径8.0cm、器高2.5cmを測る。21は口径12.6cm、底径9.8cm、器高2.7cmを測る。22は口径12.2cm、底径9.0cm、器高2.6cmを測る。23は口径12.4cm、底径8.2cm、器高2.9cmを測る。24は口径12.8cm、底径9.3cm、器高2.8cmを測る。25は口径12.9cm、底径8.0cm、器高2.7cmを測る。26は口径11.8cm、底径8.1cm、器高2.7cmを測る。底部外間に板状痕が残る。27は口径12.8cm、底径8.0cm、器高2.6cmを測る。底部外面に板状痕がみられる。28は瓦質の高台付壺である。底径6.4cmを測り、黒灰色

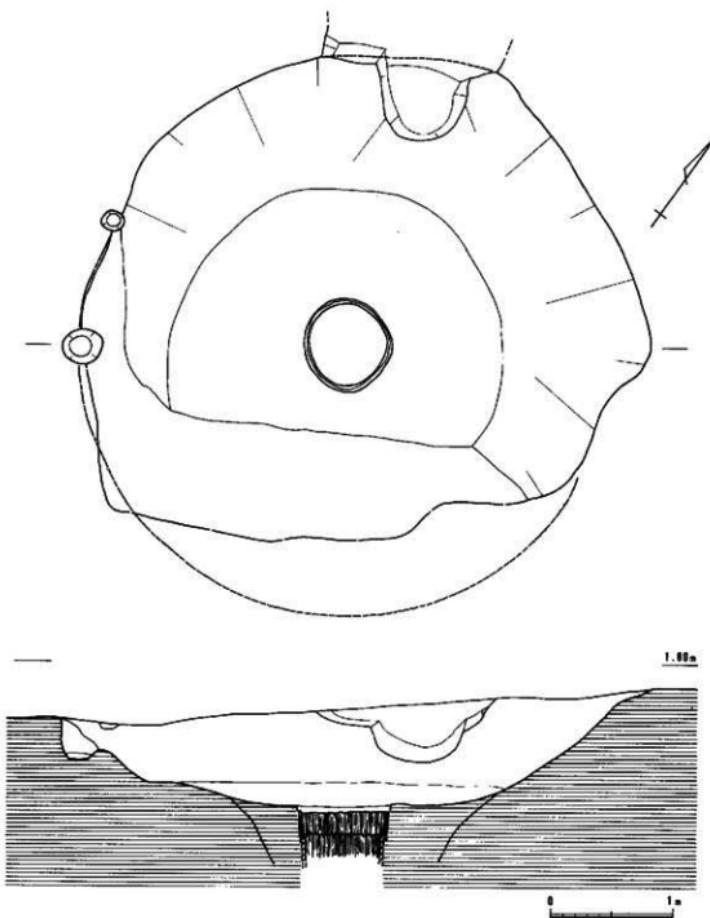


Fig. 6 SE-01火測図 (1/40)

を呈する。29は青白磁の合子の蓋である。釉はガラス質で白灰オリーブ色を呈する。

### 3 柱穴 (SP)

今回の調査において、56穴のピットを検出した。埋土は大きく分けて黒褐色砂質土と灰褐色砂質土のものがあるが、明瞭には分かれないものも多くあった。また、根石などの石を敷くものも10穴

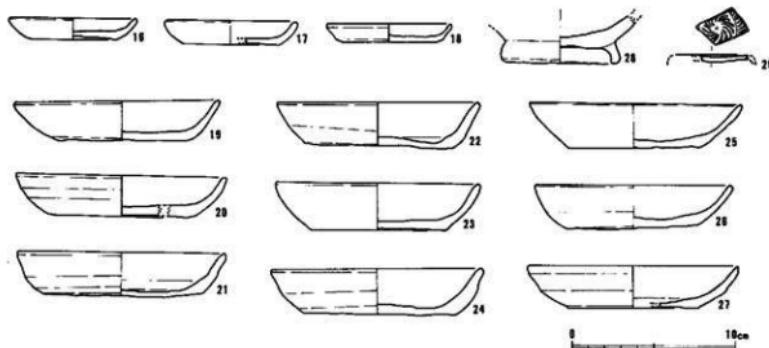


Fig. 7 SE-01出土遺物実測図 (1/3)

以上みられたが、建物として規模等が復元できるものは調査面積が狭く特定できなかった。

#### 出土遺物 (Fig. 8)

30はS P-02から出土した象嵌青磁である。小片であるため器形は不明である。31～36はS P-05出土の遺物である。31～35は土師器の壊である。底部外面の切り離しは糸切りである。31は口径11.6cm、底径8.0cm、器高2.9cmを測る。底部外面に板状圧痕が残る。32は口径11.6cm、底径8.5cm、器高2.3cmを測る。底部外面に板状圧痕がみられる。33は底径8.6cmを測る。底部外面に板状圧痕がみられる。34は底径8.9cmを測る。35は口径13.0cm、底径9.1cm、器高2.9cmを測る。底部外面に板状圧痕が残る。36は白磁碗である。内面見込みにスタンプ文があり、釉色はうすいオリーブ色を呈する。高台径4.2cmを測る。37～39はS P-07から出土したものである。37は土師器小皿である。口径7.4cm、底径5.6cm、器高1.3cmを測る。38は口径8.2cm、底径6.5cm、器高1.6cmを測る土師器小皿である。39は口径12.5cm、底径8.8cm、器高2.6cmを測る土師器壊である。40はS P-16から出土した土師器壊である。口径11.4cm、底径7.6cm、器高2.6cmを測る。41、42はS P-25から出土した遺物である。41は口径8.0cm、底径6.6cm、器高1.3cmを測る。土師器小皿である。42は高台径6.4cmを測る。高台付杯である。43はS P-33から出土した土師器壊である。口径12.8cm、底径9.2cm、器高2.7cmを測る。44はS P-35出土の滑石製石鍋である。口径16.9cmを測る。45、46はS P-43から出土した。45は口径8.8cm、底径7.0cm、器高1.3cmを測る土師器小皿である。底部外面に板状圧痕がみられる。46は口径12.4cm、底径9.0cm、器高2.7cmを測る土師器壊である。47、48はS P-54出土の上師器小皿である。47は口径8.2cm、底径6.0cm、器高1.4cmを測る。底部外面に板状圧痕が残る。48は口径8.6cm、底径5.6cm、器高1.7cmを測る。49はS P-46から出土した砥石である。4面の使用面がみられる。50、51はS P-49から出土した遺物である。50は口径7.8cm、底径6.0cm、器高1.4cmを測る土師器小皿である。51は口径12.0cm、底径8.2cm、器高2.3cmを測る土師器壊である。52はS P-55から出土した国産陶器の捏鉢である。口径29.3cm、高台径19.3cm、器高22.1cmを測る。

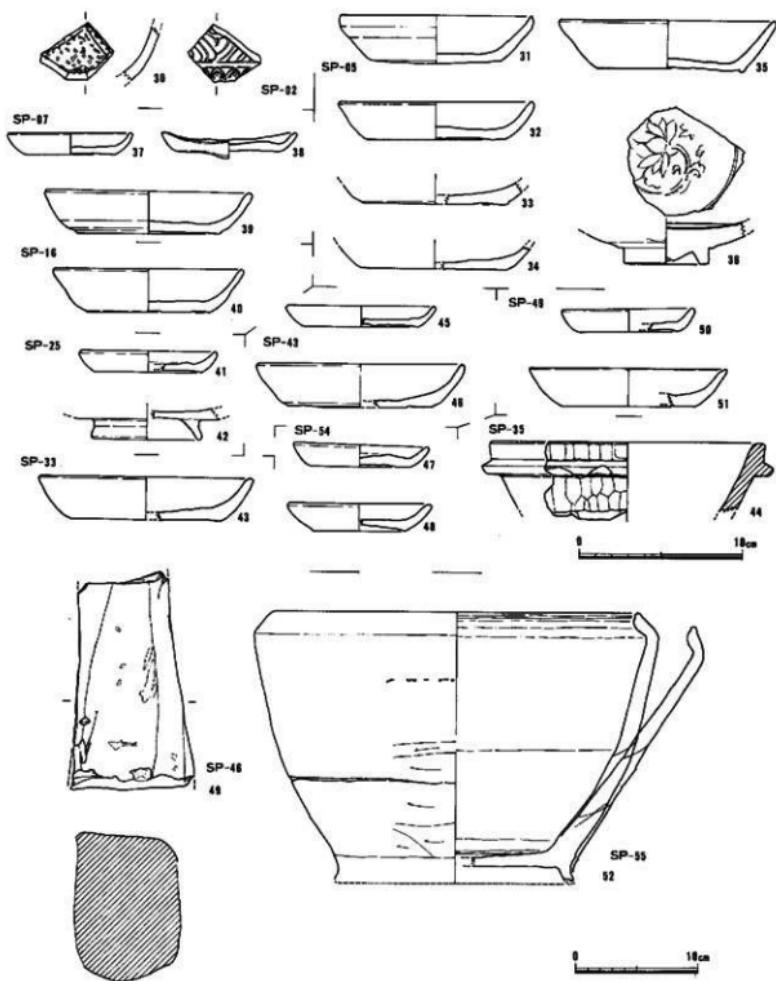


Fig. 8 S P 出土遺物実測図 (1/3 \* 1/4)

#### 4 出土銅錢・遺構確認他

出土銅錢 (Fig. 9)

53はS E -01出土の銅錢である。外径2.5cm、外縁厚0.13cmを測る。54はS P -24出土で外縁厚0.12cmを測る。55は遺構検出時に出土した。外径2.44cm、外縁厚0.15cmを測る。

### 遺構確認時出土遺物

ここにとりあげる遺物は上層の残土から出土したものと、遺構検出作業時に出土した遺物である。

SE-01	SP-24	遺構検出面
		
53 元祐通寶 1086年初鑄	54 □觀通□ 不明	55 熙寧元寶 1068年初鑄

### 出土遺物 (Fig. 10)

56、57は土師器小皿である。56は口径8.4cm、底径6.2cm、器高1.3cmを測る。底部外面に板状圧痕が残る。57は口径6.5cm、底径4.2cm、器高1.9cmを測る。58～60は土師器壊である。58は口径12.7cm、底径8.8cm、器高2.8cmを測る。59は口径13.0cm、底径7.6cm、器高2.8cmを測る。底部外面に鉄滓が付着している。60は口径12.4cm、底径8.0cm、器高3.0cmを測る。底部外面に板状圧痕がみられる。61は残存長3.7cmを測る土錘である。

Fig. 9 出土銅錢拓影 (1/1)

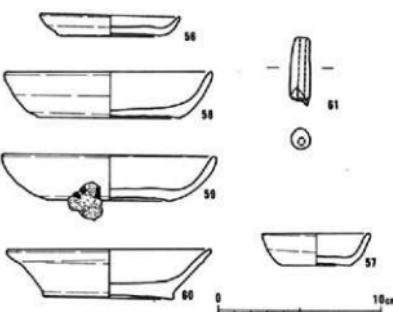


Fig. 10 遺構検出時出土遺物 (1/3)



Ph. 1 91次作業風景

## 5 小 結

今回の調査地点は博多において最も海寄りに位置する。この地は11世紀末ごろの海岸線（河口部）にあたると考えられており、調査地の北側、現在の昭和通りあたりが微高地の頂点で、調査地に向けて低くなると推定されている。

砂層上面で15世紀代の井戸、土坑、柱穴などの生活遺構を検出した。井戸は桶組みのもので、現在の湧水点（海拔0.35m）の下にまでびていた。土坑は廃棄土坑と思われ、壺、小皿、壺などが中央部に廃棄されていた。検出当初は平面形が隅丸長方形を呈することから土坑墓の可能性も考えられたが、同時期の周辺の状況と遺物の出土状況から廃棄土坑とした。柱穴は博多遺跡内ではよく見られる砂層を基盤とする底面に平たい礫を敷いたものが複数確認されたが調査面積の限界から建物の規模、方向などは特定できなかった。

調査地内において、検出面の砂層は海拔1.3mでほぼ平坦であり、南側に傾斜する状況はみられなかった。また、検出遺構においても15世紀を大きく越えるものは検出されず、井戸の調査による砂層の観察においても遺構はみられなかった。このようなことから、微高地の南側が陸地化する時期は、急速な砂層の成長による陸地化がみられる微高地海側に比べ、遅れるものと考えられる。



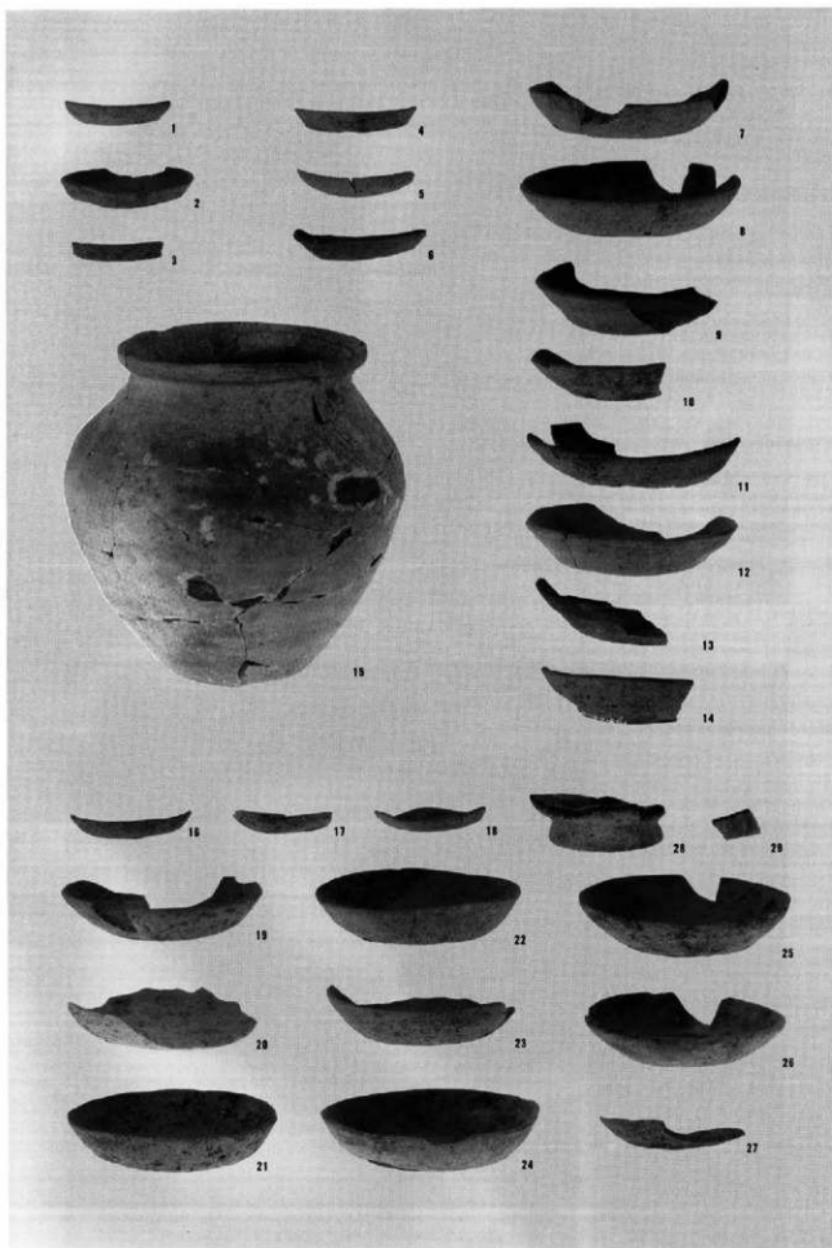
Ph. 2 91次調査全景



(1) SK-01 遺物出土状況（南東から）



(2) SE-01 検出状況（南東から）



第91次調査出土遺物

## 第2章 第93次調査の記録

### I はじめに

#### 1 調査に至る経過

1995年6月20日、博多区古門戸町83番外7筆における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財課事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの博多遺跡群の北側に位置している。福岡市教育委員会が、これを受けて1995年10月11日に試掘調査を実施した。現況は宅地で、調査の結果、地表下約2.0mの黄茶褐色砂質土上面と20~30cm下位の黄褐色砂層上面にて遺構が確認された。よって、面積465m<sup>2</sup>を対象に記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は1995年12月1日~1996年2月5日まで行った。

#### 2 調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 尾花剛（前） 町田英俊（現）

調査総括 文化財部長 後藤直

埋蔵文化財課長 崎井輝勝

埋蔵文化財課第2係長 山口讓治

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 内野保基 西田結香

調査担当 埋蔵文化財課第2係 加藤隆也

試掘調査 山崎龍雄 池田祐司

発掘作業員 尾崎康子 賀山道子 楠本純次 小山隆 高橋茂子 辻美佐江 栃木伸一 三原章司

大塙皓 甲斐生耕 石橋テル子 岡部静江 金子由利子 清原ユリ子 下司昭枝

小松富美 真田弘二 坂本ハッ子 佐藤テル子 指山歌子 指山浩子 柴田タツ子

柴田常人 島崎昭二 吉川春美 西尾タツヨ 堀ウメ子 堀川ヒロ子 松井フユ子

水野由美子 門司弘子 遠藤貞子 寺嶋道子



Fig. 11 第93次調査地点周辺図 (1/2,000)

## II 調査の記録

### 概要

今回の調査地点は「息の濱」とよばれる海側の地区に位置する。地山面である黄褐色砂層は調査区内ではほぼ平坦であり、北側への傾斜はみられない。

調査は試掘の成果から、地山の黄褐色砂層の上に約20~30cm堆積する黄茶褐色砂質土の上面を第1面、地山の上面を第2面とすることとした。

重機により表土約2mを剥ぎ取った。その時点で東側に約13m×9m、西側に約7m×6mの現代建物の地下室による擾乱が確認された。調査地はL字形をしており、排土の処理を考え、まず調査区西側の約2/3をA区として第1面、第2面の調査をおこなった。その間、調査区東側約1/3のB区は排土置き場として使用し、A区調査終了後排土を搬出しB区の第1面、第2面の調査を行った。また、井戸はA区、B区両区とも第2面調査終了後掘削と図化作業をおこなった。

つまり作業は、A区第1面→A区第2面→A区井戸→B区第1面→B区第2面→B区井戸→トンネル調査の手順である。

今回の報告は調査の手順に従わず、A区・B区の第1面検出遺構、A区・B区の第2面検出遺構、第1面・第2面検出井戸の順序とする。

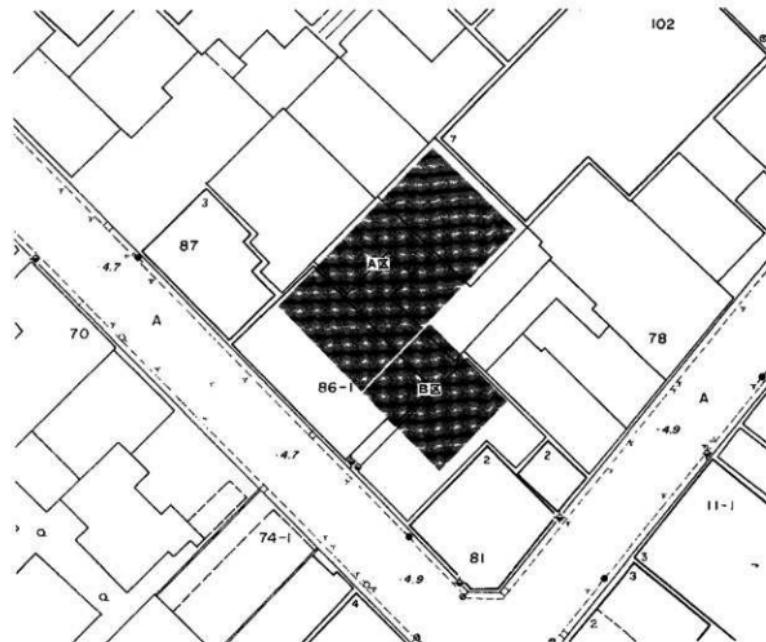


Fig. 12 第93次調査地点位置図 (1/500)

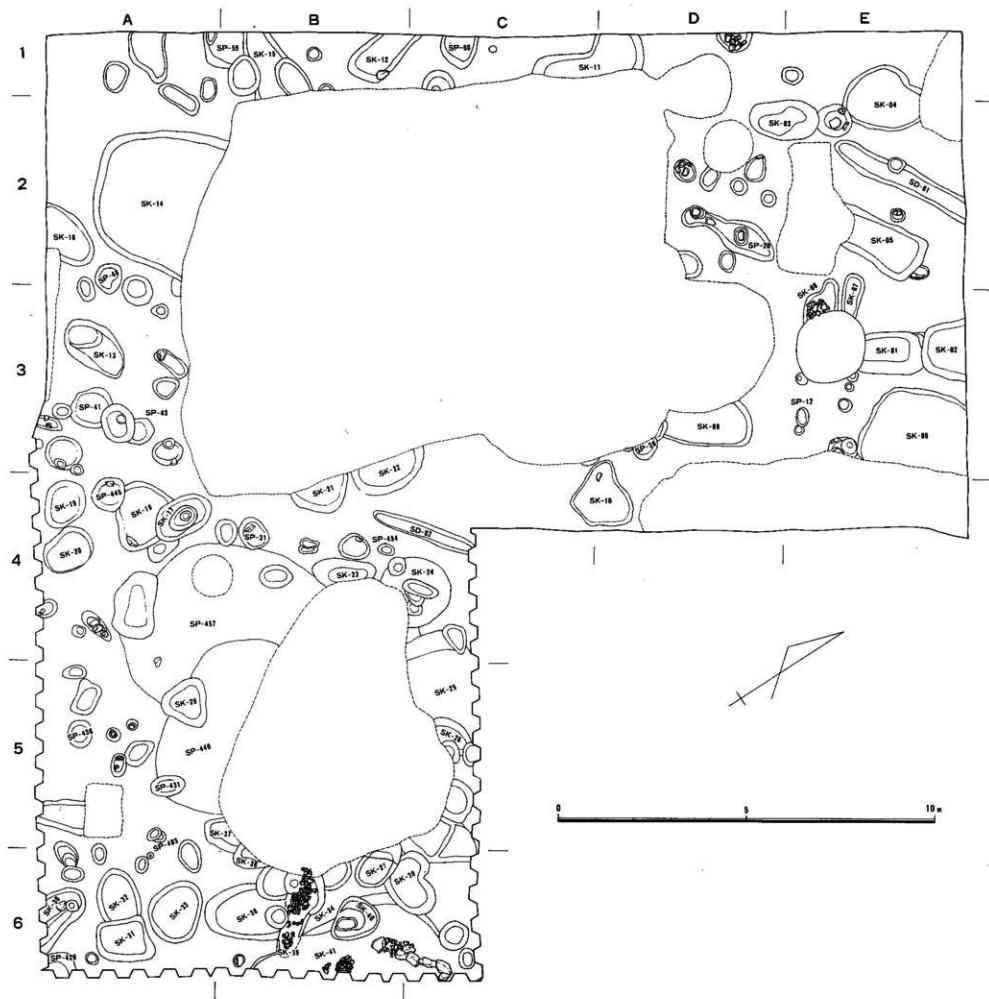


Fig. 13 第1面造構配図 (1/100)

## 1 第1面の調査

### (1) 土坑 (SK)

#### SK-01 (Fig. 14, PL. 5)

A区北側にて検出された。北側はSK-02に、南側は現代擾乱に切られる。短軸は1.1m、深さ70cmを測り、底面は平坦である。近世に属する遺構である。

出土遺物 (Fig. 19) 1は唐津の水指である。

#### SK-02 (Fig. 14, PL. 5)

SK-01の北側に位置し、遺構は北側調査区外へのびる。深さは80cmを測り、底面は平坦である。遺構の時代は出土遺物から18世紀後半以降と思われる。

出土遺物 (Fig. 19, 46) 2～9は土師器小皿である。10は龍泉窯系青磁香か、11は白磁碗、12は白磁壺、13～19、22は伊万里染付、20は染付碗、21は染付小碗である。23～25は鉄製品である。23は残存長さ12.1cm、幅1.7cm、厚さ0.8cmを測り、2本の突出部をもつ。24は残存長11.4cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。25は断面の長軸0.4cm、短軸0.3cmを測る。

#### SK-03 (Fig. 14)

A区南側に位置する。長軸は1.85m、短軸1.05mを測り、平面は楕円形を呈する。底面は南側がやや低い。時代は遺物から18世紀後半以降と思われる。

出土遺物 (Fig. 20) 26は土師器小皿である。27～35は染付である。30、31は伊万里のものである。

#### SK-04 (Fig. 14)

A区南側に位置し、北側を擾乱に切られる。短軸1.7mを測り、平面は不定形を呈する。遺構の時期は遺物から18世紀後半と思われる。

出土遺物 (Fig. 20) 38、39は土師器の小皿であり、38は灯明皿として使用されたと思われ口唇部にススが付着している。40は土師器の壺である。41は白磁碗、42～44は染付で42、43は伊万里のものである。

#### SK-06 (Fig. 14)

A区北東隅に位置し、東側は擾乱に切られ、遺構は北側調査区外へのびる。深さは約10cmを測り、底面は平坦である。遺構の時期は出土遺物から18世紀代のものである。

出土遺物 (Fig. 20) 45は黒色土器Bの壺である。46、47は土師器の壺である。48は白磁の碗で九州産陶磁であろうか。

#### SK-07 (Fig. 14)

A区北側に位置し、南側は現代擾乱に切られる。短軸は約50cm、深さは約10cmを測り、床面は平坦である。

出土遺物 (Fig. 20) 49は天目の碗である。

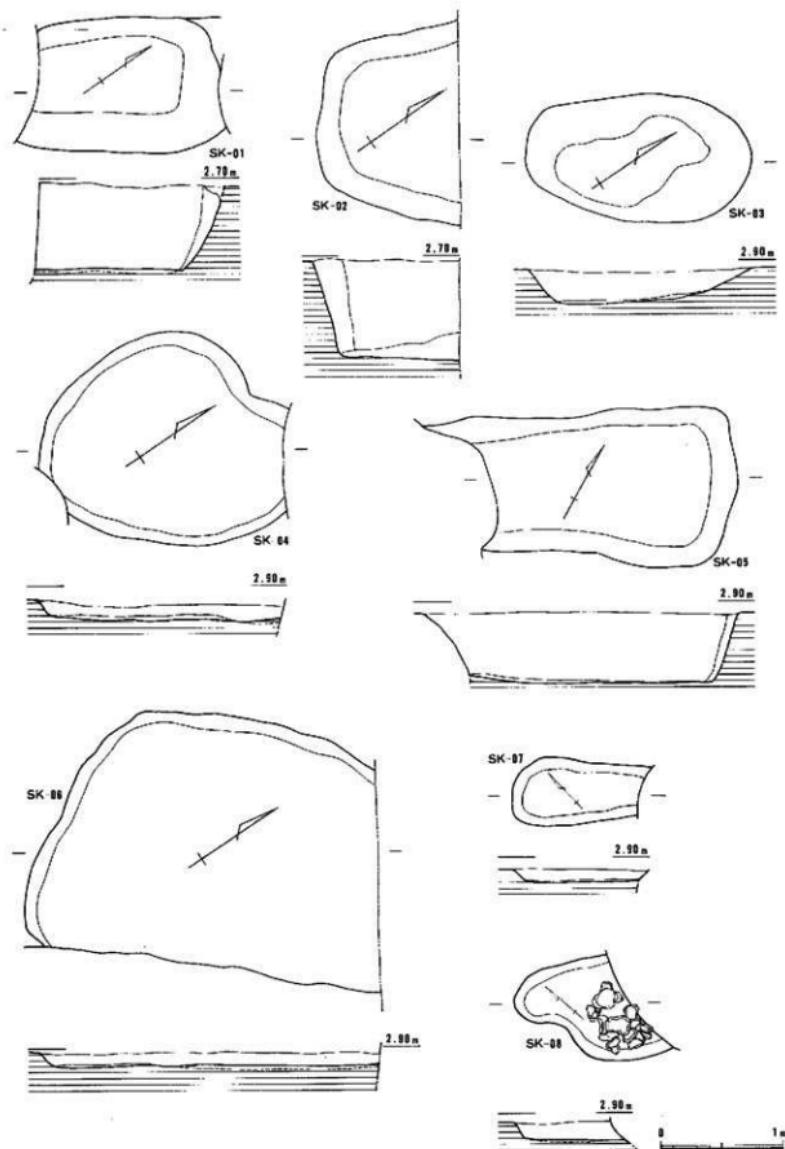


Fig. 14 SK-01~08実測図 (1/40)

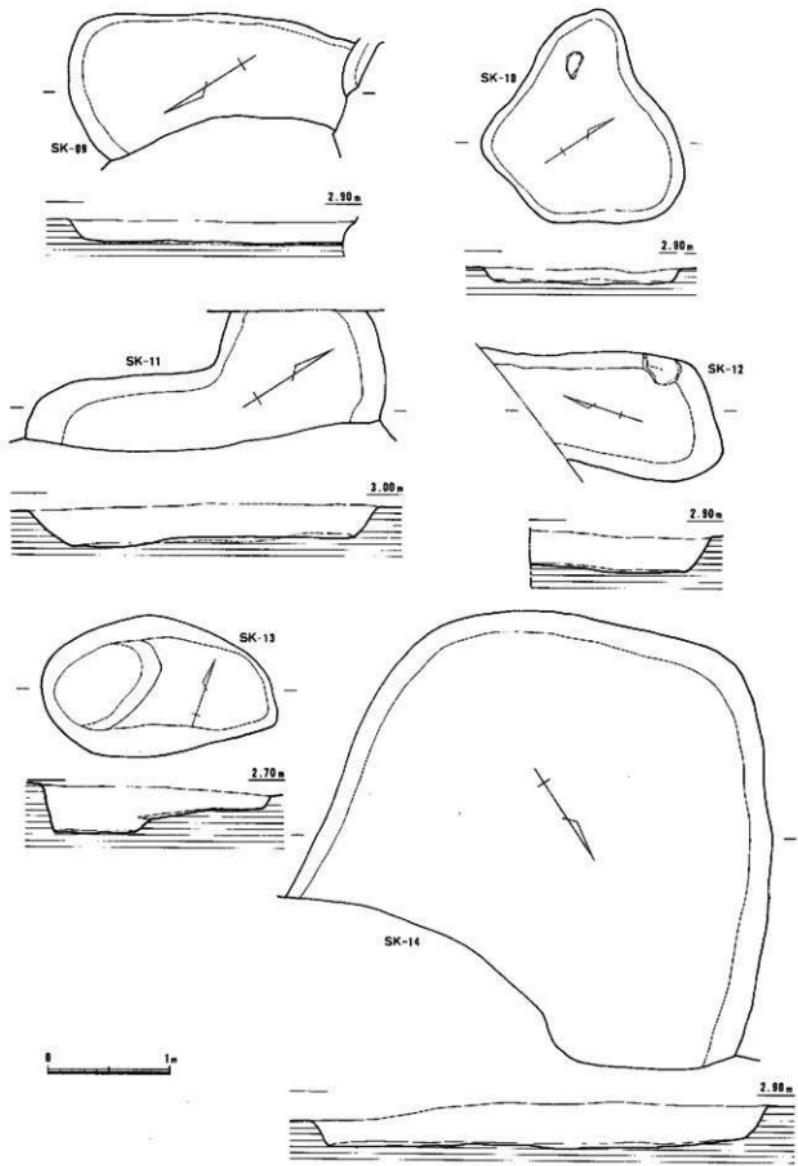


Fig. 15 SK-09~14実測図 (1/40)

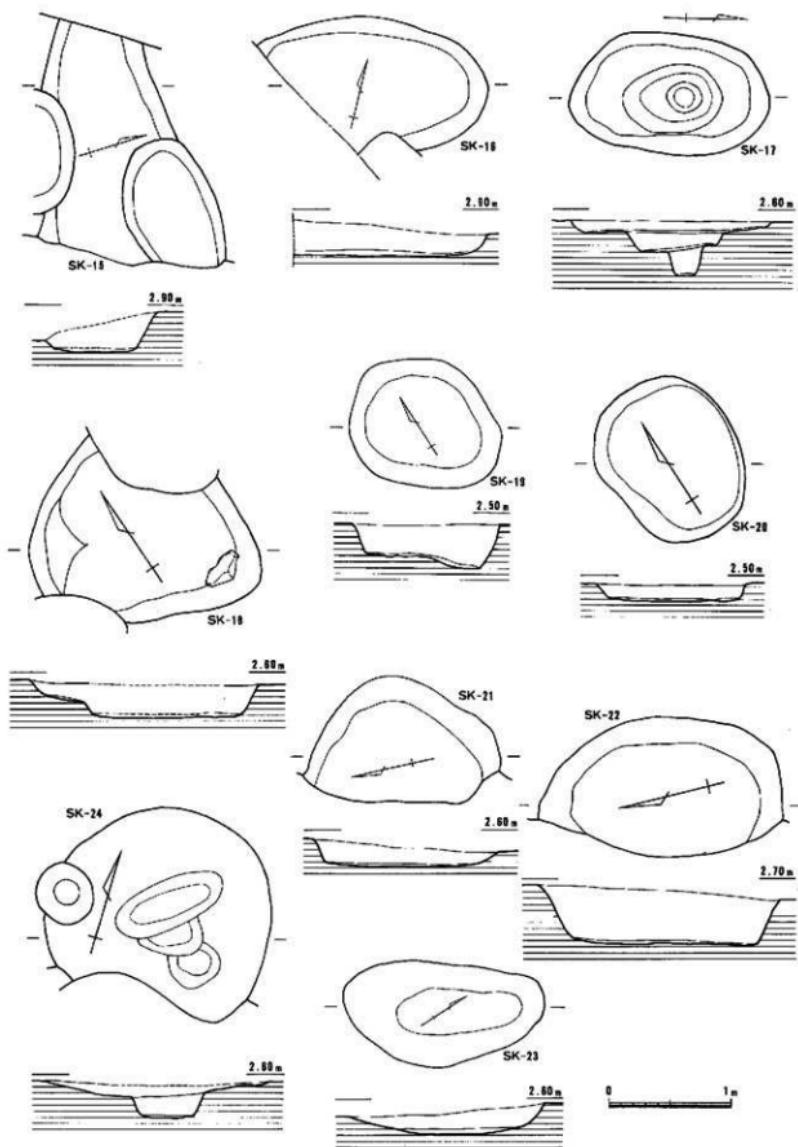


Fig. 16 SK-15~24実測図 (1/40)

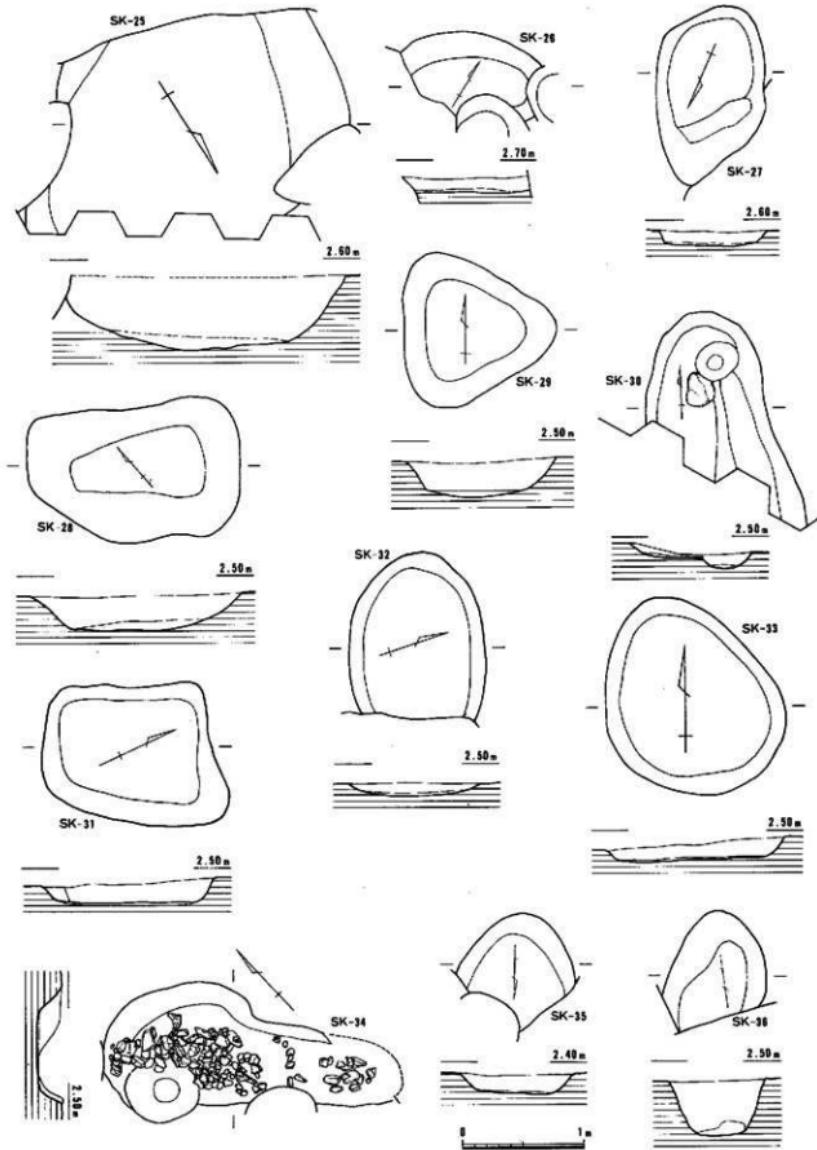


Fig. 17 SK-25~36実測図 (1/40)

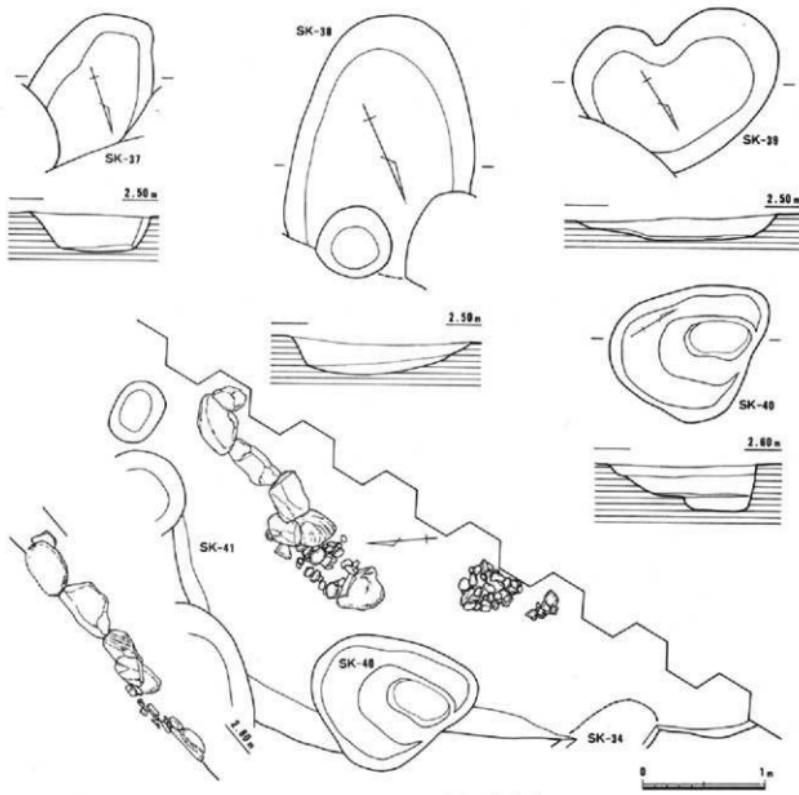


Fig. 18 SK-37~41実測図 (1/40)



Ph. 3  
SK-41側面  
(北から)

#### SK-08 (Fig. 14)

SK-07の南西側に位置し、南側は擾乱に切られる。5cm～20cmの集石がみられる。

出土遺物 (Fig. 20) 50は土師器の壺である。

#### SK-09 (Fig. 15)

A区北東部に位置し、西側は擾乱に切られる。平面形は不明である。深さは約17cmを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (Fig. 20) 51は鬼瓦の破片である。残存する幅は12.6cmを測る。

#### SK-10 (Fig. 15)

A区東側にて検出された。平面は長軸1.7m、短軸1.6mの不定形を呈し、深さは約10cmを測る。

出土遺物 (Fig. 20) 52は土師器の小皿、53は土師器の壺である。

#### SK-13 (Fig. 15)

A区南側に位置する。長軸1.9m、短軸1.1mを測り、底面は西側が約15cm一段低くなっている。時期は14世紀代と考える。

出土遺物 (Fig. 20) 54、55は土師器の壺である。

#### SK-14 (Fig. 15)

A区南側に位置する。北東側は擾乱に切られる。平面は不定形を呈し、深さは約35cmを測る。時期は16世紀代と思われる。

出土遺物 (Fig. 21) 56は土師器小皿である。57～59は土師器の壺である。壺口径の平均は13.2cmである。60は陶磁器、61は石製品で球形を呈し、5.1cmを測る。62は軒平瓦。63は飾りの瓦で、直徑19.6cmを測る。背面に吊すための取っ手が付き「須」の字と思われる。

#### SK-16 (Fig. 16)

A区南側に位置する。造構の西側は調査区外にのびる。底面はほぼ平坦である。

出土遺物 (Fig. 21) 64は土師器小皿の転用と思われ、立ち上がりを打ち欠き円盤状を呈する。

#### SK-17 (Fig. 16)

A区南側に位置する。平面は長軸1.65m、短軸1.0mを測る長楕円形を呈する。底面は三段に落ちがあり、柱穴の可能性もある。

出土遺物 (Fig. 21) 65は土師器小皿、66は土師器壺である。

#### SK-21 (Fig. 16)

A区東側に位置し、西側は擾乱に切られる。平面形は不明であるが、底面は平坦である。造構の時期は川土遺物から14世紀代と考えられる。

出土遺物 (Fig. 21) 67は土師器小皿であり、口縁部の内外にススがみられる。68～73は土師器壺である。壺口径の平均は13.0cmを測る。72、73の口縁部にはススの付着がみられる。

#### SK-22 (Fig. 16)

B区南側に位置し、西側は攪乱に切られる。

出土遺物 (Fig. 21) 74は土師器小皿。75は土師器壊である。

#### SK-24 (Fig. 16)

B区北側に位置する。南側を攪乱に切られる。平面は径約1.8mの円形を呈すると思われる。

出土遺物 (Fig. 21) 76はベトナム産の白磁碗である。

#### SK-25 (Fig. 17)

B区北側に位置する。南西側は攪乱に切られ、北東は調査区外へのびる。底面は中央部がやや低い。

出土遺物 (Fig. 21) 77は土師器小皿、78は土師器壊である。

#### SK-31 (Fig. 17)

B区南側に位置し、長軸1.4m、短軸1.1mを測る隅丸長方形を呈する。

出土遺物 (Fig. 21) 79、80は土師器小皿、81は土師器壊である。

#### SK-33 (Fig. 17)

B区南側に位置する。長軸1.7m、短軸1.4mの不定形を呈する。遺構の年代は出土遺物から14世紀と思われる。

出土遺物 (Fig. 21) 82~85は土師器の壊である。壊口径は13.0~10.2cmを測る。85は壊bである。86は瓦質の煮沸器である。

#### SK-34 (Fig. 17, 46, P.L. 5)

B区南東部に位置する。長軸2.5mを測り、溝状を呈する。底面には5cm~15cmの集石がみられる。

出土遺物 (Fig. 21) 87は白磁碗のIV類。88は褐釉陶器。89は青白磁合子の身。

#### SK-36 (Fig. 17)

B区南側に位置し、北側は攪乱に切られる。平面形は不明である。深さは45cmを測る。遺構の時代は遺物から16世紀代と考える。

出土遺物 (Fig. 22) 90は土師器の鍋である。

#### SK-37 (Fig. 18)

B区東側に位置し、SK-36、攪乱に切られる。平面形は不明である。深さは30cmを測る。

出土遺物 (Fig. 22) 91は土師器小皿。92~94は同安窯系青磁碗のII類である。

#### SK-38 (Fig. 18)

B区南側に位置する。SK-33、34に切られる。底面は中央部がやや深い。

出土遺物 (Fig. 22) 95は上師器小皿。96~98は龍泉窯系青磁碗であり、96、97、98はI類である。99は同安窯系青磁の碗II類、100は同安窯系青磁II類の平底皿。101は白磁壺。102は陶器B群の長壺、103は陶器の鉢である。

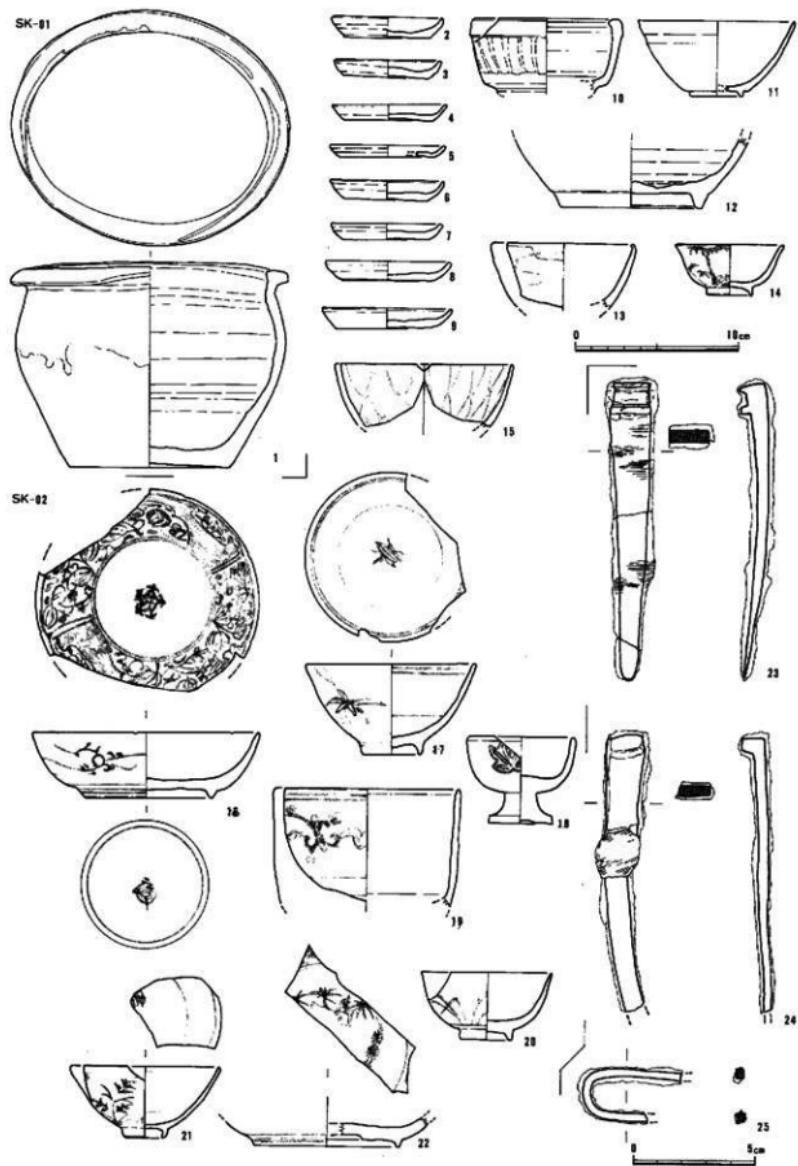


Fig. 19 SK-01~02出土遺物実測図 (1/2・1/3)

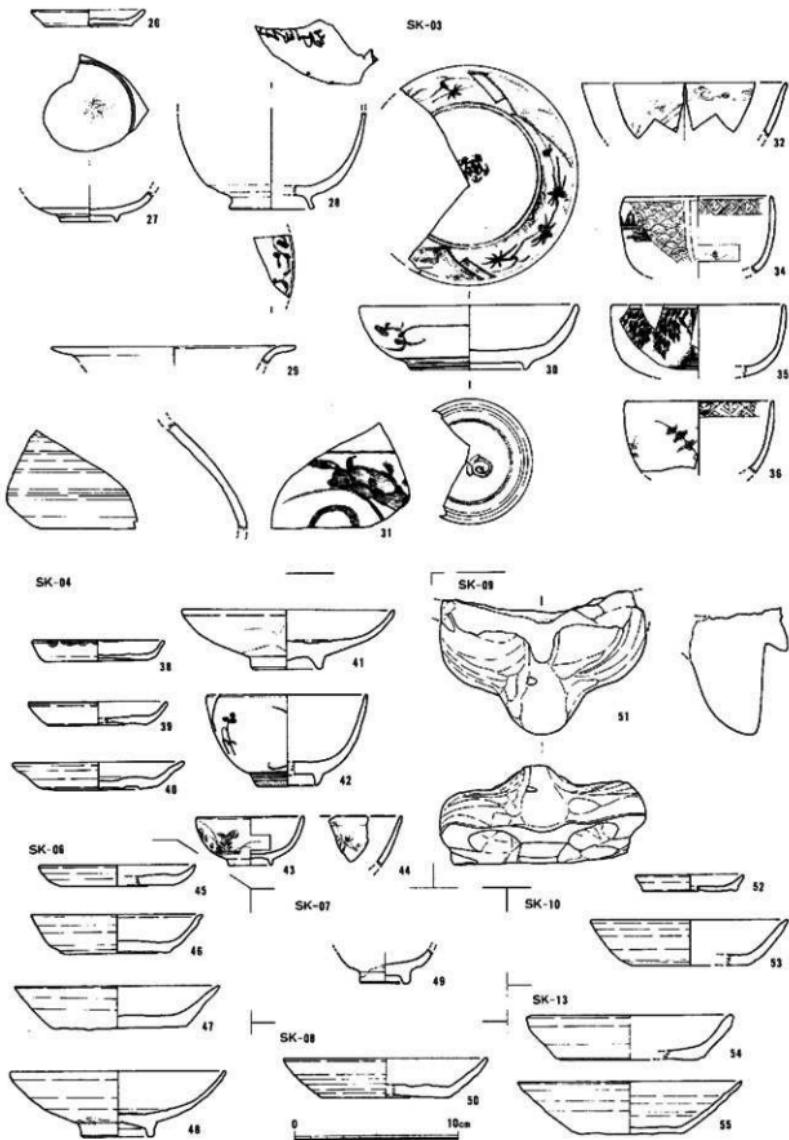


Fig. 20 SK-03~13出土遺物実測図 (1/3)

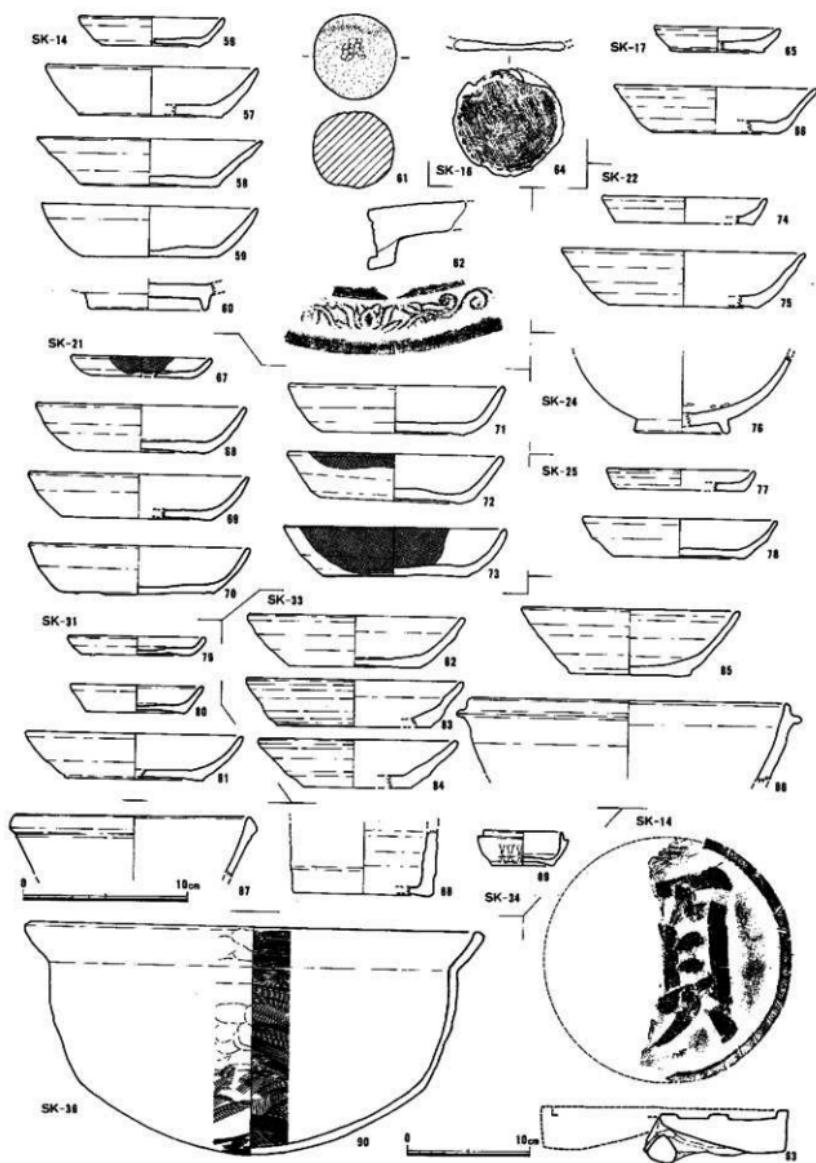


Fig. 21 SK-14~36 土山遺物実測図 (1/3・1/4)

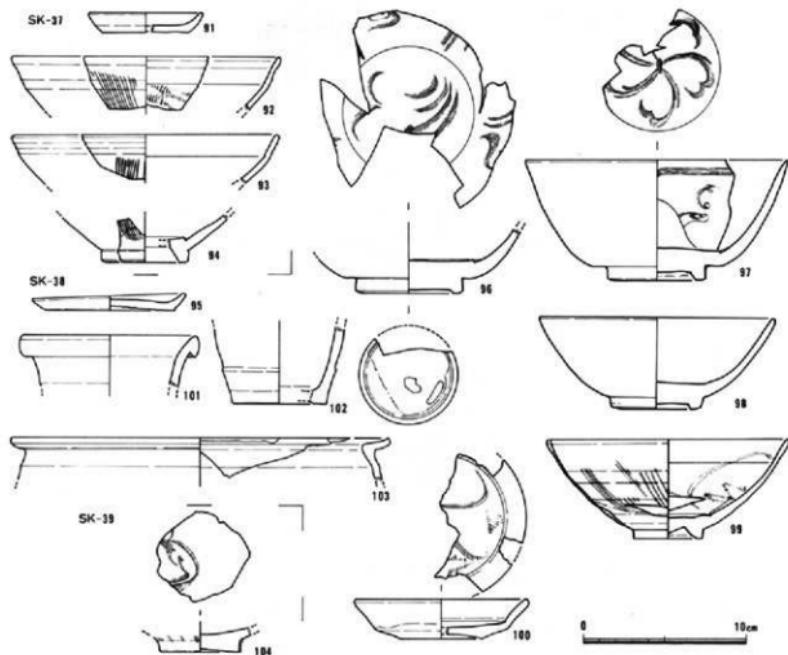
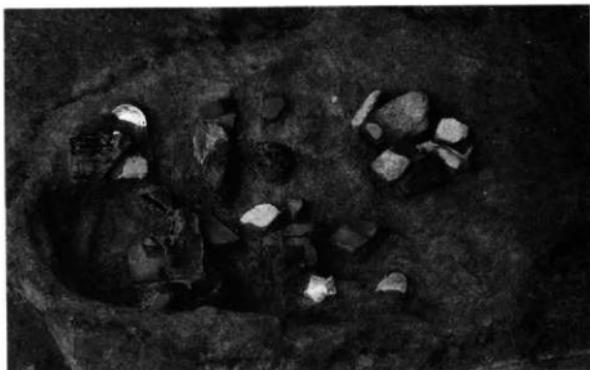


Fig. 22 SK-37~39出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 4  
SK-03遺物出土状況  
(南東から)

SK-39 (Fig. 18)

B区東側に位置する。平面は不定形を呈し、深さは約15cmを測る。

出土遺物 (Fig. 22, 46) 104は青白磁の碗である。

SK-41 (Fig. 18)

B区南東隅にて検出された。遺構は南東側の調査区外にひろがる。積石列と集石がみられる遺構である。その規模と性格は不明である。

(2) 柱穴 (SP)

出土遺物

(Fig. 23) 105はSP-12出土の土師器の小皿である。106はSP-20出土の土師器の壺である。107、108はSP-26出土の土師器小皿と朝鮮半島製の壺である。遺物の時代は17世紀前半頃である。109、110はSP-31出土の土師器小皿と李朝の碗である。111~113はSP-41から出土した。111、112は土師器小皿、113は瓦質の蓋である。114はSP-43からのもので黒褐釉の小壺である。115はSP-48出土の中国製陶器の破片である。116~119はSP-55出土遺物である。116~118は土師器の小皿である。119は土師器の壺で内外面に墨書きみられる。内面は解読できないが、外面には“鶴松”の字がみられる。祭祀に用いられた遺物である可能性が強い。時代は近世に属すると思われる。120~122はSP-60から出土した。120は陶器A群の鉢である。121、122は染付の碗である。123~127はSP-403の遺物である。123は土師器の壺である。124は同安窯系青磁I類の平底皿。125、126は青磁の碗である。127は瓦質の擂鉢である。遺物の時代は15世紀代であろう。128はSP-413出土の陶器A群の壺である。129はSP-420から出土した土師器小皿である。130はSP-431、131はSP-436出土の土師器小皿である。



Ph. 5  
B区第1面  
遺構検出作業風景

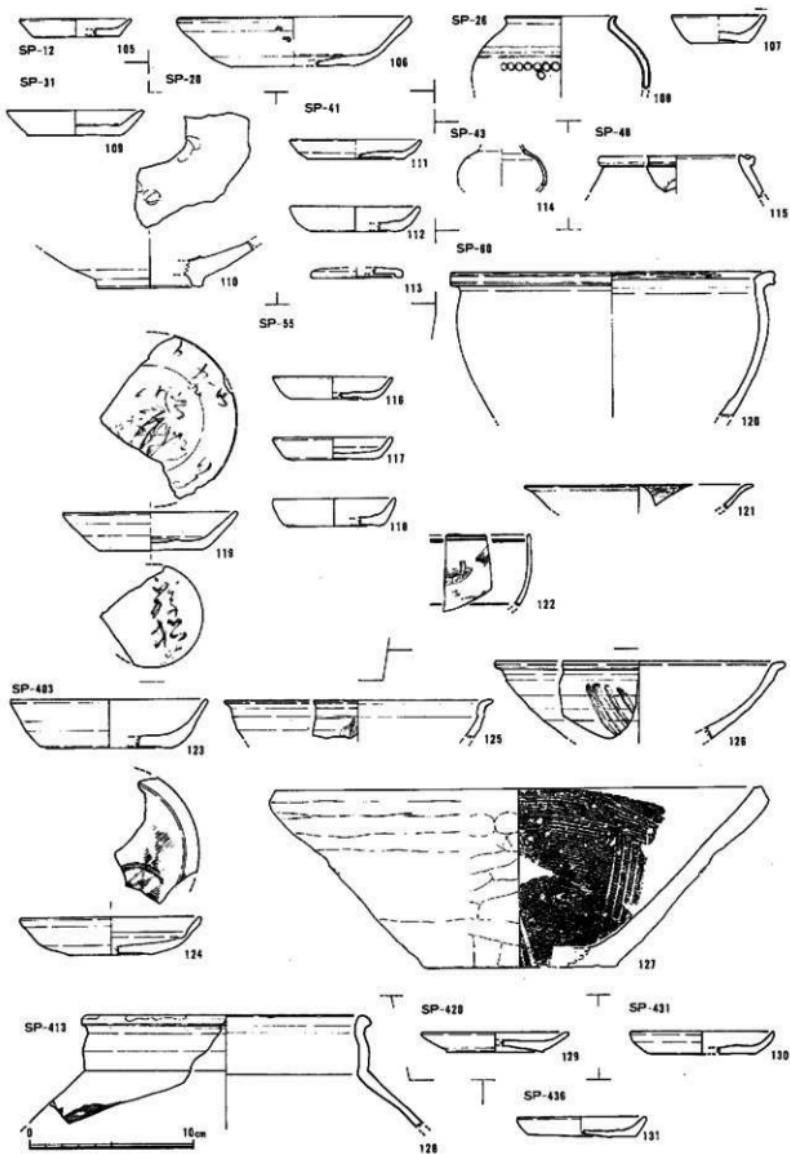


Fig. 23 SP-12~60、403~436出土遺物実測図 (1/3)

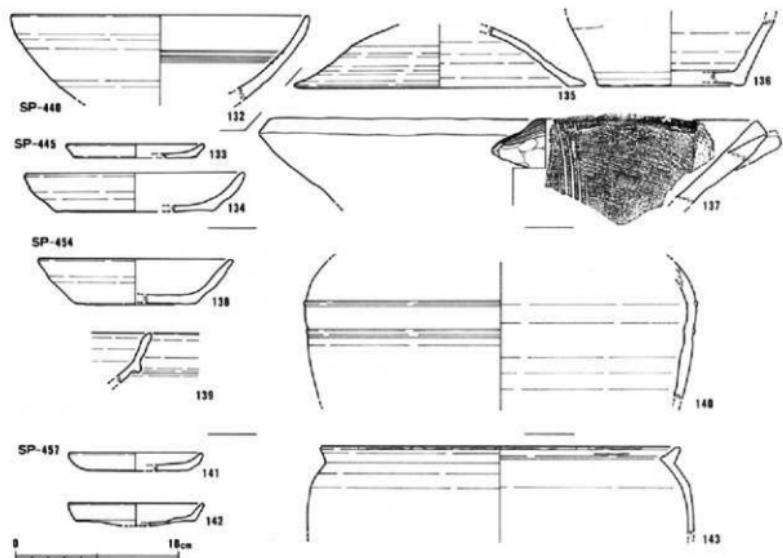
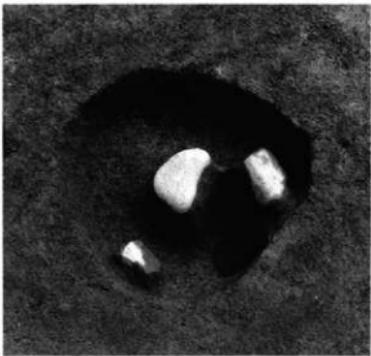


Fig. 24 SP-440~457出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 6 SP-06検出状況(南東から)



Ph. 7 SP-18検出状況(西から)

(Fig. 24) 132はS P - 440出土の李朝の碗である。133～137はS P - 445から出土した。133は土師器小皿、134は土師器の壺である。135、136は陶器A群の蓋と車持である。137は瓦質の擂鉢である。138～140はS P - 454出土遺物である。138は土師器の壺で、口唇部にスヌの付着がみられる。139、140は陶器の鉢と壺である。141～143はS P - 457出土である。141、142は土師器小皿、143は陶器B群の鉢である。 銅錢出土 (Fig. 46)

## 2 第2面の調査

### (1) 土坑 (SK)

#### SK-47 (Fig. 26)

A区北側に位置する。長軸1.25m、短軸70cm、深さ約50cmを測る。

出土遺物 (Fig. 32) 144、145は土師器の小皿。146は土師器の壺である。

#### SK-53 (Fig. 26)

A区北側に位置する。長軸2.2m、短軸1.4mを測る。底面は北側が一段落ちて、約35cm低くなっている。

出土遺物 (Fig. 32) 147、148は土師器の小皿である。149は天日の碗である。150は伊万里の皿、151は染付の碗である。

#### SK-54 (Fig. 26)

A区北側に位置し、SK-53に切られる。深さは約70cmを測る。

出土遺物 (Fig. 32) 152は土師器の壺である。

#### SK-56 (Fig. 27)

A区北側に位置し、SK-57に切られ、南西側を攪乱に切られる。平面は不定形を呈し、東側に径約50cmのピットがみられる。遺構の時代は出土遺物から17世紀初頭頃と考えられる。

出土遺物 (Fig. 32) 153、154は土師器の小皿と壺である。155は明代染付、156は青磁の人鉢である。

#### SK-66 (Fig. 27)

A区西側調査区端に位置する。遺構の北西側は調査区外へのびる。平面形は不定形を呈する。

出土遺物 (Fig. 33) 157、158は土師器の小皿である。

#### SK-67 (Fig. 27)

A区西側調査区端に位置する。遺構の北西側は調査区外へのびる。深さは約60cmを測り、底面は中央部がやや低くなる。

出土遺物 (Fig. 33) 159は土鍤である。残存する長さは5.1cm、断面直径は2.0cmを測り、穴の直径は0.7cmを測る。

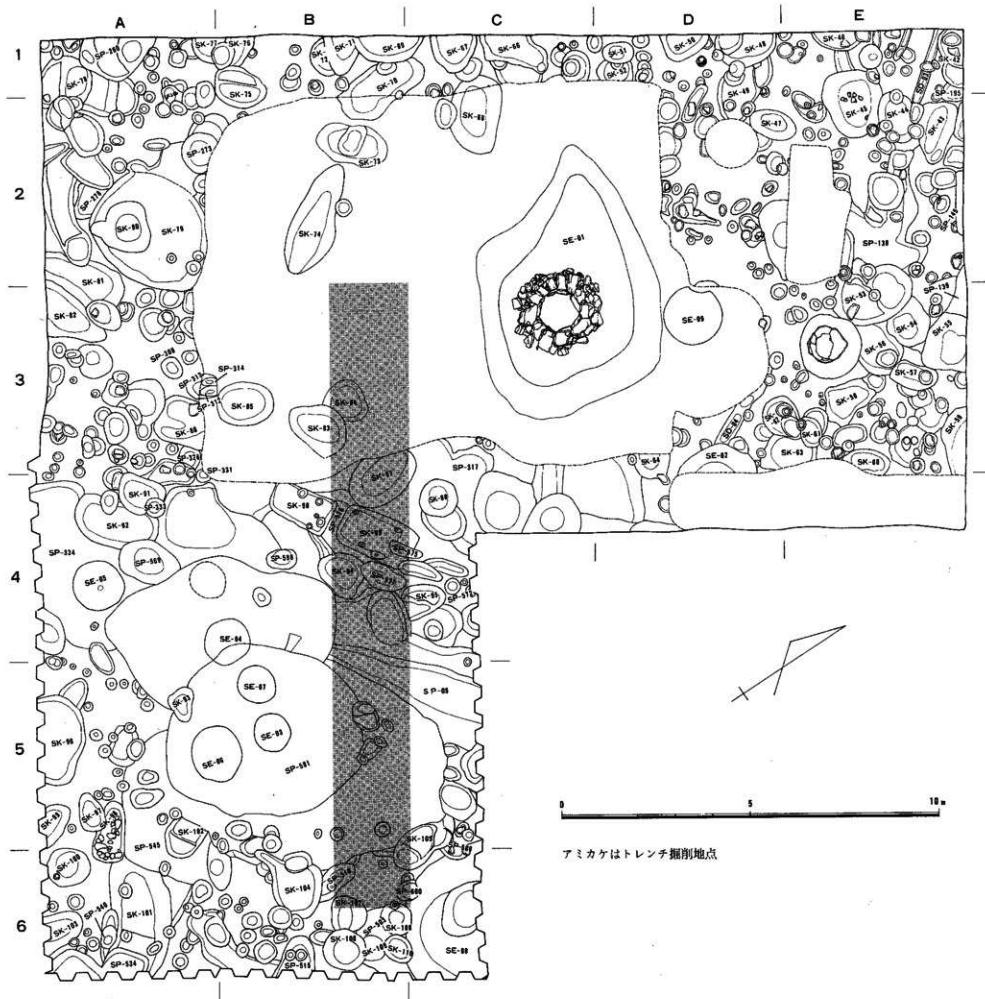


Fig. 25 第2面造構配置図 (1/100)

#### SK-68 (Fig. 28)

A区西側に位置し、長軸2.1m、短軸1.3mの長楕円形を呈する。遺構の南東側は攤乱に削られる。遺構の時期は14世紀後半ごろと考えられる。

出土遺物 (Fig. 33) 160、161は土師器の小皿である。162～171は土師器の壺である。172は不明滑石製品である。残存する長軸は12.8cm、短軸は8.2cm、厚さ0.9cmを測る。

#### SK-70 (Fig. 28)

A区西側に位置し、SK-69に切られる。長軸2.4m、短軸1.0mを測る。

出土遺物 (Fig. 33) 173、174は土師器の小皿と壺である。

#### SK-78 (Fig. 28)

A区西側隅に位置する。長軸2.6mを測り、底面は中央部に向けて階段状に段をもつ。

出土遺物 (Fig. 33) 175は土師器の小皿。176は陶器皿である。

#### SK-79 (Fig. 29, PL. 6)

A区南西側に位置しSK-80に切られる。長軸3.5m、短軸2.9mの不整楕円形を呈する。遺構の時期は13～14世紀ごろと思われる。

出土遺物 (Fig. 33) 177は土師器の小皿、178、179は土師器の壺である。180は陶器B群の四耳壺である。

#### SK-85 (Fig. 29)

A区南側に位置し、長軸1.5m、短軸1.15mの楕円形を呈する。

出土遺物 (Fig. 33) 181は同安窯系青磁II類の碗である。182は白磁VI類の碗である。183、184は陶器の盤と陶器A群の盤である。

#### SK-87 (Fig. 30)

A区南側に位置する。長軸1.95m、短軸1.3mを測り、平面は楕円形を呈する。

出土遺物 (Fig. 33) 185は土師器の小皿。186は龍泉窯系青磁のIII類の壺である。

#### SK-89 (Fig. 30, PL. 6)

A区南東側に位置し、SK-90と長軸の方向をあわせる。長軸の方位はN-60°-Eをとる。長軸2.05m、短軸1.2mを測り平面は開丸長方形を呈する。墓壙の形態をもつが鉄釘など、遺物はみられない。

#### SK-90 (Fig. 30, PL. 6)

A区南東側に位置し、長軸の方位はN-60°-Eをとる。長軸1.7m、短軸90cmを測る。SK-89と同じ性格が考えられるが、遺物は出土していない。

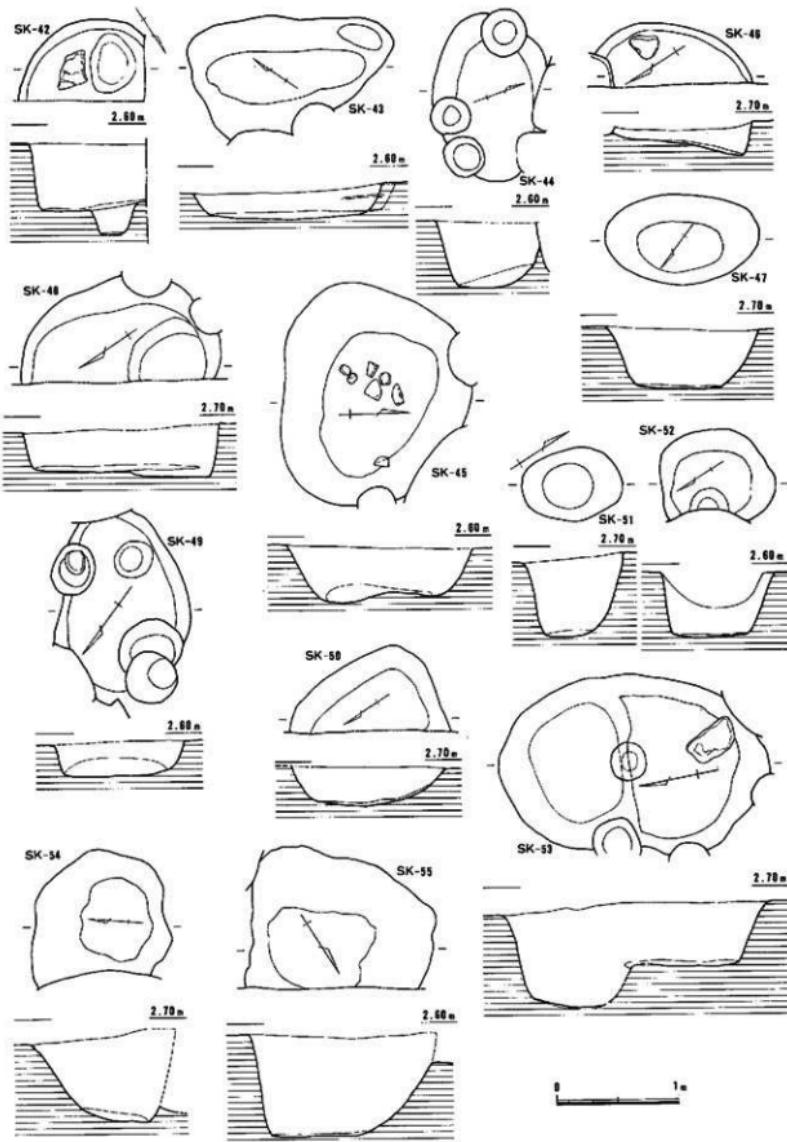


Fig. 26 SK-42~55実測図 (1/40)

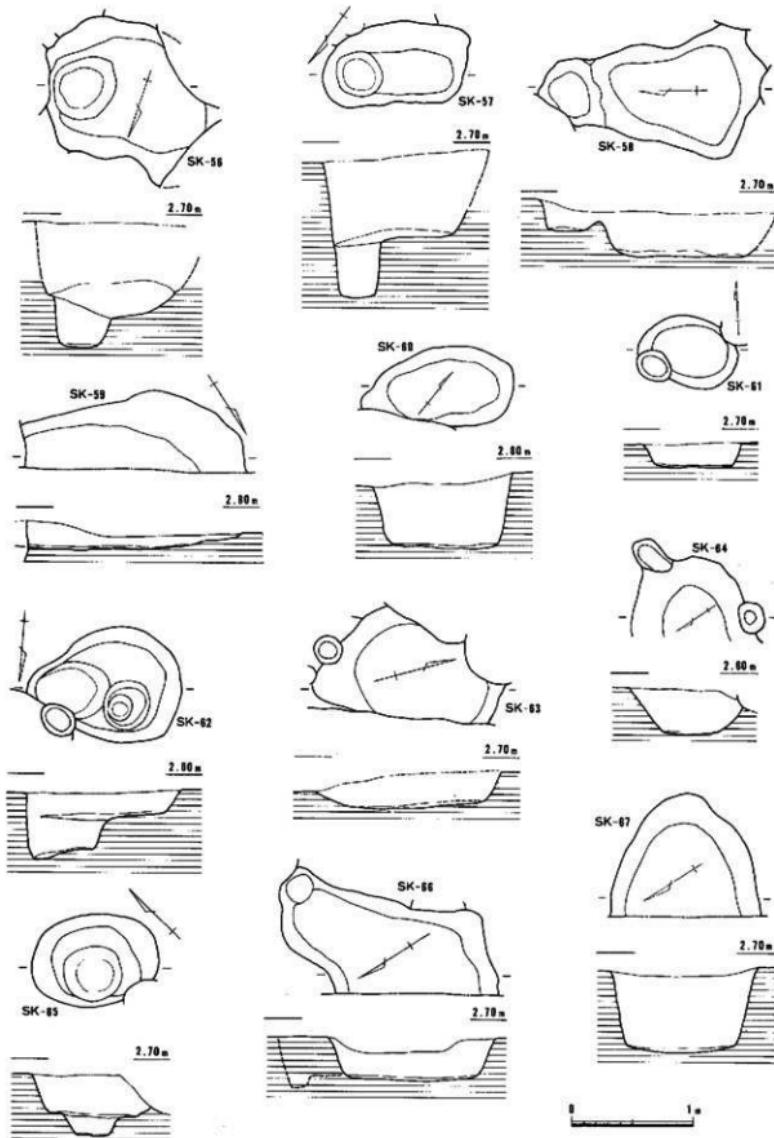


Fig. 27 SK-56~67実測図 (1/40)

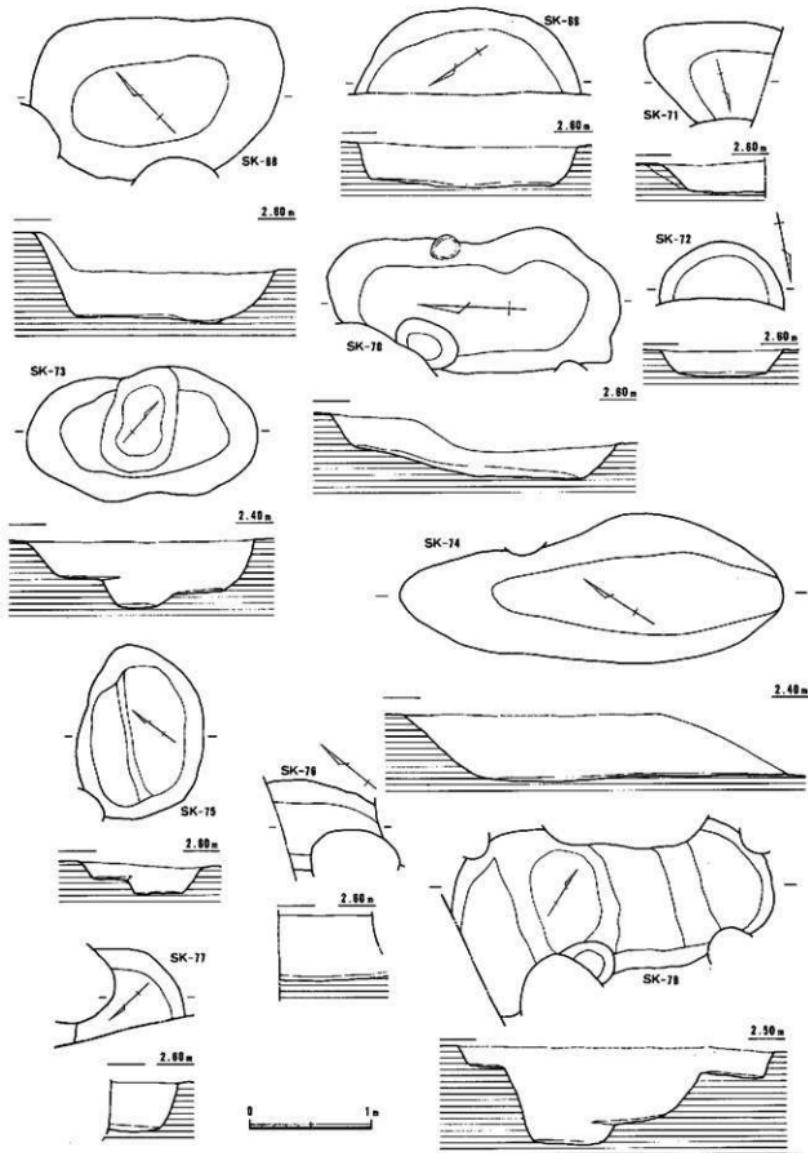


Fig. 28 S K - 68~78実測図 (1/40)

#### SK-91 (Fig. 30)

A区南側に位置し、SK-92を切る。長軸1.25m、短軸95cmの不定形を呈する。遺構の時代は14世紀前半と考える。

**出土遺物** (Fig. 33) 187、188は土師器の小皿である。187の口縁端部にススの付着がみられる。189～192は土師器の壺である。191の外面にススの付着がみられる。193は人目碗である。194は龍泉窯系青磁の碗である。

#### SK-95 (Fig. 30)

B区北側に位置する。南側は攢乱に切られる。

**出土遺物** (Fig. 34) 195は青磁の碗である。

#### SK-96 (Fig. 30)

B区西側端に位置する。遺構の南側は調査区外へのびる。深さは約50cmを測り、底面は平坦である。

**出土遺物** (Fig. 34) 196は同安窯系青磁II類の碗である。197は羽口であり、火を受けて外面の器壁の一部は黒色化している。残存する長さは10.4cm、直径7.4cm、穴の直径は3.8cmを測る。

#### SK-98 (Fig. 31, PL. 6)

B区南側に位置し、SK-101を切り、SK-97に切られる。長軸1.6m、短軸85cmを測り、底面にて焼上塊がみられた。遺構の時期は13～14世紀と思われる。

**出土遺物** (Fig. 34) 198～200は土師器の壺である。

#### SK-100 (Fig. 31, PL. 6)

B区南側に位置する。平面は径約1.1mの円形を呈し、深さは40cmを測る。遺構の時期は出土遺物から14世紀代と思われる。

**出土遺物** (Fig. 34) 201は土師器の小皿。202～204は土師器の壺である。

#### SK-101 (Fig. 31)

B区南端に位置する。幅は1.6mを測る溝状を呈する。

**出土遺物** (Fig. 34) 205は鉄製の刀子である。残存する長さは10.4cm、幅1.6cm、最大厚さ0.3cmを測る。

#### SK-103 (Fig. 31)

B区南端に位置する。深さは35cmを測る。

**出土遺物** (Fig. 34) 206は土師器の小皿である。

#### SK-104 (Fig. 31)

B区東側に位置し、複数の柱穴に切られる。平面は長軸1.5m、短軸1.3mの楕円形を呈する。遺構の時期は14～15世紀と思われる。

**出土遺物** (Fig. 34) 207～215は土師器の小皿である。216～226は土師器の壺である。220は口縁部の内外面に、223は外面器壁にススの付着がみられる。227は口縁の端部が口禿になっている白磁

の杯である。228は青白磁の蓋である。229は龍泉窯系青磁1類の碗である。

#### SK-105 (Fig. 31)

B区東側に位置する。平面は長軸1.4m、短軸90cmを測る不定形を呈する。底面の南側は一段落ちて約25cm低くなっている。

出土遺物 (Fig. 34) 230は同安窯素青磁の平底皿I類である。

#### SK-106 (Fig. 31)

B区南東側に位置する。平面は径約1.1mの円形を呈する。造構の時期は出土遺物から14世紀代と思われる。

出土遺物 (Fig. 34) 231、232は土師器の小皿。233は土師器の壺である。

#### SK-107 (Fig. 31)

B区南東側に位置する。南東部はSK-106に切られる。

出土遺物 (Fig. 34) 234は土師器の壺である。

#### SK-109 (Fig. 31)

B区南東部に位置する。南西側はSK-106に切られる。

出土遺物 (Fig. 34) 235、236は土師器の壺である。235の内面にススの付着がみられる。

#### SK-110 (Fig. 31, PL. 6)

B区南東部に位置する。長軸90cm、短軸70cmの楕円形を呈する。深さは70cmを測り、底面は平坦である。

出土遺物 (Fig. 46) 銅錢出土

## (2) 柱穴 (SP)

### 出土遺物

(Fig. 35) 237はSP-138出土の陶器鉢である。238はSP-139から出土した土師器小皿である。239はSP-145からの軒平瓦である。240はSP-195出土の土師器小皿である。口縁部の内外面にススの付着がみられる。241、242はSP-256出土の土師器小皿である。242の口縁端部にススの付着がみられる。243はSP-260出土の白磁の壺である。244~249はSP-273から出土した遺物である。244は土師器の小皿。245~247は土師器の壺。248は高い高台の付く土師器の器である。造構の時期は出土遺物から14世紀代と思われる。249は白磁のVI類の碗である。250はSP-278出土の白磁碗(枢府系)である。251~253はSP-308出土の土師器の壺である。254~258はSP-312から出土した。254、255は土師器の小皿。256~258は土師器の壺である。259~261はSP-313からのもので259は土師器小皿。260、261は土師器の壺である。262~264はSP-314から出土した。262は土師器小皿。263、264は土師器の壺である。265はSP-317から出土した陶器B群の壺である。266はSP-328出土の陶器B群の長瓶である。267~273はSP-331から出土した。267~269は土師

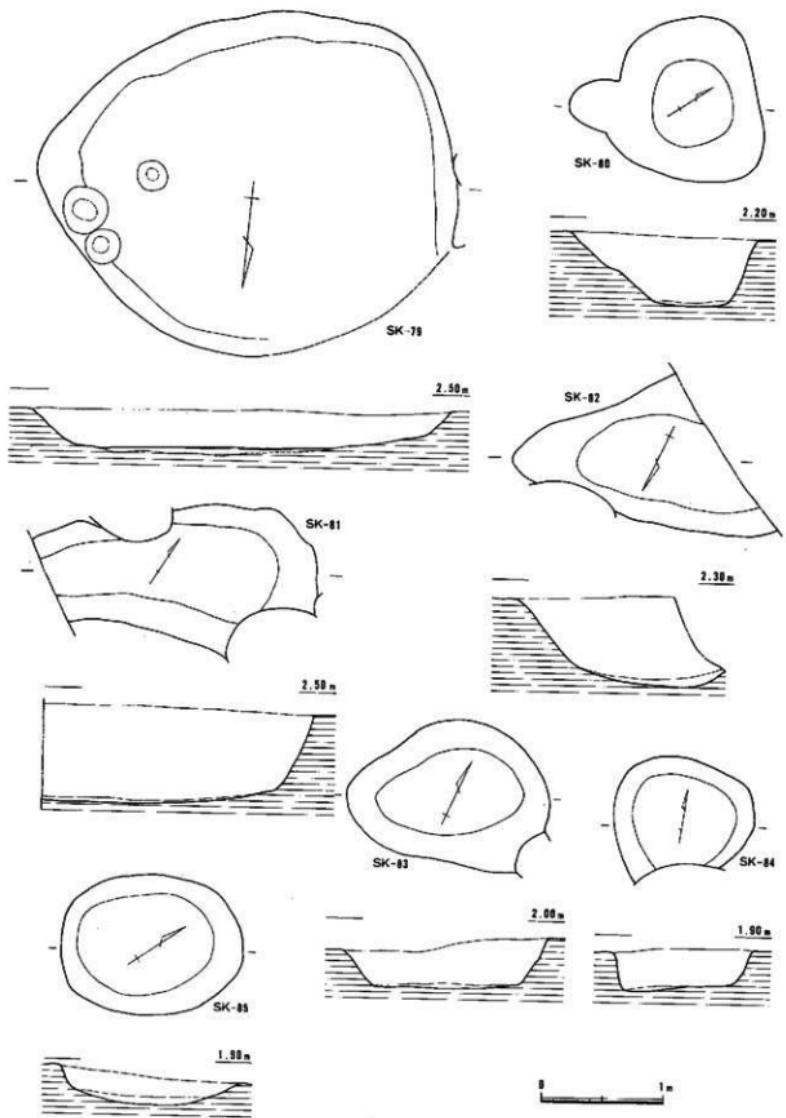


Fig. 29 SK-79~85実測図 (1/40)

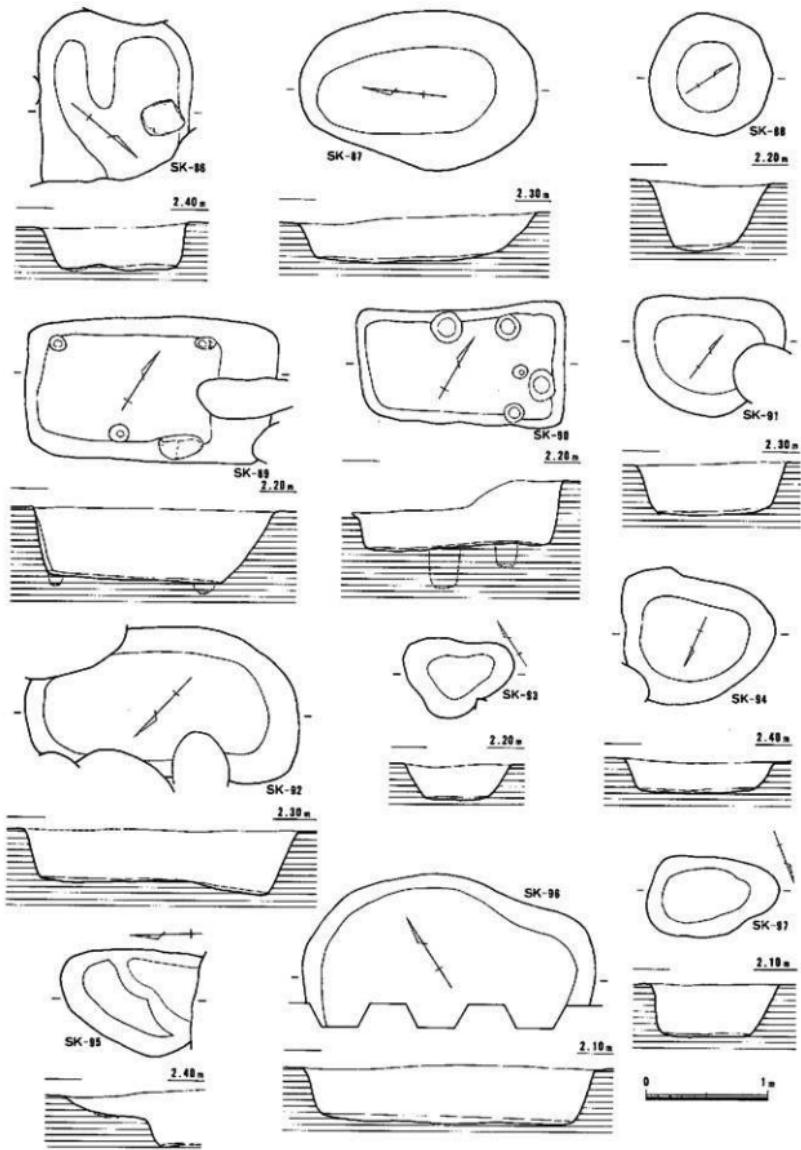


Fig. 30 S K - 86~97実測図 (1/40)

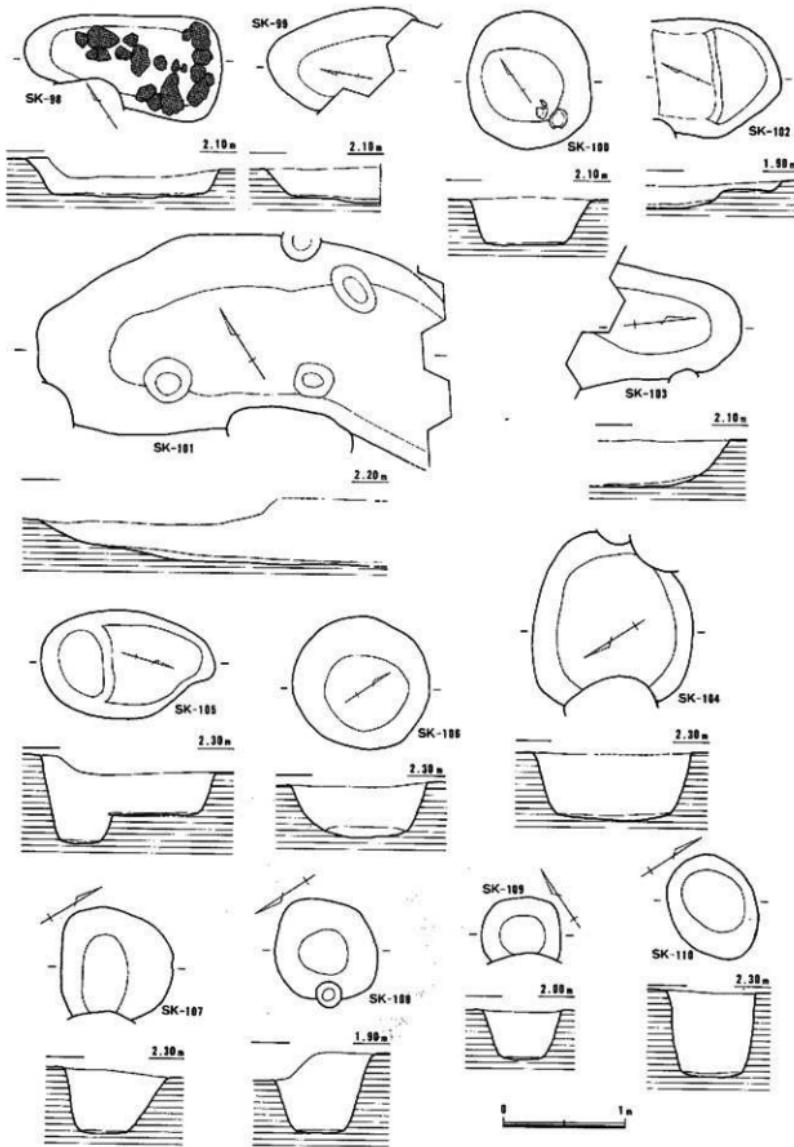


Fig. 31 SK-98~110実測図 (1/40)

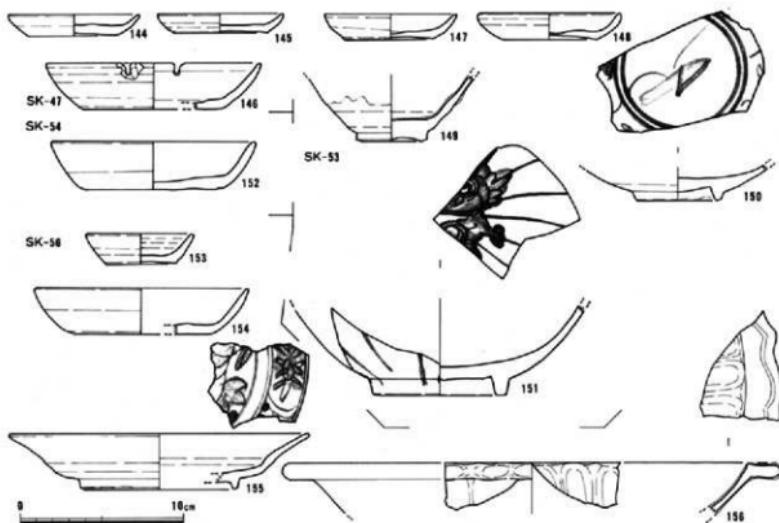


Fig. 32 SK-47~56出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 8 SK-98検出状況 (南西から)

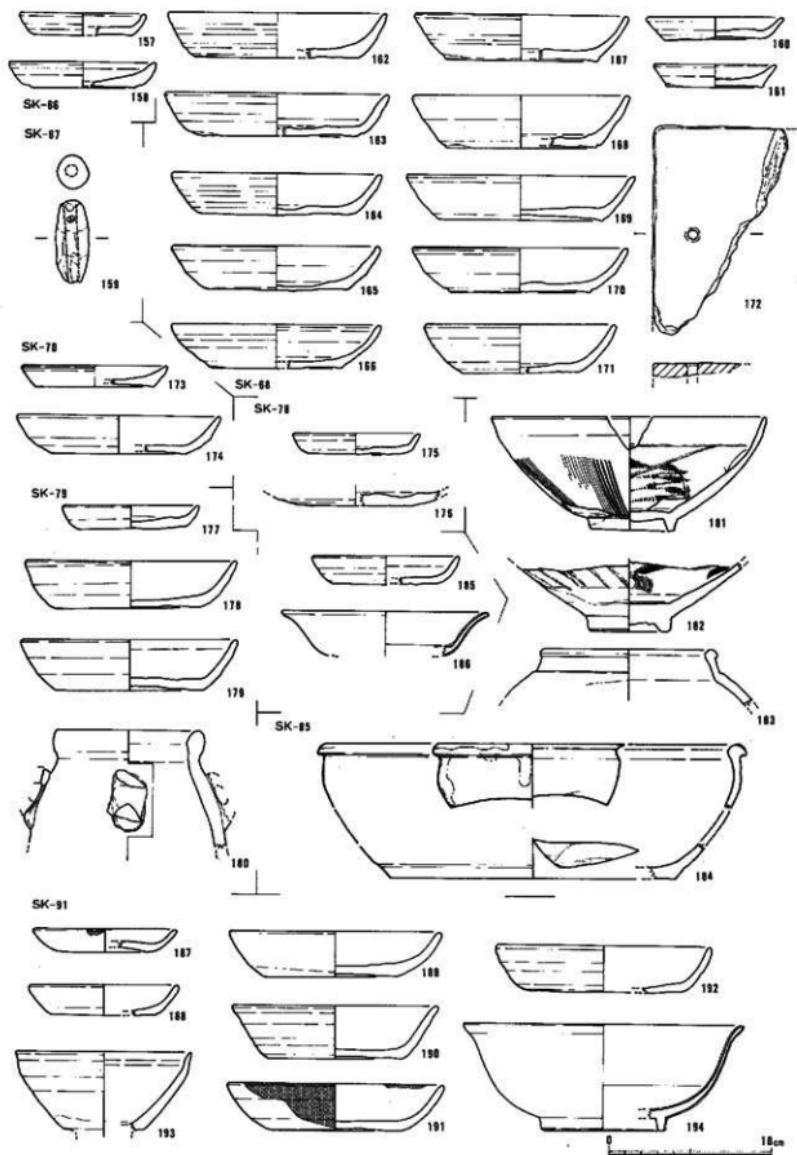


Fig. 33 SK-66~91出土遺物実測図 (1/3)

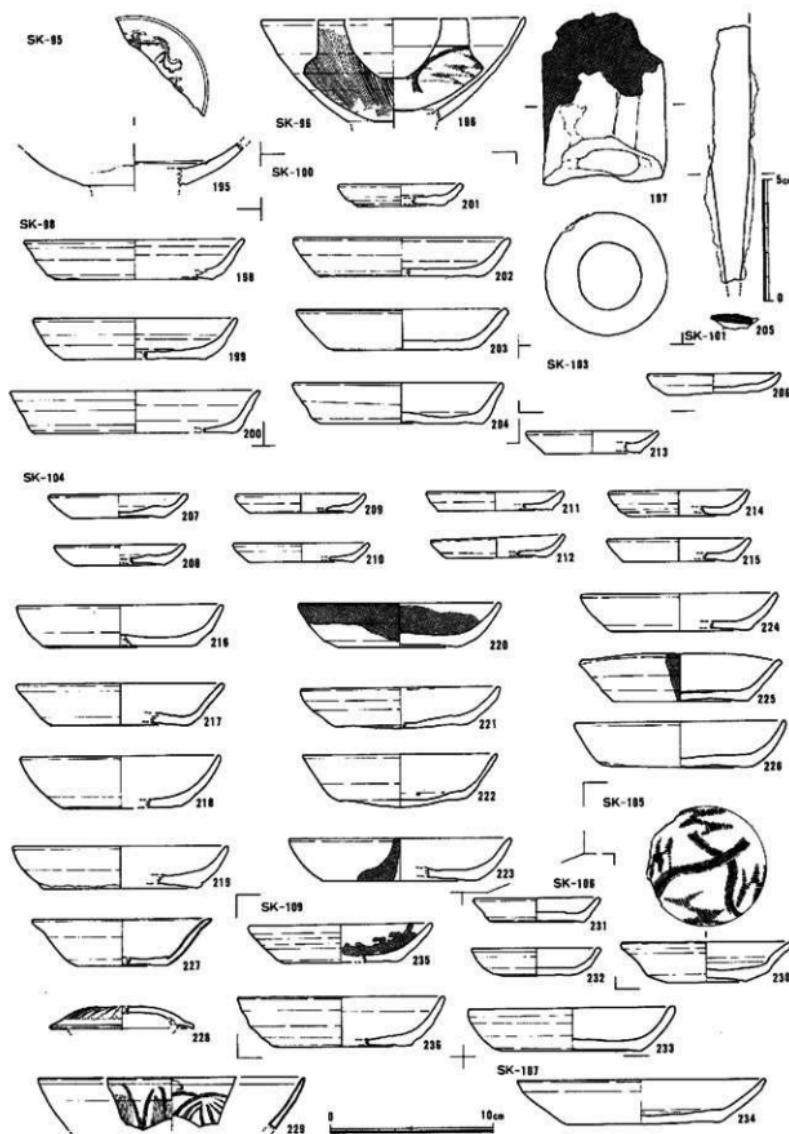


Fig. 34 SK-95~109出土遺物実測図 (1/2・1/3)

器小皿。270～273は土師器の环である。

(Fig. 36) 274～277はS P - 333から出土した。274～276は土師器小皿である。277は李朝の象嵌杯である。278～292はS P - 334出土遺物である。278～282は土師器の小皿である。279の外側器壁にはスヌの付着がみられる。283～287は土師器の环である。288は白磁(枢府系)。289は白磁の碗。290は同安窯系青磁II類の碗。291は高麗の象嵌壺。292は陶器の擂鉢である。293、294はS P - 503出土の土師器小皿と环である。遺構の時代は13～14世紀と考えられる。295はS P - 508出土の土師器小皿である。296～300はS P - 515から出土した。296～299は土師器の小皿。300は土師器の环である。301～304はS P - 516から出土した。301、302は土師器の小皿。303、304は土師器の环である。303の内面にはスヌの付着がみられる。305はS P - 534出土の土師器小皿である。306、307はS P - 540出土の同安窯系青磁II類の碗である。308～312はS P - 545から出土した遺物である。308、309は土師器の小皿。310は陶器B群の長瓶。311は陶器B群の壺。312は白磁の壺である。313～316はS P - 569から出土した。313は土師器の小皿。314は土師器の环。315は同安窯系青磁II類の碗。316は同安窯系青磁の平底皿I類である。317、318はS P - 572から出土した土師器の小皿と白磁の碗V類のものである。

(Fig. 37) 319はS P - 575から出土した土師器の高台付皿である。320、321はS P - 576出土の土師器の小皿と环である。322～326はS P - 577から出土した遺物である。322～325は土師器の环である。326は陶器の擂鉢である。327～337はS P - 591から出土した。327～330は土師器の小皿。331は土師器の环。332は白磁の高台付皿。333は白磁の碗IV類。334は青磁の碗。335は象嵌の碗。336は瓦質の擂鉢である。337は砥石で、残存する最大長は10.1cm、幅3.4cm、残存する最大厚さは1.8cmを測る。遺構の時代は15～16世紀と考えられる。338はS P - 596出土の土師器の小皿である。339、340はS P - 600から出土した土師器の小皿である。銅錢出土 (Fig. 46)

### (3) 溝 (SD)

#### SD-01

A区の北側第1面にて検出された。確認された長さは約4mを測り、遺構は東側調査区外へのびる。幅60cm、深さ約25cmを測る。

#### SD-02

第1面A区、B区の境界地点において検出された。確認された長さは約1.5mを測り、調査区際は矢板の打ち込みにより不明瞭である。幅は45cm、深さ約10cmを測る。

出土遺物 (Fig. 38) 341は土師器の小皿である。口径8.2cm、底径5.0cm、器高1.6cmを測る。外底部の切り離しは糸切りである。また、底部外面に板状圧痕が残る。

#### SD-03

A区の第2面北隅に位置し、SK-42に切られる。北側は調査区外へのびる。幅25cm、深さ6cmを測る。

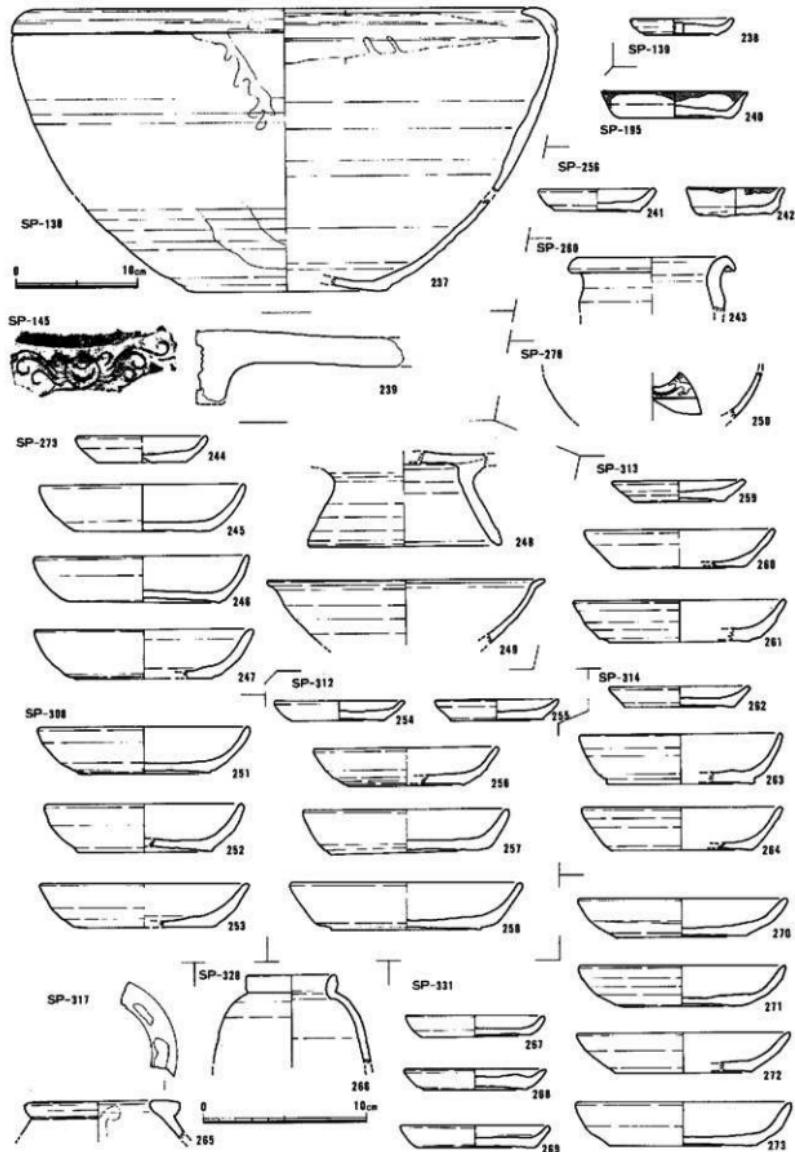


Fig. 35 SP-138-331出土遺物実測図 (1/3・1/4)

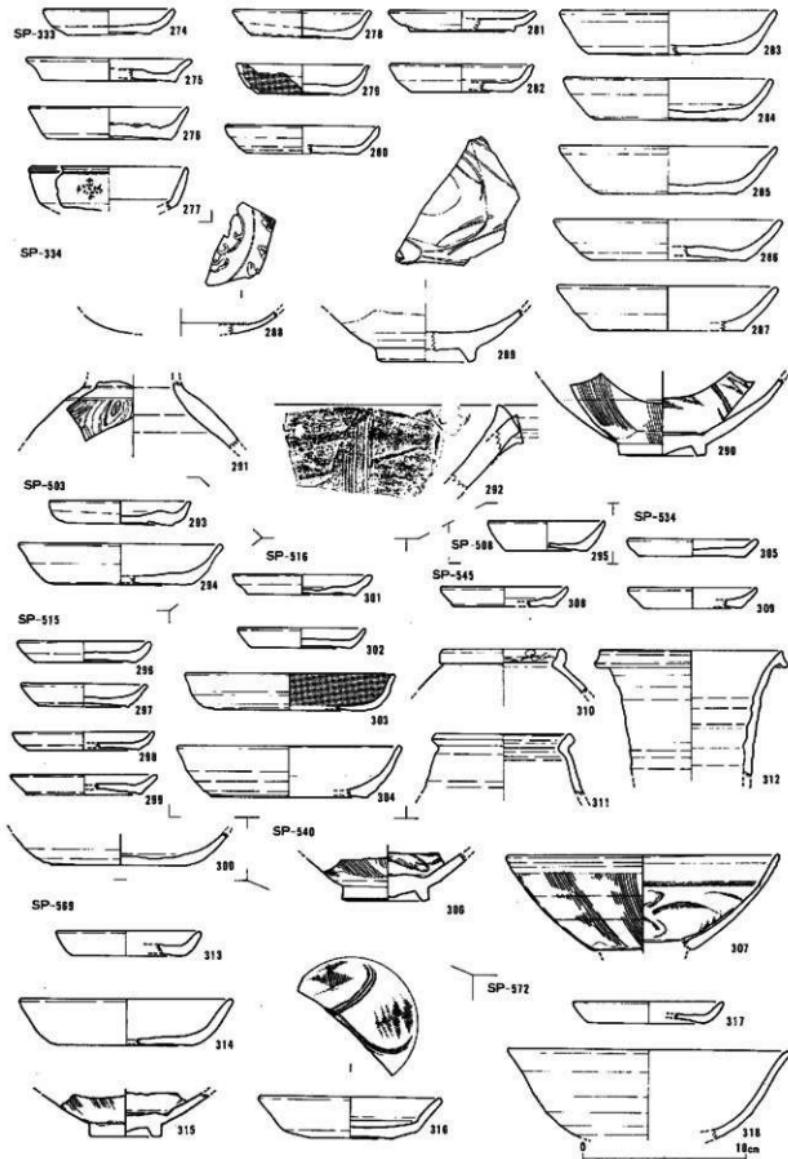


Fig. 36 SP-333, 334, 503~572出土遺物実測図 (1/3)

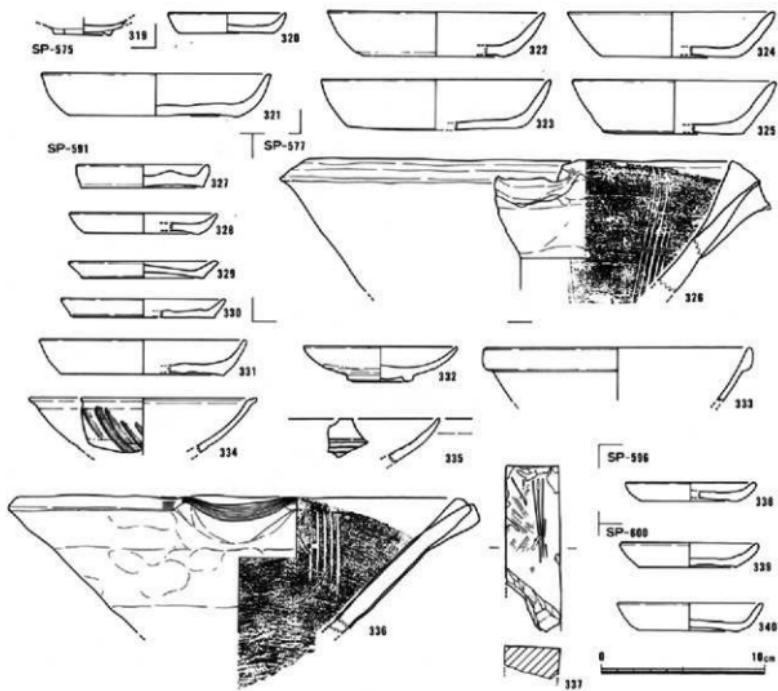
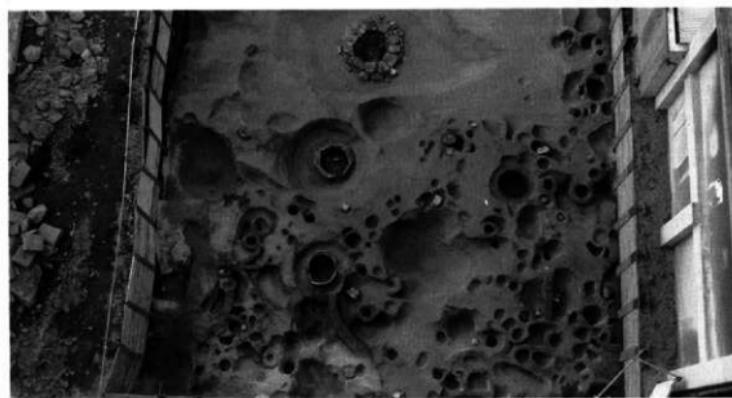


Fig. 37 SP-575~600出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 9 A区第2面柱穴検出状況 (南東から)

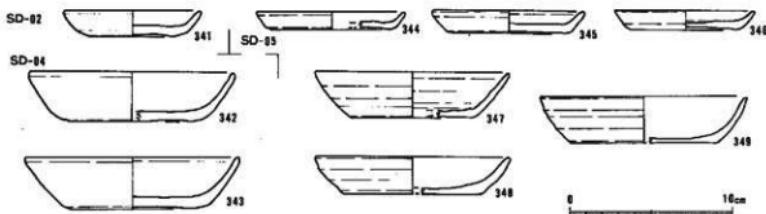


Fig. 38 SD出土遺物実測図 (1/3)

#### SD-04

A区の第2面東側に位置しSE-02に切られる。幅は約50cmを測り、底面には高低があり、深いところで約30cmを測る。

**出土遺物 (Fig. 38)** 342、343は南側から出土した土師器の壊である。口径12.2cm、底径8.6cm、器高3.0cmを測る。底部外面の切り離しは糸切りである。

#### SD-05

B区第2面東側に位置し、SE-04に切られる。南側を擾乱により削られており、幅は約1.5m以上はあったと思われる。深さは約30cmを測る。

**出土遺物 (Fig. 38)** 344～346は土師器の小皿である。口径8.4～9.0cm、底径6.0～7.2cm、器高1.2～1.4cmを測る。外底部の切り離しは、すべて糸切りである。347～349は土師器の壊である。

#### (4) 井戸 (SE)

##### SE-01 (Fig. 39, PL. 7)

A区地下室の擾乱の下から検出された石組井戸である。掘りかたの平面は長軸7.2m、短軸4.7mを測る不定形を呈し、北西部が張り出す。石組の上面は井戸掘りかた検出面より約30～40cmほど下から検出された。このことと井戸の中に崩れた石が少ないとから井戸の廃棄時に石の抜き取りがおこなわれた可能性がある。また、石組検出面より上部からイルカの頭骨 (PL. 9) が2点検出された。ただし、擾乱が及んでいることも考えられ遺構に伴うかどうかは不明である。石組は井戸の下部約1mが残存しており、その下には瓦質の筒状を呈する水溜が検出された。ただし、調査時にはすでに破損していた。遺構の所属する時代は出土遺物から17世紀後半以降と思われる。

**出土遺物 (Fig. 42, 43, 44)** 350～354は土師器の小皿である。そのうち井戸枠内出土のものは350のみである。352の口縁部内外面にはススの付着がみられる。355～364は土師器の壊である。井戸枠内出土は355、357、359、360、363、364である。365は井戸枠内出土の明代の染付である。366は陶器の碗。367は白磁の高台付皿II類である。高台内側に「歸」の墨書がある。368は陶器鉢。369は染付碗。370は井戸枠内から出土した瀬戸の高台付皿である。371は青磁の鉢。372は土鍤で、

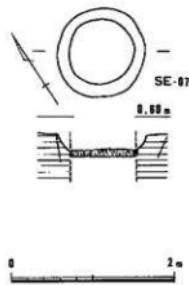
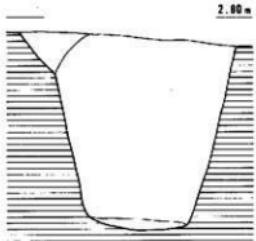
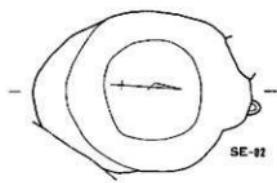
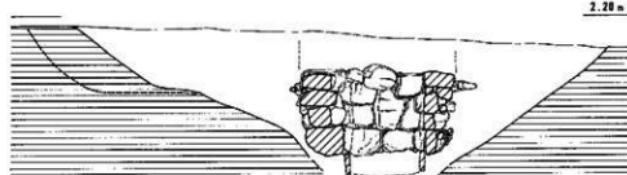
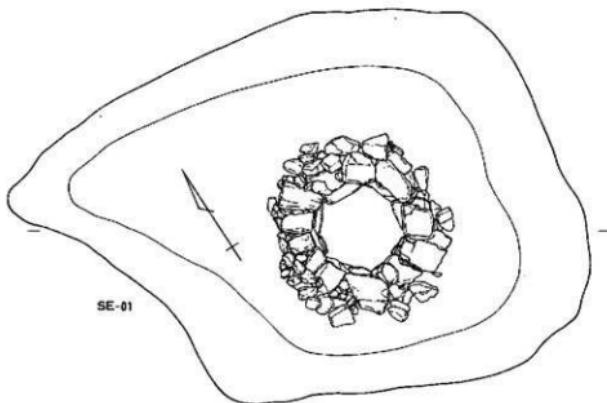


Fig. 39 SE-01, 02, 07実測図 (1/60)

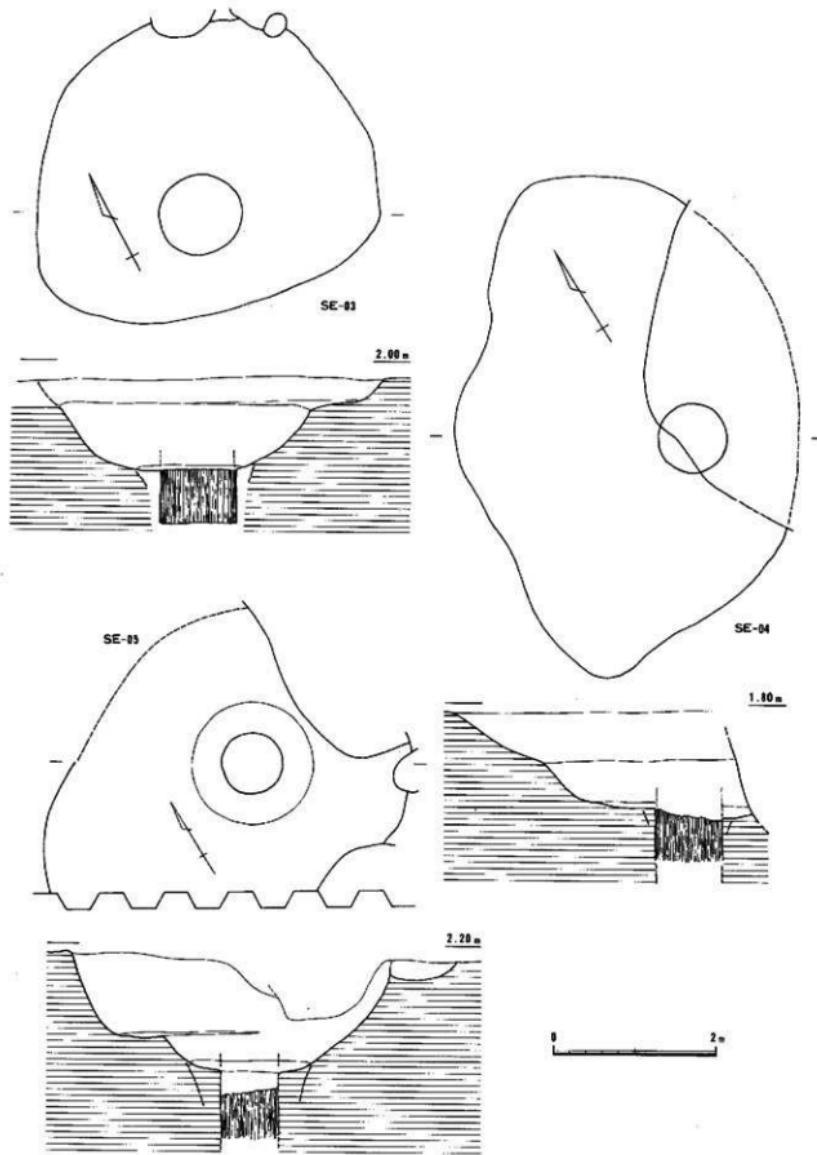


Fig. 40 SE-03, 04, 05実測図 (1/60)

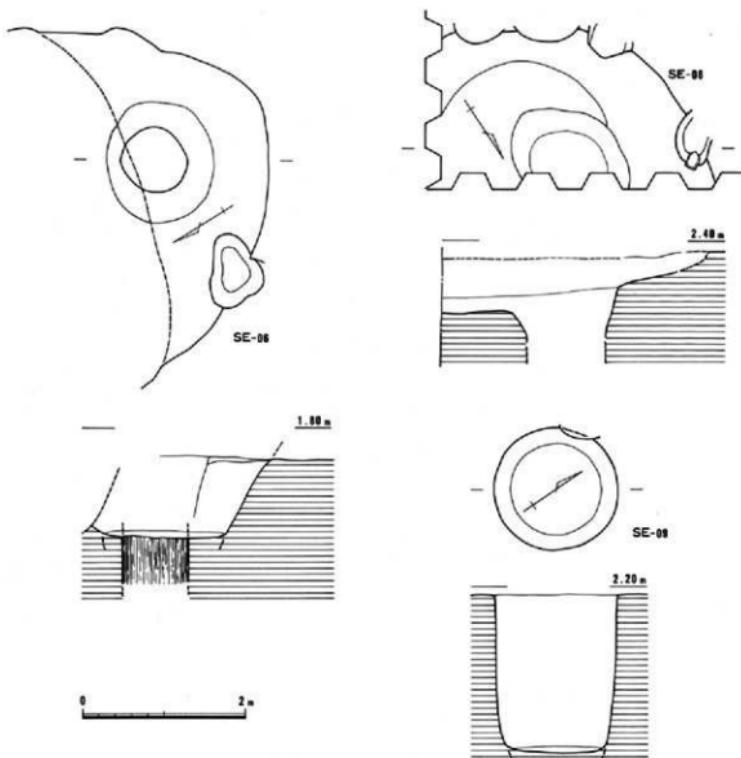


Fig. 41 SE-06, 08, 09実測図 (1/60)



Ph. 10  
SE-05検出状況  
(南西から)

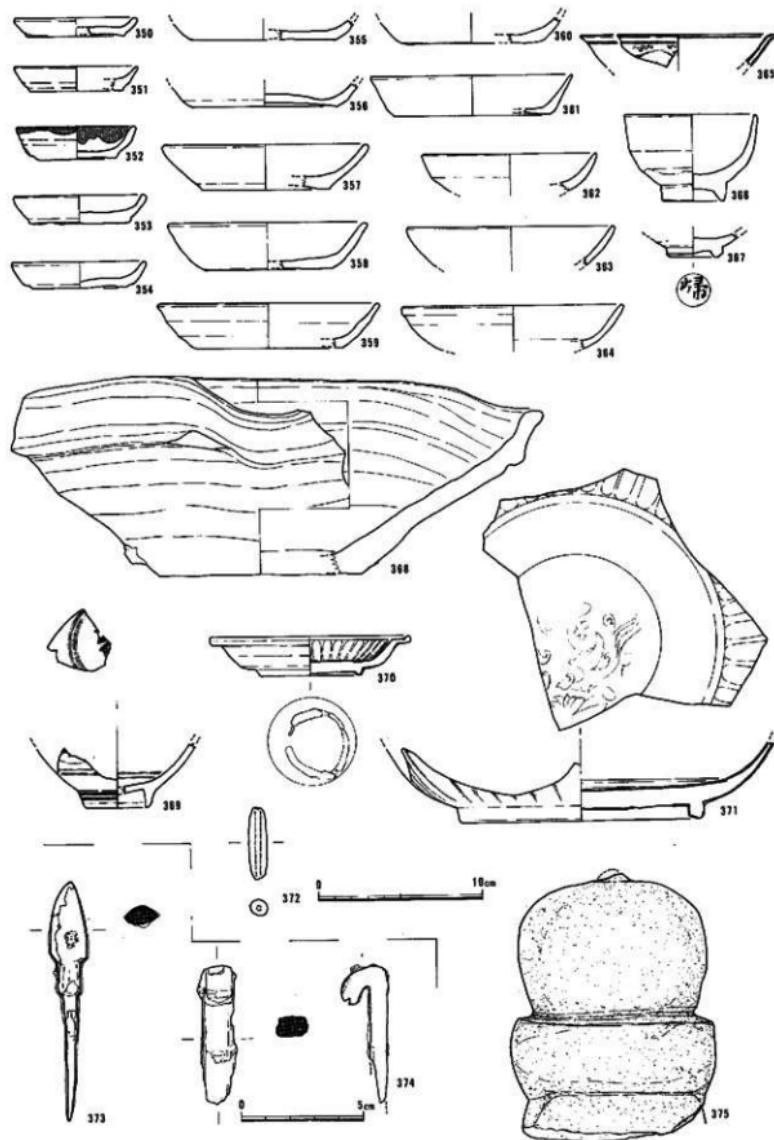


Fig. 42 SE-01出土遺物実測図1 (1/2・1/3)

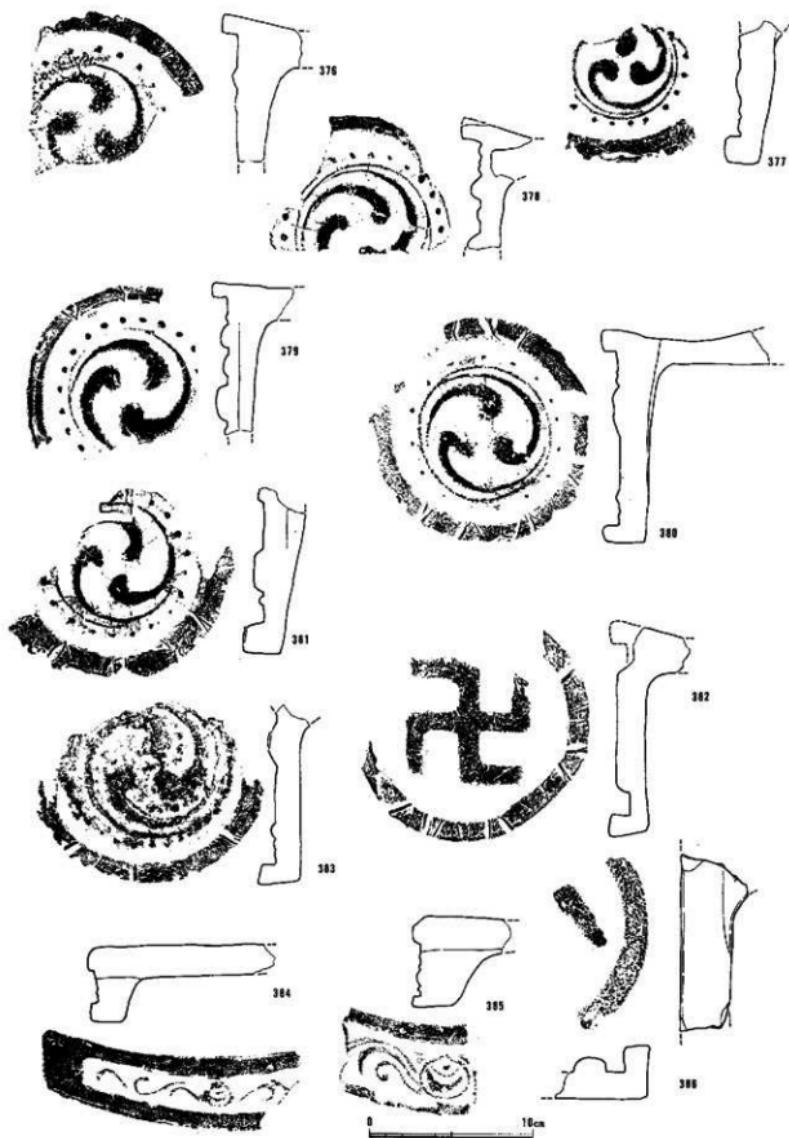


Fig. 43 SE-01出土遺物実測図 2 (1/3)

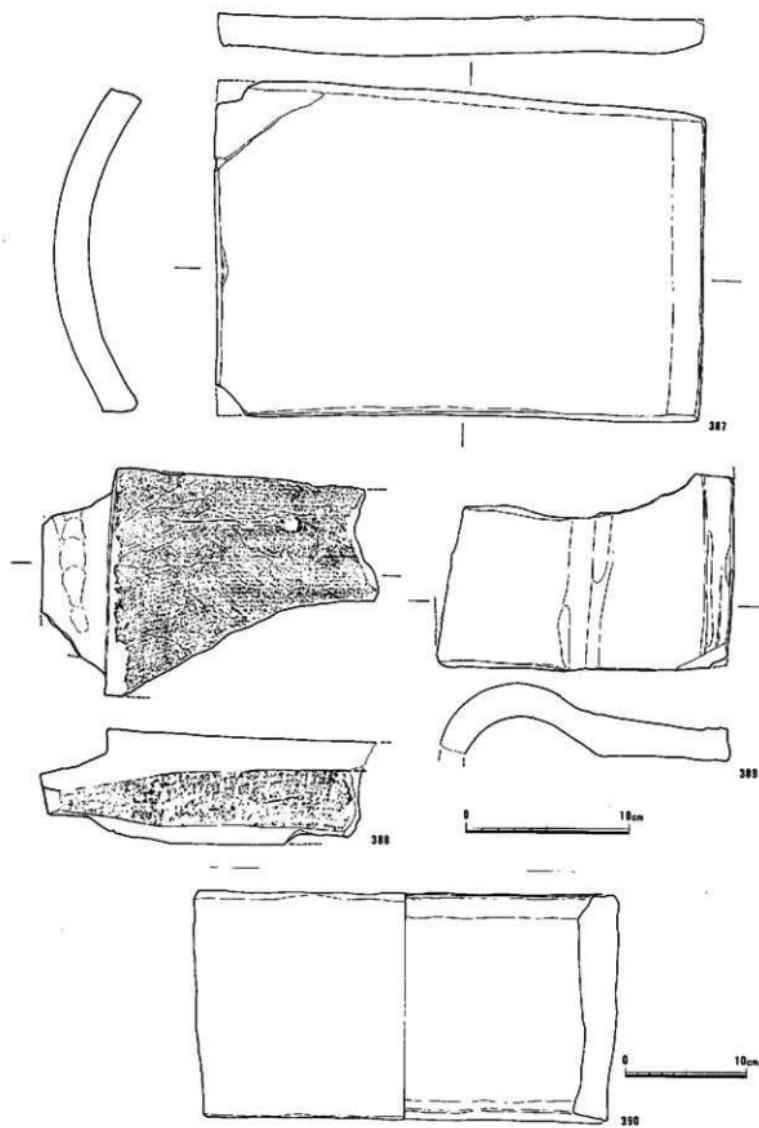


Fig. 44 SE-01出土遺物実測図3 (1/3・1/8)

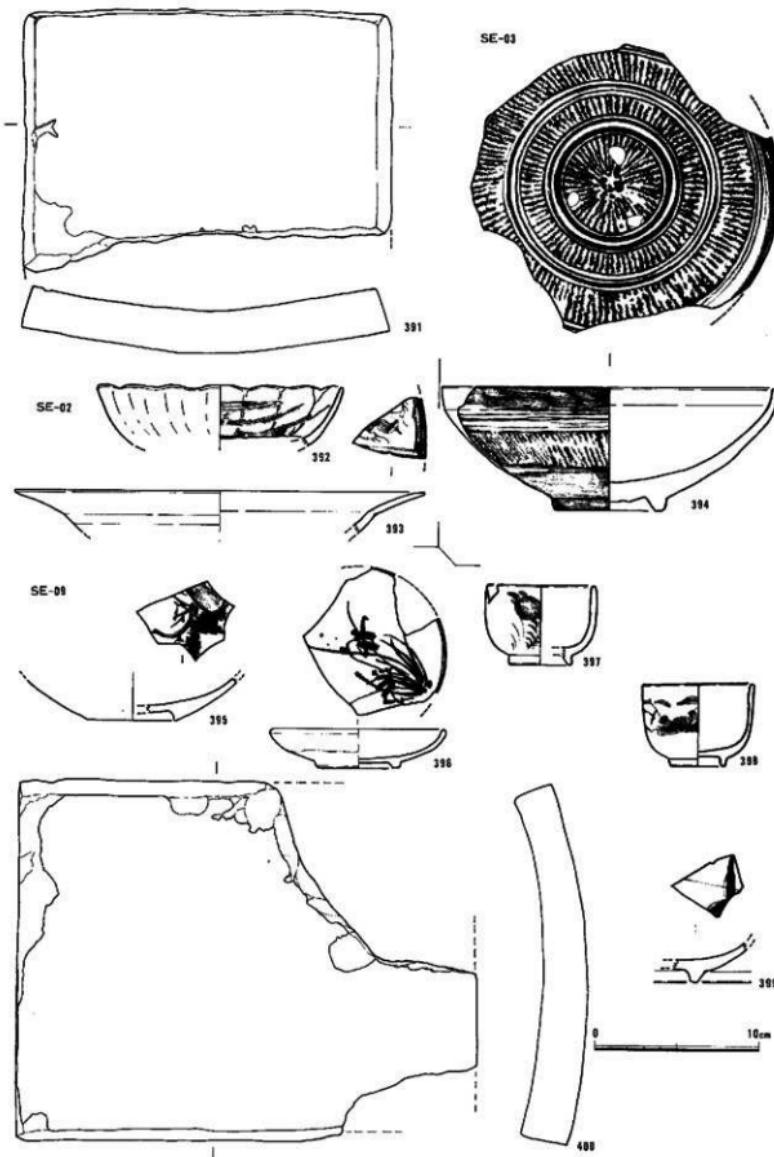


Fig. 45 SE-02, 03, 09出土遺物実測図3 (1/3)

残存する長さ4.4cm、直径1.1cmを測る。373は鉄製の鎌であり、全長9.9cmを測る。374は不明鉄製品である。一端は丸く曲げられており、釘あるいはクサビと思われる。375は五輪塔の空輪・風輪部である。空輪の幅は11.5cm、風輪の幅は12.5cmを測る。376～383、386は軒丸瓦である。382、386は円文であり、それ以外は三巴文である。瓦頭の直径はそれぞれ376は13.4cm、377が12.0cm、378が14.4cm、379が14.2cm、380が13.4cm、381が10.2cm、382が14.2cm、383が14.2cm、386が13.2cmを測る。そのうち井戸枠内から出土したものは381、383、384、386である。387は平瓦で長さ29.8cm、最大幅20.5cm、厚さ2.3cmを測る。388は丸瓦であり、最大幅13.9cm、厚さ3.5cmを測る。389は平瓦と丸瓦が一体になったものである。390は瓦質の水溜めである。最大直径60cm、最大厚さ6.2cm、高さ36.6cmを測る。

#### SE-02 (Fig. 39, PL. 7)

A区北東部に位置する。上場は径約2mの円形を呈し、深さは2.3mを測る。井戸枠と思われる木質の痕跡は円形を呈してかすかにみられることから、木桶が使われていたと思われる。

出土遺物 (Fig. 45) 391の平瓦は長さは22.4cm、幅は15.8cm、厚さは2.6cmを測る。392は染付の鉢。393は明代の染付の鉢である。

#### SE-03 (Fig. 40, PL. 8)

B区のほぼ中央に位置する。SE-06、07、04を切る。掘りかたの長軸は約4mを測り、中央部に木桶による井戸枠が一段のみみられた。木桶の直径は90cmを測り、桶材は検出時に幅10～14cm、厚さ約1.7cmを測る。調査時の湧水点は海拔0.25mであった。

出土遺物 (Fig. 45) 394は象嵌碗である。

#### SE-04 (Fig. 40)

B区西側に位置し、SE-03に切られる。掘りかたの長軸は約6mを測り、平面は長楕円形を呈すると思われる。井戸枠は東側に寄って木桶が確認された。しかし、木桶の底までは掘削できなかった。桶材は調査時において幅7～12cm、厚さ1.6cmを測る。井戸に伴う遺物はみられなかった。

#### SE-05 (Fig. 40, PH. 11)

B区西側に位置し、SE-04に切られ、掘りかたの南側は調査区外へのびる。掘りかたの平面は直径約4mの円形を呈すると思われる。井戸枠は掘りかたのほぼ中央に木桶が確認され、直径約70cmを測る。木桶の底までは掘削できなかった。桶材は調査時で幅8～11cm、厚さ1.5cmのものが22枚組み合わされたものであった。

#### SE-06 (Fig. 41, PL. 8)

B区中央部に位置し、SE-03に切られる。掘りかたの平面形は不明である。井戸枠は木桶が使われており、直径80cmを測る一段のみ確認された。調査時に木桶の底までは掘削できなかった。桶材は現存で幅10～12cm、厚さ2cmを測り、25枚組み合わせて作られていた。桶内から遺物は出土しなかった。

#### SE-07 (Fig. 39, PL. 8)

B区中央に位置し、SE-03、04に切られる。桶のみが深さ約10cm検出され、掘りかたの規模は

不明である。木桶の直径は検出時で80cmを測る。桶材は幅11cm程度で厚さ約1cmを測る。桶の下場のレベルは海拔0.10mであった。桶内から時期を特定できる遺物は出土しなかった。**銅鏡出土(Fig. 46)**

#### S E -08 (Fig. 41)

B区の東隅に位置する。半径約2mの掘りかたを検出したのみであり、井戸枠は調査区外に位置すると思われる。遺物は出土していない。

#### S E -09

A区北側S E -01の北側に位置する。平面は径1.5mの円形を呈し、深さは約2mを測る。井戸枠等の痕跡はみられなかった。遺構の時代は出土遺物から17世紀代と思われる。

**出土遺物 (Fig. 45) 395、396は染付の皿。397、398は染付の小碗。399は染付の碗。400の平瓦は長さ28.0cm、幅22.0cm、厚さ3.0cmである。**

#### (5) 包含層・遺構確認他

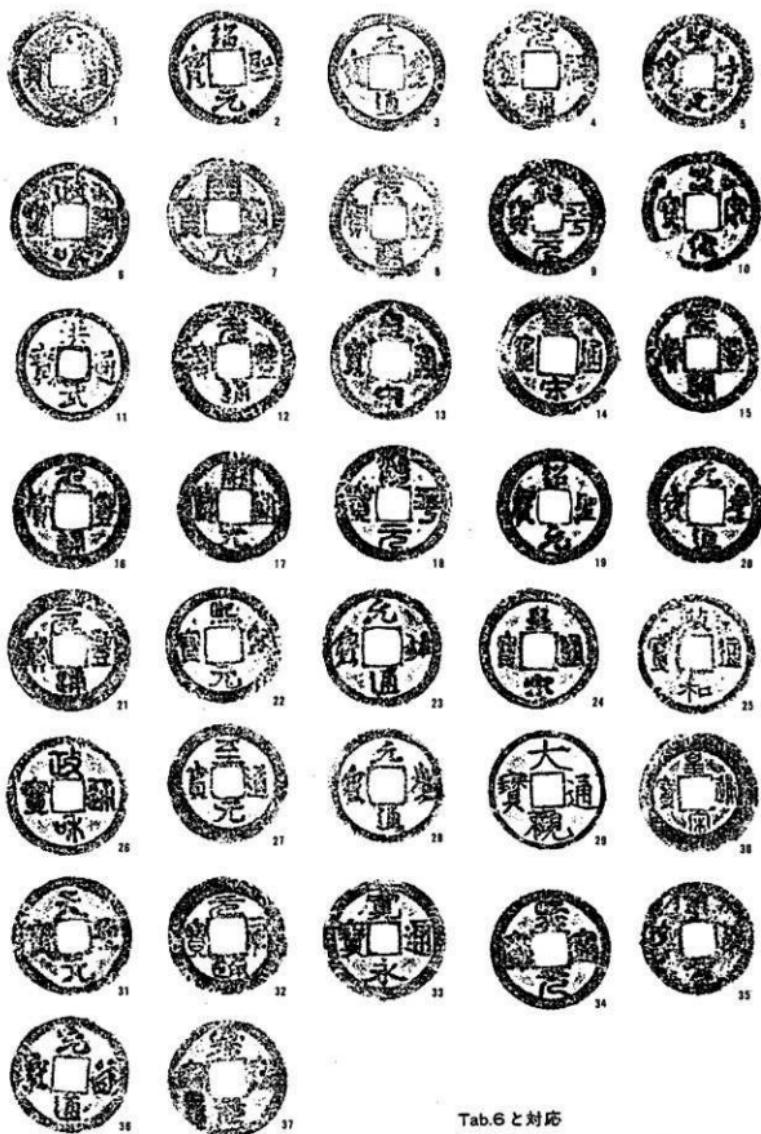
ここに掲載する遺物は黄赤褐色砂質土である遺物包含層より出土したものと、第2面遺構検出時に出土したものである。

**出土遺物 (Fig. 47~48)** 401は白磁の壺。402は青白磁合子の蓋。403は龍泉窯系青磁の碗I類一6。404は龍泉窯系青磁の壺。405、406は同安窯系青磁の平底皿I類。407、408、409は同安窯系青磁の碗II類である。410は“その他群を構成するに至らない大型容器”I類の壺である。411は陶器A群の小口瓶。412は滑石製の石錘である。残存長10.2cm、断面の長軸3.9cm、厚さ2.8cmを測り、横に溝がまわる。413~420は焼しによる軒丸瓦である。瓦頭の文様はすべて三巴文で、右まわりと左まわりの2種類がある。413は瓦頭の直径9.8cmを測る。414は9.4cm。415は7.8cm。416は8.1cm。417は7.8cm。418は8.8cm。419は7.6cm。420は7.6cmを測る。421は明代染付の碗。422、423は伊万里染付の碗。424、425は染付の碗。426は染付の蓋。427はB区排上巾よりみつかった伊万里染付の碗である。428は第2面の検出時に出土した象嵌の碗である。429は遺構検出時に出土した象嵌の杯である。430はA区攢乱底から出土した象嵌の杯である。431は北側遺構検出時に出土した瀬戸のおろし皿である。432はおなじく北側遺構検出時に出土した陶器の鉢である。433は砥石である。残存長は5.5cm、幅1.3cm、厚さ1.2cmを測る。

#### (6) トレンチ調査

トレンチの位置はFig.25の全体図にアミカケした部分である。グリッドではB 3、B 4、B 5、B 6にあたる。第2遺構面より約2m掘削し底のレベルは海拔0.30mを測る。

**出土遺物 (Fig. 49)** 434~438はトレンチの上層約1mから出土した。439、440はその下層からの出土である。上層と下層を分ける層位はない。434は白磁碗IV類。435は白磁の碗VI類である。436は同安窯系青磁の碗II類である。437は陶器A群の盤。438は陶器C群の擂鉢である。439は白磁の碗



Tab.6 と対応

Fig. 46 93次調査出土銅錢拓影 (1/1)

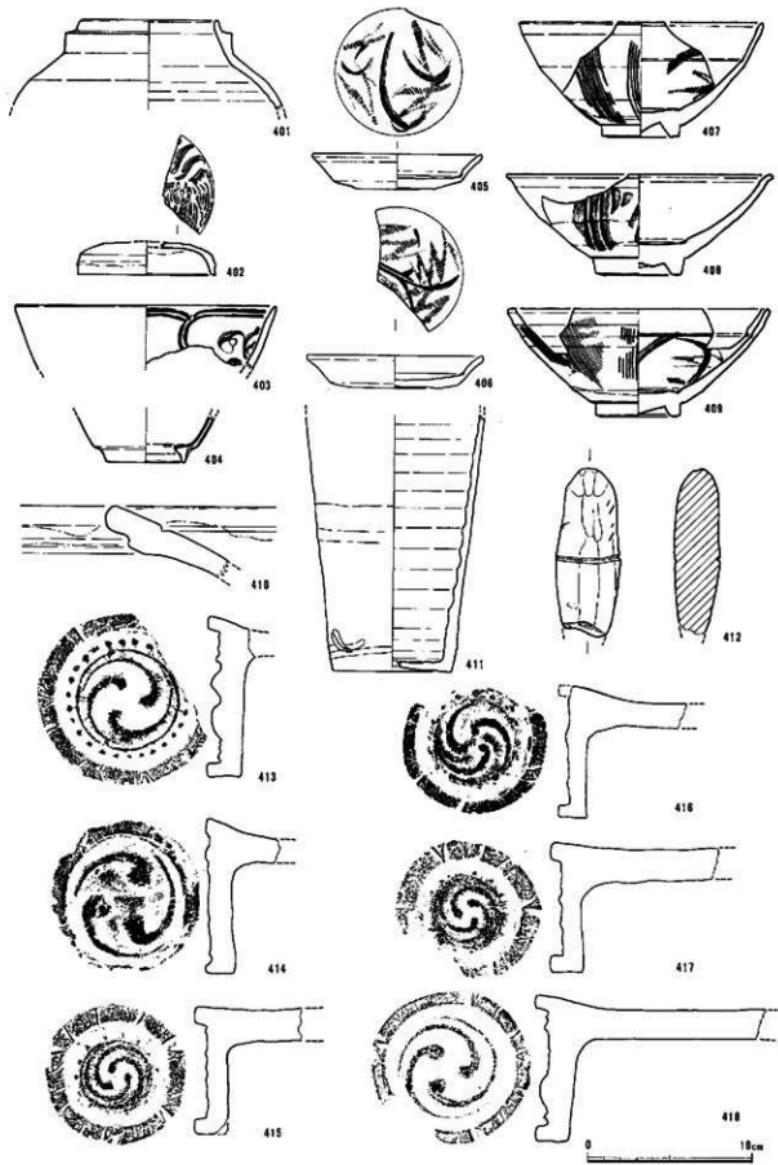


Fig. 47 包含層上遺物実測図 1 (1/3)

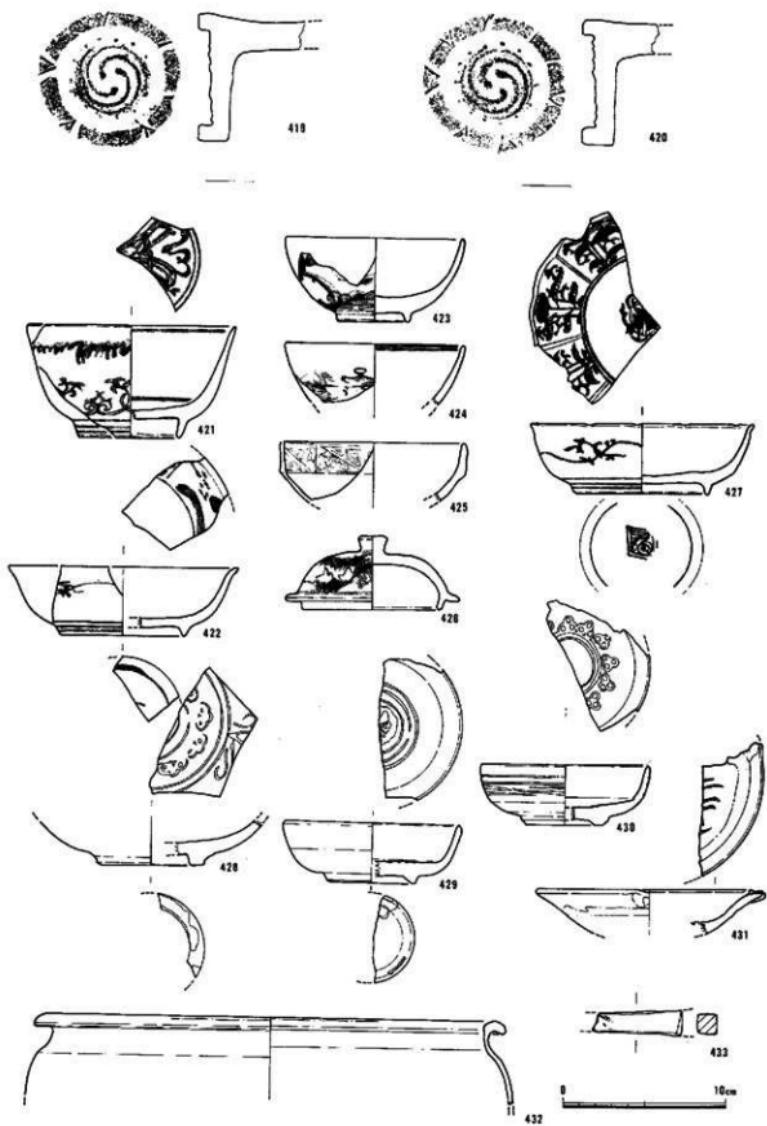


Fig. 48 包含層出土遺物実測図 2 (1/3)

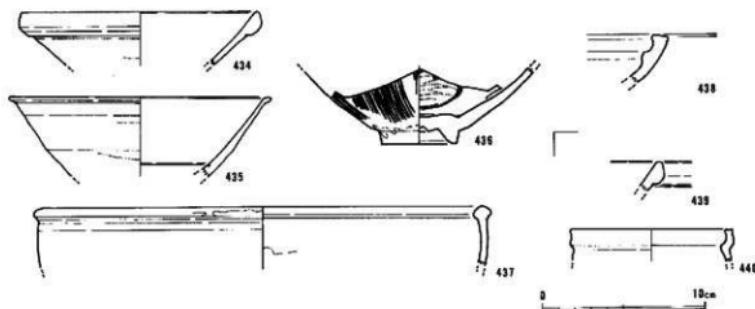


Fig. 49 トレンチ調査出土遺物実測図 (1/3)

IV類。440は陶器C群の無軸盤口水注である。

### 3 小 結

今回の調査地点は昭和初めの町名では瀬小寺町、妙楽寺新町付近にある。この地点はちょうど11世紀末における海岸線上に位置すると推測されている。また、北側約60mには68次調査地点が位置しており、13世紀後半の海岸線がおさえられている。このため今回の調査開始前から遺構の時代的な上限は概ね予想され、また調査においてもこのことを裏付けるものとなった。

調査は、砂層基盤上面とその上に堆積する黄茶褐色遺物包含層の上面の2面において遺構検出作業をおこなった。第2面検出面である砂層は調査区内ではほぼ平坦であり、海に面する北側への傾斜はみられなかった。

注目される遺構としては、まずSK-89、SK-90がある。これらの遺構は性格を特定できる遺物は出土していないが、平面が隅丸長方形を呈し、土壤墓の可能性が考えられる。北側に位置する第68次調査では12世紀後半から13世紀の土壤墓が検出されており範囲はおさえられないが墓域としての利用が予想される。次に、17世紀後半以降に造られたと思われるSE-01がある。上部は石組みにより構築されており、最下層には瓦質の水溜があり、石組み井戸から瓦井戸への過渡的な様相を示すものではないかと考えられる。また、石組みに五輪塔の一部が転用されており、裏ごめには出文をもつ軒丸瓦なども複数出土しており、寺院などの関連も考えられる。

トレンチ調査の成果としては、基盤の砂層から13世紀初頭頃までの遺物が出土しており、この地の砂層の形成時期を特定できた。また、11世紀から13世紀中頃までは1年間に約40cmずつ海岸線が北進し、急速な陸地化が進んだといわれているが、このことも十層の観察から裏付けられた。

最後に、この地の西側にあるとされている正和5年(1316)に創建された妙楽寺の推定地については、調査において直接それと関係する遺構、遺物は出土しなかった。

Tab. 1 93次調査出土遺物観察表

品名No.	出土地	遺物種	口径	底形序	基部高	切り離し	表面状況	備考	
								(直径) (厘米)	(厘米)
Fig. 19-001	SK-0 0 1	高津 水槽	15.0	9.8	12.5	-	-	-	-
Fig. 19-002	SK-0 0 2	土師器 小皿	6.5	5.2	1.3	余切り	無	-	-
Fig. 19-003	SK-0 0 3	土師器 小皿	6.5	5.0	1.1	余切り	無	-	-
Fig. 19-004	SK-0 0 4	土師器 小皿	6.5	5.2	1.2	余切り	無	-	-
Fig. 19-005	SK-0 0 5	土師器 小皿	(6.5)	(5.5)	0.7	余切り	無	-	-
Fig. 19-006	SK-0 0 6	土師器 小皿	6.5	5.2	1.3	余切り	無	-	-
Fig. 19-007	SK-0 0 7	土師器 小皿	6.5	5.3	1.9	余切り	無	-	-
Fig. 19-008	SK-0 0 8	土師器 小皿	7.2	5.6	1.3	余切り	無	-	-
Fig. 19-009	SK-0 0 9	土師器 小皿	7.6	6.2	1.3	余切り	無	-	-
Fig. 19-010	-	羅鬼文 瓢	(7.5)	-	-	-	-	-	-
Fig. 19-011	SK-0 0 2	白磁 瓢	(5.4)	(3.2)	4.6	-	-	-	-
Fig. 19-012	SK-0 0 2	白磁 瓢	-	(8.5)	-	-	-	-	-
Fig. 19-013	SK-0 0 2	伊万里窯口 瓢	8.2	-	--	-	-	-	最大径 8.8
Fig. 19-014	SK-0 0 2	伊万里窯口 瓢	6.4	2.8	3.1	-	-	-	最大径 6.6
Fig. 19-015	SK-0 0 2	伊万里窯口 瓢	10.4	-	-	-	-	-	最大径 10.8
Fig. 19-016	SK-0 0 2	伊万里窯口 長角付瓶	15.8	8.0	4.0	-	-	-	最大径 15.8
Fig. 19-017	SK-0 0 2	伊万里窯口 瓶	12.0	5.6	3.6	-	-	-	最大径 12.0
Fig. 19-018	SK-0 0 2	伊万里窯口 瓶	6.0	3.6	5.5	-	-	-	最大径 6.0
Fig. 19-019	SK-0 0 2	伊万里窯口 瓶	7.0	4.0	5.5	-	-	-	最大径 7.0
Fig. 19-020	SK-0 0 2	伊万里窯口 瓶	-	-	-	-	-	-	最大径 11.4
Fig. 19-021	SK-0 0 2	柴付 瓶	7.8	3.2	6.1	-	-	-	-
Fig. 19-022	SK-0 0 2	柴付 小瓶	9.0	2.2	4.4	-	-	-	最大径 9.2
Fig. 20-026	SK-0 0 3	土師器 小皿	(6.8)	(5.2)	1.6	余切り	有	-	-
Fig. 20-027	SK-0 0 3	柴付 瓶	-	-	3.4	-	-	-	-
Fig. 20-028	SK-0 0 3	柴付 瓶	-	-	4.8	-	-	-	-
Fig. 20-029	SK-0 0 3	柴付 瓶	-	-	14.8	-	-	-	-
Fig. 20-030	SK-0 0 3	伊万里窯口 長角付瓶	13.4	7.0	3.9	-	-	-	-
Fig. 20-031	SK-0 0 3	伊万里窯口 瓶	-	-	-	-	-	-	-
Fig. 20-032	SK-0 0 3	伊万里窯口 瓶	-	-	(12.0)	-	-	-	-
Fig. 20-033	SK-0 0 3	伊万里窯口 瓶	-	-	9.0	-	-	-	-
Fig. 20-034	SK-0 0 3	伊万里窯口 瓶	-	-	10.6	-	-	-	-
Fig. 20-035	SK-0 0 3	伊万里窯口 瓶	-	-	8.8	-	-	-	-
Fig. 20-036	SK-0 0 3	伊万里窯口 瓶	-	-	-	-	-	-	-
Fig. 20-037	SK-0 0 4	土師器 小皿(右明細)	7.9	6.2	1.3	余切り	無	-	-
Fig. 20-038	SK-0 0 4	土師器 小皿(左明細)	(5.2)	(6.0)	1.5	余切り	無	-	-
Fig. 20-040	SK-0 0 4	土師器 环	(10.2)	(6.2)	1.7	余切り	無	-	-
Fig. 20-041	SK-0 0 4	白磁 瓶	(12.8)	4.2	3.6	-	-	-	-
Fig. 20-042	SK-0 0 4	伊万里窯口 瓶	(9.7)	(3.6)	5.5	-	-	-	-
Fig. 20-043	SK-0 0 4	伊万里窯口 小瓶、吹	6.4	2.8	3.9	-	-	-	-
Fig. 20-044	SK-0 0 4	柴付 瓶	-	-	-	-	-	-	-
Fig. 20-045	SK-0 0 4	柴付 瓶	-	(9.4)	-	余切り	無	-	-
Fig. 20-046	SK-0 0 5	白色土器 目口	(10.0)	2.3	5.6	余切り	無	-	-
Fig. 20-047	SK-0 0 5	土師器 环	12.4	2.6	6.3	余切り	有	-	-
Fig. 20-048	SK-0 0 6	土師器 环	(12.9)	4.4	4.0	余切り	有	-	-
Fig. 20-049	SK-0 0 7	大口瓶	-	-	3.0	-	-	-	-
Fig. 20-050	SK-0 0 8	土師器 环	(12.4)	(7.8)	2.4	余切り	無	-	-
Fig. 20-051	SK-0 0 9	直腹	-	-	-	-	-	-	-
Fig. 20-052	SK-0 1 0	土師器 小皿	(6.5)	(5.5)	1.0	余切り	無	-	-
Fig. 20-053	SK-0 1 0	土師器 环	(11.8)	(7.2)	2.8	余切り	無	-	-
Fig. 20-054	SK-0 1 3	土師器 环	(12.9)	(8.4)	(2.7)	余切り	無	-	-
Fig. 20-055	SK-0 1 3	土師器 环	(18.6)	(8.1)	(3.2)	余切り	有	-	-
Fig. 20-056	SK-0 1 4	土師器 环	(10.0)	(8.1)	1.2	余切り	無	-	-
Fig. 20-057	SK-0 1 4	土師器 环	(12.8)	(8.8)	2.5	余切り	無	-	-
Fig. 20-058	SK-0 1 4	土師器 环	(13.6)	8.6	3.0	余切り	有	-	-
Fig. 20-059	SK-0 1 4	土師器 环	13.2	8.3	3.1	余切り	無	-	-
Fig. 20-060	SK-0 1 4	土師器 环	-	(6.8)	-	余切り	無	-	-
Fig. 21-061	SK-0 1 4	土師器 瓶	-	-	-	-	-	-	-
Fig. 21-062	SK-0 1 4	瓦製罐	-	-	-	-	-	-	-
Fig. 21-063	SK-0 1 4	瓦製罐	-	-	-	-	-	-	-
Fig. 21-064	SK-0 1 6	土師器西周式	-	-	-	-	-	-	-
Fig. 21-065	SK-0 1 7	土師器 小皿	(7.4)	(5.4)	1.5	余切り	有	-	-
Fig. 21-066	SK-0 1 7	土師器 环	(12.0)	(7.4)	2.6	余切り	無	-	-
Fig. 21-067	SK-0 1 7	土師器 环	(10.1)	(6.5)	1.2	余切り	無	-	-
Fig. 21-068	SK-0 2 1	土師器 环	(12.6)	(6.6)	2.9	余切り	無	-	-
Fig. 21-069	SK-0 2 1	土師器 环	(13.5)	6.9	3.0	余切り	有	-	-
Fig. 21-070	SK-0 2 1	土師器 环	13.6	8.1	2.9	余切り	無	-	-
Fig. 21-071	SK-0 2 1	土師器 环	12.8	8.4	2.9	余切り	無	-	-
Fig. 21-072	SK-0 2 1	土师器 环	13.4	8.0	3.0	余切り	無	-	-
Fig. 21-073	SK-0 2 2	土师器 环	(13.0)	(8.4)	1.5	余切り	無	-	-
Fig. 21-074	SK-0 2 2	土师器 小皿	(14.6)	(9.4)	3.4	余切り	無	-	-
Fig. 21-075	SK-0 2 2	「新器」环	(14.6)	(9.2)	3.4	余切り	無	-	-
Fig. 21-076	SK-0 2 4	白磁 瓶(ペトナム)	-	(5.5)	-	-	-	-	-
Fig. 21-077	SK-0 3 5	土师器 小皿	(8.6)	(7.8)	7.5	余切り	無	-	-
Fig. 21-078	SK-0 3 5	土师器 环	(11.6)	8.0	2.4	余切り	無	-	-
Fig. 21-079	SK-0 3 1	土师器 小皿	(6.5)	(6.5)	1.1	余切り	無	-	-
Fig. 21-080	SK-0 3 1	土师器 环	(13.0)	(8.4)	2.7	余切り	無	-	-
Fig. 21-081	SK-0 3 3	土师器 环	(12.0)	(8.0)	2.8	余切り	無	-	-
Fig. 21-082	SK-0 3 3	土师器 环	(12.8)	(8.0)	2.6	余切り	無	-	-
Fig. 21-083	SK-0 3 3	土师器 环	(13.0)	(9.4)	2.8	余切り	無	-	-
Fig. 21-084	SK-0 3 3	土师器 环	(10.2)	(7.2)	2.8	余切り	無	-	-
Fig. 21-085	SK-0 3 3	土师器 环 b	(13.0)	(7.4)	4.0	余切り	無	-	-
Fig. 21-086	SK-0 3 3	土师器 环	(19.0)	-	-	-	-	-	-
Fig. 21-087	SK-0 3 4	白磁 瓶	(14.0)	-	-	-	-	-	-
Fig. 21-088	SK-0 3 4	繪物陶瓶	-	(8.4)	-	-	-	-	-
Fig. 21-089	SK-0 3 4	繪物陶台子(身)	(2.3)	(3.6)	2.1	-	-	-	-
Fig. 21-090	SK-0 3 6	「新器」瓶	(36.0)	-	18.6	-	-	-	-
Fig. 22-091	SK-0 3 7	土师器 小皿	6.8	5.4	1.2	余切り	有	-	-
Fig. 22-092	SK-0 3 7	阿波無系直筒 瓶	16.2	-	-	-	-	-	-

Tab. 2 93次調査出土遺物観察表2

Fig. No.	出 土 遺 物	名 称	口 直	底脚径	深 度	切 取 し	破 状 正 面	備 考	
								(括弧は復元値) cm	
Fig. 22-093	S K - 0 3 7	土器底系 扇	19.0	—	—	—	—	—	
Fig. 22-094	S K - 0 3 8	土器底系 扇	—	—	—	—	—	—	
Fig. 22-095	S K - 0 3 9	土器底系 扇	9.3	7.8	0.9	手切り	有	—	
Fig. 22-096	S K - 0 3 8	土器底系 扇	—	—	—	—	—	—	
Fig. 22-097	S K - 0 3 8	土器底系 扇	(15.9)	(4.8)	(7.5)	—	—	—	
Fig. 22-098	S K - 0 3 9	土器底系 扇	(16.2)	(4.8)	(5.6)	—	—	—	
Fig. 22-099	S K - 0 3 8	土器底系 扇	(16.6)	(4.2)	(5.1)	—	—	—	
Fig. 22-100	S K - 0 3 8	土器底系 扇 平底面	(10.4)	(5.0)	(2.4)	—	—	—	
Fig. 22-101	S K - 0 3 8	土器底	(10.5)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-102	S K - 0 2 6	土器底 扇	—	(5.8)	—	—	—	—	
Fig. 22-103	S K - 0 3 8	中脚部 扇	(25.0)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-104	S K - 0 3 9	青磁 扇 (中脚)	—	—	—	—	—	—	
Fig. 22-105	S P - 0 1 2	土器底 小底	(6.6)	(5.5)	1.1	手切り	無	—	
Fig. 22-106	S P - 0 1 3	土器底 小底	(4.4)	(4.4)	2.6	手切り	有	—	
Fig. 22-107	S P - 0 2 5	土器底 小底	(5.6)	(3.4)	1.7	手切り	—	—	
Fig. 22-108	S P - 0 2 6	折断 壁	(6.4)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-109	S P - 0 2 1	土器底 小底	(8.3)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-110	S P - 0 3 1	折断 李(李)壳	—	(4.6)	—	—	—	—	
Fig. 22-111	S P - 0 4 1	土器底 小底	(7.8)	(5.9)	1.2	手切り	無	—	
Fig. 22-112	S P - 0 4 1	土器底 小底	(7.8)	(5.6)	1.6	手切り	無	—	
Fig. 22-113	S P - 0 4 1	五貫 瓶	(5.4)	—	6.8	—	—	—	
Fig. 22-114	S P - 0 4 3	瓦器 小底	—	—	—	—	—	—	
Fig. 22-115	S P - 0 4 8	中脚部 扇	(7.8)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-116	S P - 0 5 5	土器底 小底	(7.2)	(4.6)	1.4	手切り	無	—	
Fig. 22-117	S P - 0 5 5	土器底 小底	(7.2)	(5.0)	1.4	手切り	有	—	
Fig. 22-118	S P - 0 5 5	土器底 小底	(7.1)	(6.0)	1.4	手切り	無	—	
Fig. 22-119	S P - 0 5 5	土器底 小底	(8.9)	6.2	3.3	手切り	有	内側黒墨アリ	
Fig. 22-120	S P - 0 6 0	陶瓦 扇	(2.7)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-121	S P - 0 6 0	陶瓦 扇	(2.7)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-122	S P - 0 6 6	陶瓦 扇	(3.7)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-123	S P - 0 5 6	土器底 扇	—	—	—	—	—	—	
Fig. 22-124	S P - 0 4 0	土器底 扇	(11.9)	(8.2)	3.9	手切り	無	—	
Fig. 22-125	S P - 0 4 0	同上 扇	(10.8)	(5.9)	2.3	—	—	—	
Fig. 22-126	S P - 0 4 0	同上 扇	(18.0)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-127	S P - 0 4 0	同上 扇	(17.5)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-128	S P - 0 4 0	瓦質 槌	(29.6)	(11.8)	0.9	—	—	—	
Fig. 22-129	S P - 0 4 1	陶瓦 扇	(17.2)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-130	S P - 0 4 1	陶瓦 扇	(17.2)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-131	S P - 0 4 1	陶瓦 扇	(17.2)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-132	S P - 0 4 1	陶瓦 扇	(17.2)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-133	S P - 0 4 1	陶瓦 扇	(17.2)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-134	S P - 0 4 5	土器底 扇	(8.2)	(7.6)	0.8	手切り	無	—	
Fig. 22-135	S P - 0 4 5	土器底 扇	(15.2)	(8.6)	2.4	手切り	無	—	
Fig. 22-136	S P - 0 4 5	土器底 扇	(15.8)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-137	S P - 0 4 5	陶瓦 扇	(14.8)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-138	S P - 0 4 5	土器底 扇	(11.6)	(7.3)	2.8	手切り	無	—	
Fig. 22-139	S P - 0 4 5	陶瓦 扇	(11.6)	(7.3)	2.8	手切り	無	—	
Fig. 22-140	S P - 4 5 4	陶瓦 扇	—	—	—	—	—	—	
Fig. 22-141	S P - 4 5 4	土器底 小底	6.0	6.4	1.1	手切り	有	—	
Fig. 22-142	S P - 0 5 7	土器底 小底	(8.2)	(7.4)	1.4	手切り	有	—	
Fig. 22-143	S P - 4 6 7	陶瓦 扇	(2.8)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-144	S K - 0 4 7	土器底 小底	(2.6)	5.1	1.4	手切り	無	—	
Fig. 22-145	S K - 0 4 7	土器底 小底	(2.4)	(5.5)	1.2	手切り	無	—	
Fig. 22-146	S K - 0 4 7	土器底 扇	(12.8)	(8.4)	2.8	手切り	無	—	
Fig. 22-147	S K - 0 5 3	土器底 小底	7.6	5.4	1.5	手切り	無	—	
Fig. 22-148	S K - 0 5 3	土器底 小底	(8.2)	5.8	1.6	手切り	無	—	
Fig. 22-149	S K - 0 5 3	天日輪	—	(4.4)	—	—	—	—	
Fig. 22-150	S K - 0 5 3	伊万里青花 蕉	—	—	—	—	—	—	
Fig. 22-151	S K - 0 5 3	木付 蕉	—	(7.0)	—	—	—	—	
Fig. 22-152	S K - 0 5 4	土器底 扇	12.2	7.5	2.9	手切り	無	—	
Fig. 22-153	S K - 0 5 5	土器底 小底	(6.4)	(4.2)	1.0	手切り	無	—	
Fig. 22-154	S K - 0 5 5	土器底 扇	(12.0)	(8.0)	2.9	手切り	無	—	
Fig. 22-155	S K - 0 5 6	明治期 蕉	(18.3)	(9.5)	3.4	—	—	—	
Fig. 22-156	S K - 0 5 6	腹裏青釉系 扇 大柄	(26.2)	—	—	—	—	—	
Fig. 22-157	S K - 0 5 6	土器底 小底	(7.4)	(5.8)	1.4	手切り	無	—	
Fig. 22-158	S K - 0 6 6	土器底 小底	(9.0)	(6.4)	1.6	手切り	有	—	
Fig. 22-159	S K - 0 6 7	土器底	—	—	—	—	—	—	残存件5.1
Fig. 22-160	S K - 0 6 8	土器底 小底	8.0	6.1	1.4	手切り	無	—	
Fig. 22-161	S K - 0 6 8	土器底 小底	(7.4)	(5.8)	1.4	手切り	無	—	
Fig. 22-162	S K - 0 6 8	土器底 扇	(11.2)	(10.0)	2.7	手切り	無	—	
Fig. 22-163	S K - 0 6 8	土器底 扇	(13.4)	(9.8)	2.6	手切り	無	—	
Fig. 22-164	S K - 0 6 8	土器底 扇	(12.6)	(9.6)	2.6	手切り	無	—	
Fig. 22-165	S K - 0 6 8	土器底 扇	(11.5)	(9.5)	2.5	手切り	無	—	
Fig. 22-166	S K - 0 6 8	土器底 扇	(12.4)	(8.0)	2.7	手切り	無	—	
Fig. 22-167	S K - 0 6 8	土器底 扇	(12.6)	(8.5)	2.8	手切り	無	—	
Fig. 22-168	S K - 0 6 8	土器底 扇	(12.8)	(9.3)	3.2	手切り	無	—	
Fig. 22-169	S K - 0 6 8	土器底 扇	(13.8)	(10.2)	2.7	手切り	有	—	
Fig. 22-170	S K - 0 6 8	土器底 扇	(12.8)	(8.4)	2.7	手切り	無	—	
Fig. 22-171	S K - 0 6 8	土器底 扇	(11.2)	(8.0)	3.0	手切り	無	—	
Fig. 22-172	S K - 0 6 8	土器底 扇	—	—	—	—	—	—	(瓶形)12.4、縦幅、厚さ
Fig. 22-173	S K - 0 7 6	土器底 小底	(8.8)	(7.2)	(1.8)	手切り	有	—	
Fig. 22-174	S K - 0 7 0	土器底 弦	(12.2)	(8.5)	(2.3)	手切り	無	—	
Fig. 22-175	S K - 0 7 6	土器底 小底	7.6	5.8	1.3	手切り	—	—	
Fig. 22-176	S K - 0 7 6	土器底 弦	—	(7.0)	—	—	—	—	
Fig. 22-177	S K - 0 7 6	土器底 小底	8.2	6.4	1.3	手切り	有	—	
Fig. 22-178	S K - 0 7 6	土器底 弦	—	—	—	—	—	—	
Fig. 22-179	S K - 0 7 9	土器底 弦	(15.0)	(9.0)	(3.1)	手切り	有	—	

Tab. 3 93次調査出土遺物觀察表 3

Fig. No.	出土地點	名	口径	底面形	高さ	切り離し	板状刀痕	備考	
								(cm)	(cm)
Fig. 33-150	SK-3-79	陶器片群 四重底	(8.6)	—	—	—	—	—	—
Fig. 33-151	SK-3-80	陶器片群 四重底	16.6	4.2	6.9	—	—	—	—
Fig. 33-152	SK-3-81	白磁 瓶	—	(4.4)	—	—	—	—	—
Fig. 33-153	SK-3-82	白磁 瓶	—	—	—	—	—	—	—
Fig. 33-154	SK-3-83	白磁 瓶	(10.4)	—	—	—	—	—	—
Fig. 33-155	SK-3-84	白磁 瓶	(25.0)	(17.4)	(8.2)	—	—	—	—
Fig. 33-156	SK-3-85	白磁 瓶	(8.5)	(6.4)	1.8	糸切り	無	—	—
Fig. 33-157	SK-3-86	白磁 瓶	(8.5)	—	—	—	—	—	—
Fig. 33-158	SK-3-87	白磁 瓶	(8.5)	—	—	—	—	—	—
Fig. 33-159	SK-3-88	白磁 瓶	(8.5)	—	—	—	—	—	—
Fig. 33-160	SK-3-89	白磁 瓶	12.6	7.5	2.8	糸切り	無	—	—
Fig. 33-161	SK-3-90	白磁 瓶	(12.4)	(8.2)	3.3	糸切り	無	—	—
Fig. 33-162	SK-3-91	白磁 瓶	(12.8)	(8.2)	2.8	糸切り	無	—	—
Fig. 33-163	SK-3-92	白磁 瓶	(13.0)	(8.7)	2.8	糸切り	無	—	—
Fig. 33-164	SK-3-93	白磁 瓶	(10.6)	—	—	—	—	—	—
Fig. 33-165	SK-3-94	白磁 瓶	(17.0)	(7.0)	6.5	—	—	—	—
Fig. 34-156	SK-3-95	青磁 瓶	—	—	—	—	—	—	—
Fig. 34-157	SK-3-96	青磁 瓶	(6.5)	—	—	—	—	—	—
Fig. 34-158	SK-3-97	青磁 瓶	—	—	—	—	—	—	—
Fig. 34-159	SK-3-98	青磁 瓶	(13.4)	(8.6)	2.1	糸切り	無	—	—
Fig. 34-160	SK-3-99	青磁 瓶	(13.5)	(8.5)	2.3	糸切り	無	—	—
Fig. 34-200	SK-3-100	青磁 瓶	(11.0)	(12.4)	2.6	糸切り	無	—	—
Fig. 34-201	SK-3-101	青磁 瓶	(7.4)	(5.5)	1.4	糸切り	無	—	—
Fig. 34-202	SK-3-102	青磁 瓶	(10.0)	(9.8)	2.4	糸切り	無	—	—
Fig. 34-203	SK-3-103	青磁 瓶	12.8	8.1	2.5	糸切り	無	—	—
Fig. 34-204	SK-3-104	青磁 瓶	12.6	10.0	2.5	糸切り	有	—	—
Fig. 34-205	SK-3-105	青磁 瓶	7.9	5.5	1.2	糸切り	有	—	—
Fig. 34-206	SK-3-106	青磁 瓶	(8.5)	(5.5)	1.4	糸切り	無	—	—
Fig. 34-207	SK-3-107	青磁 瓶	(7.8)	(5.4)	1.3	糸切り	無	—	—
Fig. 34-208	SK-3-108	青磁 瓶	(7.5)	(5.4)	1.4	糸切り	無	—	—
Fig. 34-209	SK-3-109	青磁 瓶	(7.5)	(6.4)	1.2	糸切り	有	—	—
Fig. 34-210	SK-3-110	青磁 瓶	(8.5)	(6.5)	1.2	糸切り	無	—	—
Fig. 34-211	SK-3-111	青磁 瓶	(8.5)	(6.5)	1.2	糸切り	無	—	—
Fig. 34-212	SK-3-112	青磁 瓶	8.0	6.9	1.3	糸切り	無	—	—
Fig. 34-213	SK-3-113	青磁 瓶	(8.0)	(5.0)	1.3	糸切り	無	—	—
Fig. 34-214	SK-3-114	青磁 瓶	(8.4)	(5.9)	1.2	糸切り	無	—	—
Fig. 34-215	SK-3-115	青磁 瓶	(6.4)	—	—	—	—	—	—
Fig. 34-216	SK-3-116	青磁 瓶	(12.4)	(8.6)	2.6	糸切り	無	—	—
Fig. 34-217	SK-3-117	青磁 瓶	(12.4)	(8.4)	2.6	糸切り	無	—	—
Fig. 34-218	SK-3-118	青磁 瓶	(12.6)	(7.4)	3.2	糸切り	無	—	—
Fig. 34-219	SK-3-119	青磁 瓶	(12.6)	(8.5)	2.6	糸切り	無	—	—
Fig. 34-220	SK-3-120	青磁 瓶	(12.7)	(7.6)	2.7	糸切り	無	—	—
Fig. 34-221	SK-3-121	青磁 瓶	(12.6)	(8.6)	2.5	糸切り	無	—	—
Fig. 34-222	SK-3-122	青磁 瓶	(12.4)	(8.1)	2.2	糸切り	有	—	—
Fig. 34-223	SK-3-123	青磁 瓶	(12.4)	(8.6)	2.2	糸切り	有	—	—
Fig. 34-224	SK-3-124	青磁 瓶	(12.4)	(8.6)	2.2	糸切り	有	—	—
Fig. 34-225	SK-3-125	青磁 瓶	(11.8)	(8.6)	2.3	糸切り	無	—	—
Fig. 34-226	SK-3-126	青磁 瓶	(11.8)	(8.9)	2.9	糸切り	有	—	—
Fig. 34-227	SK-3-127	青磁 瓶	12.6	9.6	2.8	糸切り	有	—	—
Fig. 34-228	SK-3-128	白磁 ハガ 壺	(10.0)	(5.5)	2.9	—	—	—	—
Fig. 34-229	SK-3-129	白磁 ハガ 壺	—	—	—	—	—	—	—
Fig. 34-230	SK-3-130	白磁 ハガ 壺	(10.0)	—	—	—	—	—	—
Fig. 34-231	SK-3-131	白磁 ハガ 壺	7.6	5.8	1.5	糸切り	無	—	—
Fig. 34-232	SK-3-132	白磁 ハガ 壺	(7.5)	4.6	1.7	糸切り	無	—	—
Fig. 34-233	SK-3-133	白磁 ハガ 壺	12.4	8.5	2.8	糸切り	有	—	—
Fig. 34-234	SK-3-134	白磁 ハガ 壺	7.5	5.5	1.2	糸切り	有	—	—
Fig. 34-235	SK-3-135	白磁 ハガ 壺	(11.8)	(8.9)	2.2	糸切り	有	—	—
Fig. 34-236	SK-3-136	白磁 ハガ 壺	(12.4)	(7.0)	3.0	糸切り	無	—	—
Fig. 34-237	SP-1-138	輪状器 鋸	(38.0)	(8.5)	(22.8)	糸切り	無	—	—
Fig. 34-238	SP-1-139	輪状器 鋸	(6.0)	(4.8)	—	糸切り	無	—	—
Fig. 34-239	SP-1-140	輪状器 鋸	—	—	—	糸切り	無	—	—
Fig. 34-240	SP-1-141	輪状器 鋸	(8.6)	(7.0)	1.6	糸切り	有	—	—
Fig. 34-241	SP-1-142	輪状器 鋸	6.8	5.2	1.4	糸切り	無	—	—
Fig. 34-242	SP-1-143	輪状器 鋸	5.6	4.3	1.7	糸切り	無	—	—
Fig. 34-243	SP-1-144	白磁 壺	(9.0)	—	—	—	—	—	—
Fig. 34-244	SP-1-145	白磁 小壺	7.8	5.5	1.6	糸切り	有	—	—
Fig. 34-245	SP-1-146	白磁 小壺	12.4	8.5	2.5	糸切り	有	—	—
Fig. 34-246	SP-1-147	白磁 小壺	(11.6)	(9.2)	2.8	糸切り	無	—	—
Fig. 34-247	SP-1-148	白磁 小壺	(11.2)	(8.4)	3.0	糸切り	有	—	—
Fig. 34-248	SP-1-149	白磁 小壺	—	(11.6)	—	糸切り	有	—	—
Fig. 34-249	SP-1-150	白磁 小壺	(16.8)	—	—	糸切り	無	—	—
Fig. 34-250	SP-2-148	白磁 瓶	—	—	—	糸切り	無	—	—
Fig. 34-251	SP-2-149	白磁 瓶	(12.6)	(7.6)	2.6	糸切り	無	—	—
Fig. 34-252	SP-2-150	白磁 瓶	(11.8)	(8.1)	2.9	糸切り	無	—	—
Fig. 34-253	SP-2-151	白磁 瓶	(12.6)	(8.7)	2.7	糸切り	有	—	—
Fig. 34-254	SP-2-152	白磁 瓶	(7.4)	(5.6)	1.3	糸切り	無	—	—
Fig. 34-255	SP-2-153	白磁 瓶	(11.0)	(7.3)	2.3	糸切り	有	—	—
Fig. 34-256	SP-2-154	白磁 瓶	12.4	9.6	2.4	糸切り	有	—	—
Fig. 34-257	SP-2-155	白磁 瓶	(14.0)	(9.2)	3.6	糸切り	有	—	—
Fig. 34-258	SP-2-156	白磁 瓶	(12.5)	(8.4)	2.4	糸切り	有	—	—
Fig. 34-259	SP-2-157	白磁 瓶	(11.4)	(8.1)	2.4	糸切り	有	—	—
Fig. 34-260	SP-2-158	白磁 瓶	(12.5)	(8.6)	2.6	糸切り	無	—	—
Fig. 34-261	SP-2-159	白磁 瓶	—	—	—	糸切り	無	—	—
Fig. 34-262	SP-2-160	白磁 瓶	(8.5)	(6.7)	1.3	糸切り	有	—	—
Fig. 34-263	SP-2-161	白磁 瓶	(12.0)	(8.6)	3.1	糸切り	有	—	—
Fig. 34-264	SP-2-162	白磁 瓶	(12.0)	(8.6)	2.6	糸切り	有	—	—
Fig. 34-265	SP-2-163	白磁 瓶	(6.5)	—	—	糸切り	無	—	—
Fig. 34-266	SP-2-164	白磁 瓶	(5.0)	—	—	糸切り	無	—	—
Fig. 34-267	SP-2-165	白磁 瓶	8.5	6.6	1.3	糸切り	無	—	—

Table 4 93次調査出土遺物観察表 4

Fig. No.	出土地點	石器	(括弧は復元値) cm				直り難し	版状社裏	備考	
			口 径	底周長	高 度	厚 度				
Fig. 35-268	S P - 3-3	土師器 小皿	(8.4)	(6.5)	1.3	0.4	直り難い	有		
Fig. 35-269	S P - 3-3	土師器 小皿	8.9	7.5	1.4	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-270	S P - 3-3	土師器 甌	—	—	—	—	直り難い	有		
Fig. 35-271	S P - 3-3	土師器 甌	(15.2)	(12.0)	2.5	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-272	S P - 3-3	土師器 甌	(16.8)	(13.5)	2.5	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-273	S P - 3-3	土師器 甌	(12.9)	(9.0)	2.7	0.5	直り難い	有		
Fig. 35-274	S P - 3-3	土師器 小皿	7.8	6.0	1.6	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-275	S P - 3-3	土師器 小皿	(9.8)	(6.2)	1.4	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-276	S P - 3-3	土師器 小皿	(9.6)	(7.6)	2.0	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-277	S P - 3-3	胡野(手取)瓦蓋環	(3.4)	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-278	S P - 3-3	土師器 小皿	8.2	6.1	1.7	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-279	S P - 3-3	土師器 小皿	8.0	5.2	1.9	0.5	直り難い	有		
Fig. 35-280	S P - 3-3	(上層)	(3.2)	(2.6)	1.7	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-281	S P - 3-3 (下層)	土師器 小皿	(8.8)	(6.4)	1.3	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-282	S P - 3-3	土師器 甌	(8.6)	(5.3)	1.7	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-283	S P - 3-3 (上層)	土師器 甌	(11.5)	(8.1)	2.0	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-284	S P - 3-3 (上層)	土師器 甌	(12.4)	(8.9)	2.5	0.5	直り難い	有		
Fig. 35-285	S P - 3-3 (上層)	土師器 甌	(15.9)	(8.4)	2.9	0.5	直り難い	有		
Fig. 35-286	S P - 3-3 (上層)	土師器 甌	(2.8)	(6.6)	2.5	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-287	S P - 3-3	土師器 环	(3.4)	(9.3)	2.8	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-288	S P - 3-3 (下層)	白陶 瓢	—	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-289	S P - 3-3 (下層)	白陶 瓢	(3.2)	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-290	S P - 3-3	同安窯系青磁 瓢	—	(4.0)	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-291	S P - 3-3	李朝(高麗)安東窯	—	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-292	S P - 3-3 (下層)	白陶 瓢	—	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-293	S P - 5-0-5	土師器 小皿	8.0	6.1	1.4	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-294	S P - 5-0-3	土師器 环	(12.2)	(12.6)	2.6	0.5	直り難い	有		
Fig. 35-295	S P - 5-0-8	土師器 小皿	(5.1)	(4.1)	1.4	0.4	直り難い	有		
Fig. 35-296	S P - 5-1-2	土師器 小皿	7.0	5.2	1.3	0.4	直り難い	有		
Fig. 35-297	S P - 5-1-5	土師器 小皿	(7.6)	(5.4)	1.4	0.4	直り難い	有		
Fig. 35-298	S P - 5-1-5	土師器 小皿	(8.1)	(6.7)	1.1	0.4	直り難い	有		
Fig. 35-299	S P - 5-1-5	土師器 小皿	(8.8)	(7.0)	1.2	0.4	直り難い	有		
Fig. 35-300	S P - 5-1-5	土師器 环	—	(8.2)	—	—	直り難い	有		
Fig. 35-301	S P - 5-1-6	土師器 小皿	(8.4)	(6.7)	1.2	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-302	S P - 5-1-6	土師器 小皿	(7.6)	(6.2)	1.2	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-303	S P - 5-1-6	土師器 环	(12.6)	(9.0)	2.2	0.5	直り難い	有		
Fig. 35-304	S P - 5-1-6	土師器 环	(18.4)	(9.6)	3.1	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-305	S P - 5-3-4	土師器 小皿	(7.8)	(6.5)	1.1	0.4	直り難い	有		
Fig. 35-306	S P - 5-4-0	同安窯系青磁 瓢	—	(4.2)	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-307	S P - 5-4-0	同安窯系青磁 瓢	(16.4)	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-308	S P - 5-4-0	同安窯系青磁 瓢	(7.6)	(6.5)	1.2	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-309	S P - 5-4-5	同安窯系青磁 瓢	(7.8)	(6.8)	1.3	0.4	直り難い	有		
Fig. 35-310	S P - 5-4-5	同安窯系青磁 瓢	(7.0)	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-311	S P - 5-4-5	同安窯系青磁 瓢	(8.3)	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-312	S P - 5-4-5	同安窯系青磁 瓢	(1.0)	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-313	S P - 5-5-9	土師器 小皿	(9.3)	(7.2)	1.4	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-314	S P - 5-5-5	土師器 瓢	(13.5)	(8.5)	2.8	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-315	S P - 5-6-9	土師器 小皿	—	3.2	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-316	S P - 5-6-9	同安窯系青磁 瓢	—	(10.6)	(5.8)	2.5	—	直り難い	無	
Fig. 35-317	S P - 5-7-2	土師器 小皿	(9.2)	(6.5)	1.4	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-318	S P - 5-7-2	白陶 瓢	—	(17.2)	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-319	S P - 5-7-5	同安窯系青磁 瓢	—	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-320	S P - 5-7-5	同安窯系青磁 瓢	—	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-321	S P - 5-7-6	土師器 瓢	(7.2)	(6.6)	1.2	0.4	直り難い	有		
Fig. 35-322	S P - 5-7-6	土師器 瓢	(13.8)	(16.2)	2.6	0.5	直り難い	有		
Fig. 35-323	S P - 5-7-7	土師器 瓢	(13.2)	(8.9)	2.7	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-324	S P - 5-7-7	同安窯系青磁 瓢	(14.0)	(16.0)	3.1	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-325	S P - 5-7-7	土師器 瓢	(12.6)	(8.9)	2.7	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-326	S P - 5-7-7	土師器 瓢	(12.4)	(8.6)	5.3	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-327	S P - 5-7-7	同安窯系青磁 瓢	(25.6)	—	—	—	不明	少部分多くむき		
Fig. 35-328	S P - 5-9-1	土師器 小皿	(8.0)	(7.5)	1.5	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-329	S P - 5-9-1	土師器 小皿	(7.2)	(6.6)	1.2	0.4	直り難い	有		
Fig. 35-330	S P - 5-9-1	土師器 瓢	(13.8)	(16.2)	2.6	0.5	直り難い	有		
Fig. 35-331	S P - 5-7-7	土師器 瓢	(13.2)	(8.9)	2.7	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-332	S P - 5-7-7	同安窯系青磁 瓢	(14.0)	(16.0)	3.1	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-333	S P - 5-7-7	土師器 瓢	(12.6)	(8.9)	2.7	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-334	S P - 5-7-7	同安窯系青磁 瓢	(25.6)	—	—	—	不明	少部分多くむき		
Fig. 35-335	S P - 5-9-1	土師器 小皿	(8.0)	(7.5)	1.5	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-336	S P - 5-9-1	白陶 瓢	(16.0)	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-337	S P - 5-9-1	同安窯系青磁 瓢	(13.8)	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-338	S P - 5-9-1	瓦質 瓢	(26.7)	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-339	S P - 5-9-1	瓦質 瓢	(12.5)	(9.8)	2.1	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-340	S P - 5-9-1	瓦質 瓢	(9.3)	(7.2)	2.2	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-341	S P - 5-9-1	白陶 瓢	(16.0)	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-342	S P - 5-9-1	同安窯系青磁 瓢	(13.8)	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-343	S P - 5-9-1	瓦質 瓢	(26.7)	—	—	—	直り難い	無		
Fig. 35-344	S P - 5-9-1	瓦質 瓢	(10.6)	(8.8)	1.9	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-345	S P - 5-9-1	瓦質 瓢	(12.5)	(9.8)	2.1	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-346	S P - 5-9-1	瓦質 瓢	(12.5)	(9.8)	2.1	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-347	S D - 0-5	土師器 小皿	(8.0)	(7.7)	1.1	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-348	S D - 0-5	土師器 小皿	8.5	8.0	1.5	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-349	S D - 0-5	土師器 小皿	(8.5)	(7.8)	1.1	0.4	直り難い	有		
Fig. 35-350	S D - 0-5	土師器 小皿	(12.0)	(10.6)	3.0	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-351	S D - 0-5 (南側)	土師器 小皿	(12.8)	(10.6)	3.1	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-352	S D - 0-5 (北側)	土師器 小皿	(12.8)	(10.6)	3.1	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-353	S D - 0-5	土師器 小皿	(8.6)	(7.2)	1.1	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-354	S D - 0-5	土師器 小皿	(8.6)	(7.2)	1.4	0.4	直り難い	有		
Fig. 35-355	S D - 0-5	土師器 小皿	(9.0)	(7.2)	1.4	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-356	S D - 0-5	土師器 小皿	(8.4)	(6.0)	1.2	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-357	S D - 0-5	土師器 瓢	(11.6)	(7.8)	2.8	0.5	直り難い	有		
Fig. 35-358	S D - 0-5	土師器 瓢	(11.6)	(8.4)	2.3	0.5	直り難い	有		
Fig. 35-359	S D - 0-5	土師器 瓢	(12.4)	(9.0)	2.8	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-360	S E - 0-1 (右側み)	土師器 小皿	(7.2)	(5.8)	1.1	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-361	S E - 0-1	土師器 小皿	(7.4)	(5.7)	1.5	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-362	S E - 0-1 (左側み)	土師器 小皿	7.5	6.0	2.0	0.5	直り難い	無		
Fig. 35-363	S E - 0-1	土師器 小皿	(8.0)	(5.6)	1.6	0.4	直り難い	無		
Fig. 35-364	S E - 0-1 (右側み)	土師器 小皿	(8.0)	(5.6)	1.6	0.4	直り難い	無		

Tab. 5 93次調査山土遺物観察表5

Fig. No.	M 土 墓 標	名 領	口 径	底 高	壁 高	(括弧は復元値) cm		備 考
						配 深	切り廻し	
Fig. 43-355	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	—	(8.6)	—	無	無	
Fig. 43-356	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	—	(8.6)	—	無	有	
Fig. 43-357	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.2)	(7.8)	2.8	無	無	
Fig. 43-358	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-359	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	有	
Fig. 43-360	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	有	
Fig. 43-361	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-362	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-363	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-364	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-365	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-366	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-367	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-368	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-369	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-370	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-371	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-372	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-373	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-374	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-375	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-376	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-377	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-378	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-379	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-380	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-381	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-382	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-383	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-384	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-385	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-386	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-387	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-388	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-389	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-390	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-391	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-392	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-393	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-394	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-395	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-396	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-397	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-398	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-399	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-400	S.E.-0.1 (小縫み内)	土被留 砂	(12.6)	(8.6)	(5.9)	無	無	
Fig. 43-401	遺物付石塚	白磁碗	(8.3)	—	—	—	—	
Fig. 43-402	遺物付石塚	青白釉合子蓋	(8.4)	—	—	—	—	
Fig. 43-403	遺物付石塚	兔毫文青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-404	遺物付石塚	兔毫文青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-405	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-406	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-407	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-408	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-409	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-410	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-411	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-412	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-413	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-414	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-415	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-416	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-417	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-418	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-419	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-420	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-421	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-422	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-423	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-424	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-425	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-426	遺物付石塚	白安楽系青花瓶	(15.8)	—	—	—	—	
Fig. 43-427	白又斑上衣	伊万里青花瓶	(13.4)	—	—	—	—	
Fig. 43-428	第2号遺物付石塚	象嵌 磁	(6.1)	—	—	—	—	
Fig. 43-429	第2号遺物付石塚	象嵌 磁	(6.0)	—	—	—	—	
Fig. 43-430	第2号遺物付石塚	象嵌 磁	(6.0)	—	—	—	—	
Fig. 43-431	地玉下付多輪	象嵌 磁	(10.2)	(4.6)	3.7	—	—	
Fig. 43-432	地玉下付多輪	象嵌 磁	(10.2)	(4.6)	3.7	—	—	
Fig. 43-433	地玉下付多輪	象嵌 磁	(10.2)	(4.6)	3.7	—	—	
Fig. 43-434	トレンチ窓井上層	白磁 磁	(14.4)	—	—	—	—	
Fig. 43-435	トレンチ窓井上層	白磁 磁	(15.2)	—	—	—	—	
Fig. 43-436	トレンチ窓井上層	白磁 磁	(15.6)	—	—	—	—	
Fig. 43-437	トレンチ窓井上層	白磁 磁	(16.6)	—	—	—	—	
Fig. 43-438	トレンチ窓井上層	白磁 磁	(16.6)	—	—	—	—	
Fig. 43-439	トレンチ窓井上層	白磁 磁	(16.6)	—	—	—	—	
Fig. 43-440	トレンチ窓井上層	白磁 磁	(16.6)	—	—	—	—	

Tab. 6 博多93次調査出土貨幣一覧

標図番号	遺構番号	銭貨名	外形(cm)	外縁厚(cm)	初鋤年代	時代
Fig.46-1	SK-02	□□寶	測定不能	測定不能	不明	不明
Fig.46-2	SK-27	紹聖元寶	2.42	0.14	1094年	北宋
Fig.46-3	SK-34	元豐通寶	2.42	0.13	1078年	北宋
Fig.46-4	SK-34	元祐通寶	2.45	0.13	1086年	北宋
Fig.46-5	SK-39	聖宋元寶	2.43	0.13	1101年	北宋
Fig.46-6	SK-105	政和通寶	2.43	0.13	1111年	北宋
Fig.46-7	SK-105	開元通寶	2.43	0.13	621年	唐
Fig.46-8	SK-110	元豐通寶	2.43	0.13	1078年	北宋
Fig.46-9	SE-07井戸内	治平元寶	2.42	0.13	1064年	北宋
Fig.46-10	SP-19	聖宋元寶	2.48	0.13	1101年	北宋
Fig.46-11	SP-19	洪武通寶	2.31	0.15	1368年	明
Fig.46-12	SP-172	元豐通寶	2.54	0.14	1078年	北宋
Fig.46-13	SP-172	皇宋通寶	2.48	0.13	1039年	北宋
Fig.46-14	SP-334上面	皇宋通寶	2.54	0.11	1039年	北宋
Fig.46-15	SP-403	元豐通寶	2.45	0.14	1078年	北宋
Fig.46-16	SP-574	元豐通寶	2.45	0.13	1078年	北宋
Fig.46-17	SK-110	開元通寶	2.35	0.13	621年	唐
Fig.46-18	SK-110	治平元寶	2.42	0.14	1064年	北宋
Fig.46-19	SK-110	紹聖元寶	2.42	0.15	1094年	北宋
Fig.46-20	SK-110	元豐通寶	2.47	0.13	1078年	北宋
Fig.46-21	SK-110	元豐通寶	2.54	0.13	1078年	北宋
Fig.46-22	SK-110	熙寧元寶	2.44	測定不能	1068年	北宋
Fig.46-23	SK-110	元祐通寶	2.47	0.13	1086年	北宋
Fig.46-24	B区包含層檢削	皇宋通寶	2.50	0.12	1039年	北宋
Fig.46-25	南側遺構検出時	政和通寶	2.52	0.14	1111年	北宋
Fig.46-26	A区東側第2面上面	政和通寶	2.50	0.13	1111年	北宋
Fig.46-27	排土除去B区	至道元寶	2.48	0.13	995年	北宋
Fig.46-28	排土除去B区	元豐通寶	2.42	0.14	1078年	北宋
Fig.46-29	排土除去B区	大觀通寶	2.46	0.14	1107年	北宋
Fig.46-30	排土除去B区	皇宋通寶	2.52	0.12	1039年	北宋
Fig.46-31	排土除去B区	天聖元寶	2.50	0.14	1023年	北宋
Fig.46-32	擾乱	元祐通寶	2.45	0.13	1086年	北宋
Fig.46-33	表採	寛永通寶	2.53	0.13	1626年	江戸
Fig.46-34	表採	熙寧元寶	2.48	0.13	1068年	北宋
Fig.46-35	表採	解読不明	2.37	0.13	不明	不明
Fig.46-36	表採	元符通寶	2.43	0.13	1098年	北宋
Fig.46-37	表採	熙寧元寶	2.47	0.14	1068年	北宋

### III 博多遺跡群93次発掘調査地の地形と地質

西南学院大学 機 望

#### 調査地の地形に関する従来の知見

博多遺跡群は、縄文海進の時期に一度海域となった地域であるが、縄文時代晚期以降、那珂川河口に形成された沿岸州や砂丘を核として陸化した三角州平野の上に展開している（下山1989）。現在の地表の起伏は、この平野を人為的に2m前後ほど盛上した結果形成されたものである。磯ほか（1・991）は、博多遺跡群の分布する地表面に海拔5～6mに達する3列の微高地を認め、それらが沿岸州を核として形成された3列の砂丘の高まりに対応することを明らかにした。

調査地点は、博多遺跡群北西部にあり、3列の微高地のうち最も博多湾寄りに位置し11世紀末頃に陸化した「息の濱」（おきのはま）の南部に隣接して位置している。調査地の地表は海拔高度5.1mであるが、最古の遺構面は海拔高度2.2m前後の位置に出現する。調査地点の地図上の位置は図1に示したように「息の濱」の形成過程を考える上でも重要な地点である（福岡市教育委員会、1992、博多30）。またこの地点は、福岡市教育委員会（1992、博多32）で報告された石積遺構S X 32から100mほど内陸側の位置にあり、石積遺構に示された13世紀末の海岸線との関係についても検討することも必要であろう。以上の観点から、調査地では、遺構面の下を更に2mほど掘削したトレーニング内部を調査して、遺構成立以前の地形地質環境について検討することとした。

#### 調査地のトレーニングの地質断面

調査地点の近傍では、ボーリング調査によって、縄文海進期の海成堆積層である博多湾シルト層が海拔-5m程度の位置まで堆積し、その上に海浜砂などから構成される箱崎砂層が約7m程の層厚で堆積していることが明らかになっている。調査地のトレーニング断面では、箱崎砂層上部2mほどを観察することができた。このトレーニングの断面図（図2）と写真を示しておく。

調査地点の地質断面（図2）から、遺構を形成する以前に自然堆積した箱崎砂層の内部に、数種類の方向の異なる斜層理が発達していることが読みとれる。断面図の最下部（海拔高度1m未満）に発達する斜層理は、走行N40°E傾斜35°S方向を示している。この斜層理は傾斜が大きくしかも一定方向に配列しているところから三角州前置層堆植物の斜層理と考えられる。しかし、斜層理の傾斜方向から判断される水流の方向は北西から南東方向となり、現在の那珂川の流向とは逆方向を示すことになる。この事実からは、この砂層堆積当時に調査地点の沖合いに沿岸州が形成されて、その内側の潟の方向に向けてこの砂層が堆積した可能性が考えられる。

三角州前置層の直上にあたる海拔高度1m前後の層には、黒褐色の酸化鉄や酸化マンガンの集積した砂が認められる。この集積層は、砂層堆積後地下水位の変動によってもたらされた2次の構造である。この酸化鉄などの集積層とこれより上の箱崎砂層は、北西側でN35°Eの走行を持ち度数北西に緩く傾く凹型斜層理を、南東側でN35°Eの走行と度数または一部で十数度南東側に傾く斜層理をそれぞれ有している。一般には三角州前置層は、水平な葉理を持つ頂置層に覆われるが、ここでは頂置層部分は北西から南東方向へ打ち寄せた波によって侵食された後、海浜砂が満潮位よりも形成されていた砂堆を乗り越えるように堆積した構造であるものと判断される。

箱崎砂層を覆って海拔高度2m前後の層準にある人為堆積砂層には、斜層理の構造は全く認められない。また、砂丘砂などの風成堆積物の構造もみとめられなかった。この砂層の層厚は一定で15世紀前後と考えられる遺構面の直下に分布すること等から、海浜砂または砂丘砂を人為的に均した構造と推定される。なお、調査地点では15世紀以降に人工的に地上げをした盛り上がり約3m堆積している。

#### 調査地点の地形環境

調査地点が陸化した年代を直接示す証拠は得られなかったが、箱崎砂層の最上部からは13世紀中頃以降の遺物が出土していることから、この年代以前には陸化していたものと判断される。大博通り付近でも「息の濱」の陸化は11世紀後半と判断されてきた。今回の調査結果はこの判断と整合的である。

また、博多遺跡群第60次調査地点で明らかになった海岸部の石堤護岸遺構の形成が13世紀の後半と考えられることなどから総合して、調査地点周辺は13世紀中頃になって一斉に陸域となったものと推定される。

今回の調査からは新たに、13世紀中頃以前に、調査地点よりも北西の位置に自然に形成された沿岸州が存在し、那珂川の河口を塞ぐように延びていた可能性があることが判明した。博多では近世に急速に海岸付近の陸化が進行しているが、その前地形として海岸の沖に沿岸州の存在があったものと考えられる。なお、調査地点は那珂川河口に隣接しており、市街地として安定した遺構が形成された時期は、第60次調査地点よりも遅れている。

#### 引用文献

- 福岡市教育委員会（1992）：博多30－博多遺跡群第60次調査報告－。福岡市埋蔵文化財調査報告書第285集、144pp.
- 福岡市教育委員会（1992）：博多32－博多遺跡群第68次調査報告－。福岡市埋蔵文化財調査報告書第287集、182pp.
- 磯 望・下山正一・大庭康時・池崎謙二・小林 茂・佐伯弘次（1991）：博多遺跡群周辺における遺跡形成環境の変遷。横山浩一先生退官記念事業会「日本における初期弥生文化の形成Ⅱ」、文献出版（株）、506-552p.
- 下山正一（1989）：福岡平野における縄文海進の規模と第四紀層。九大理研報（地質）、vol. 16, 37-58p.

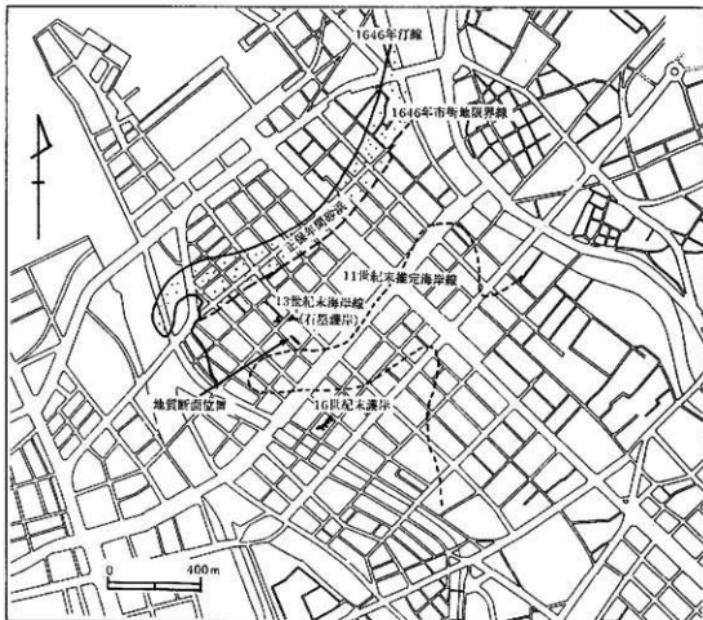


図1 博多遺跡群第93次発掘調査 地質断面位置関係図

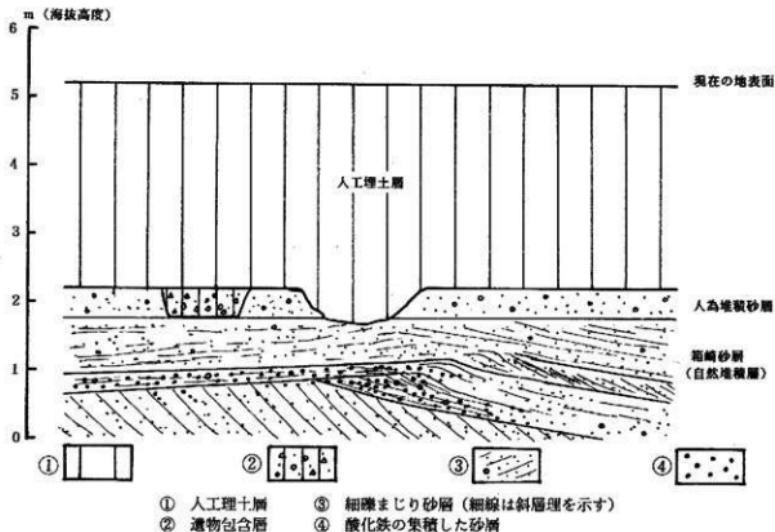
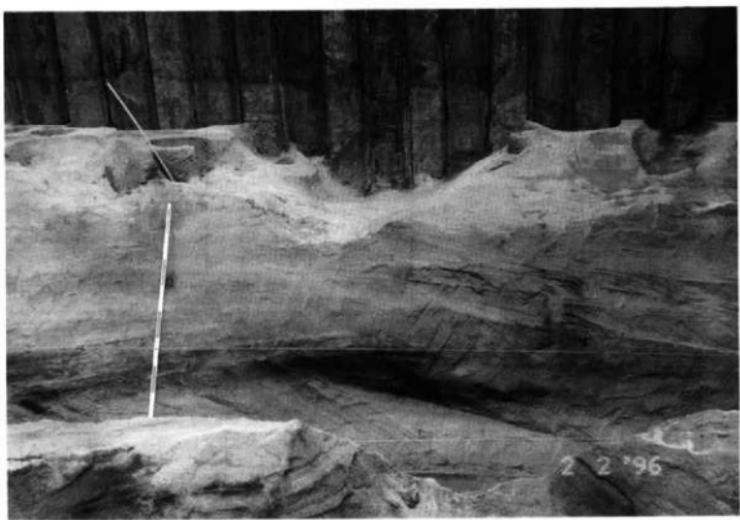


図2 博多遺跡群第93次発掘調査の地質断面図



トレンチ全体写真



断面図作成位置の壁面写真



(1) A区第1面全景(北東から)



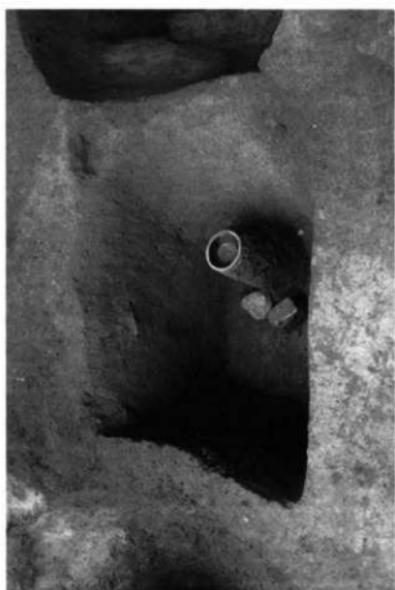
(2) A区第2面全景(北東から)



(1) B区第1面全景 (北西から)



(2) B区第2面全景 (北西から)



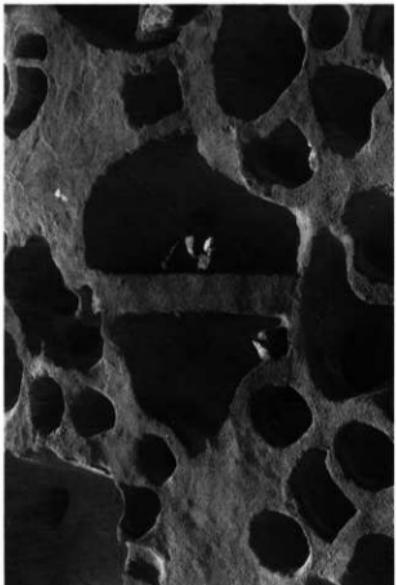
(1) SK-01 遺物出土状況（南東から）



(2) SK-02 検出状況（南西から）



(3) SK-34 検出状況（北から）



(4) SK-45 遺物出土状況（北東から）



(1) SK-79 検出状況 (南西から)



(2) SK-89、90 完掘状況 (東から)

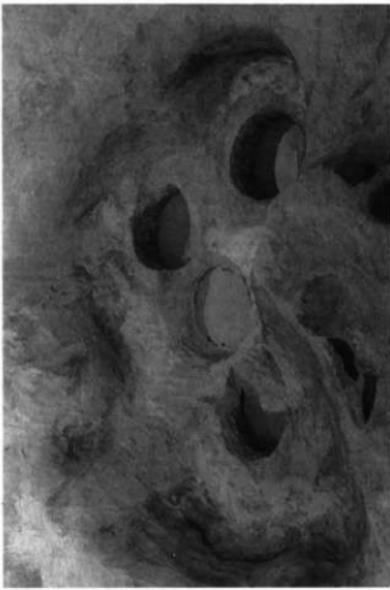


(3) SK-98、100 検出状況 (南東から)

(4) SK-110 検出状況 (西から)



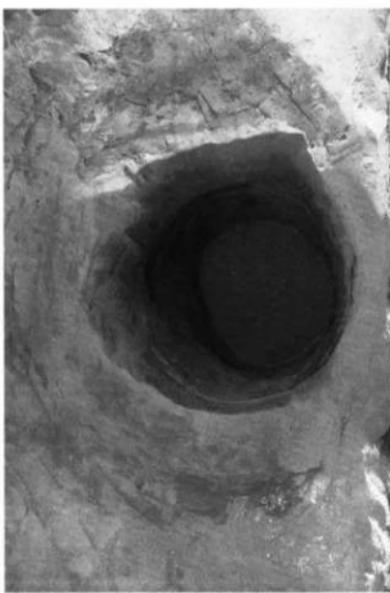
(2) SE-01 検出状況 (南東から)



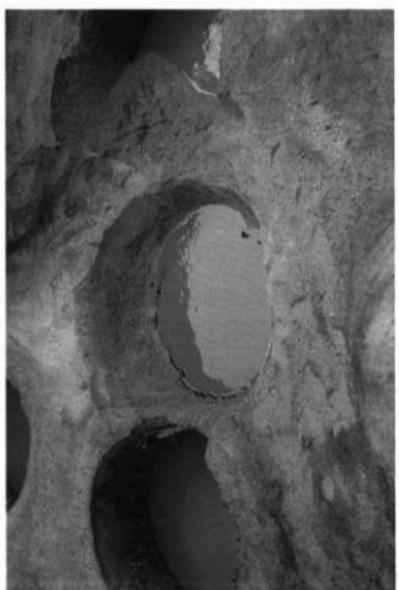
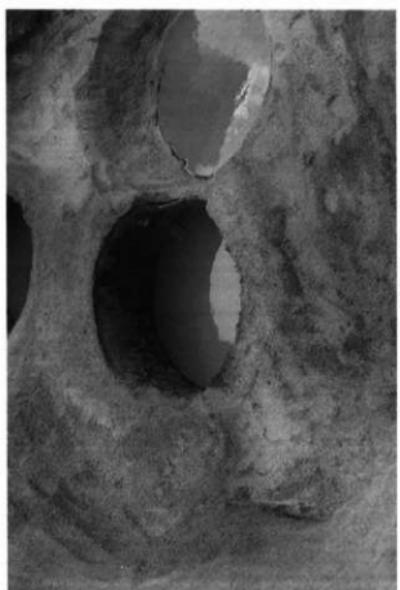
(4) SE-3、4、6、7 検出状況 (南西から)

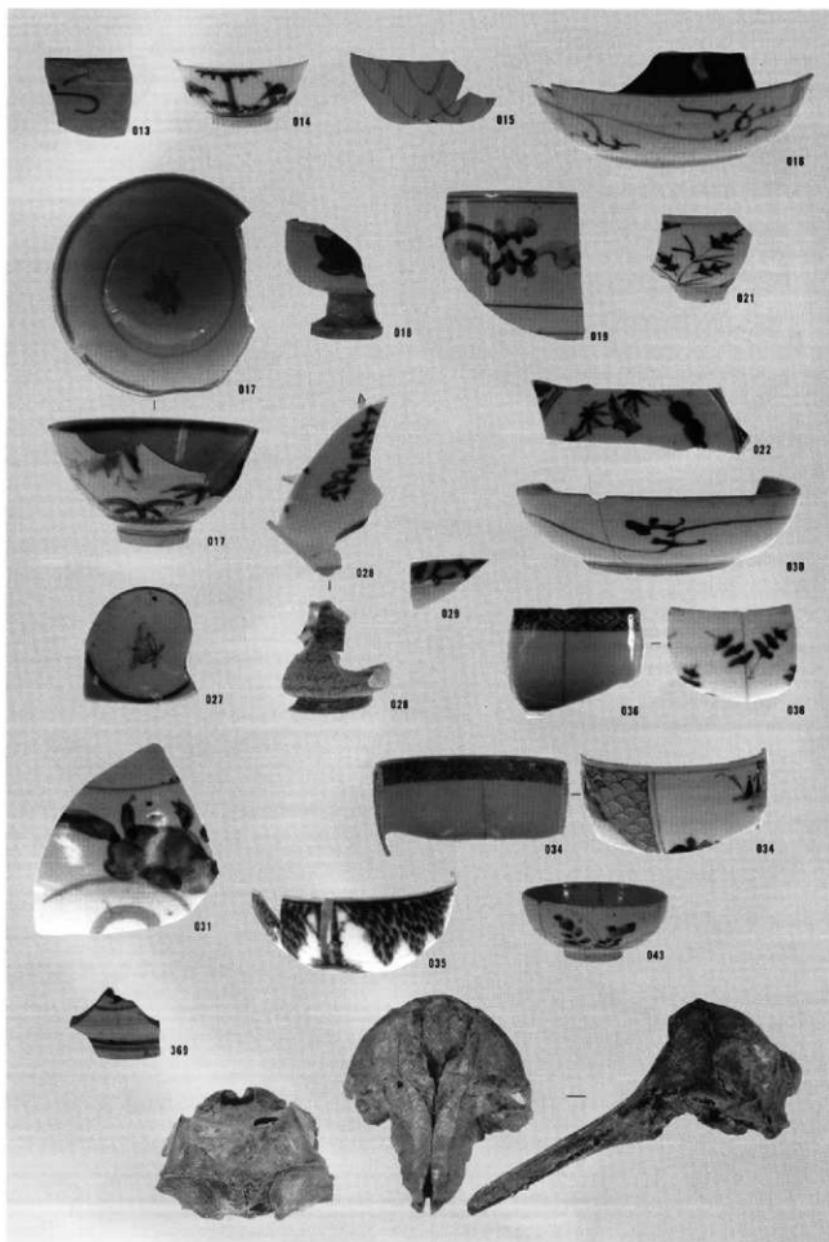


(1) SE-01 上面検出状況 (南東から)

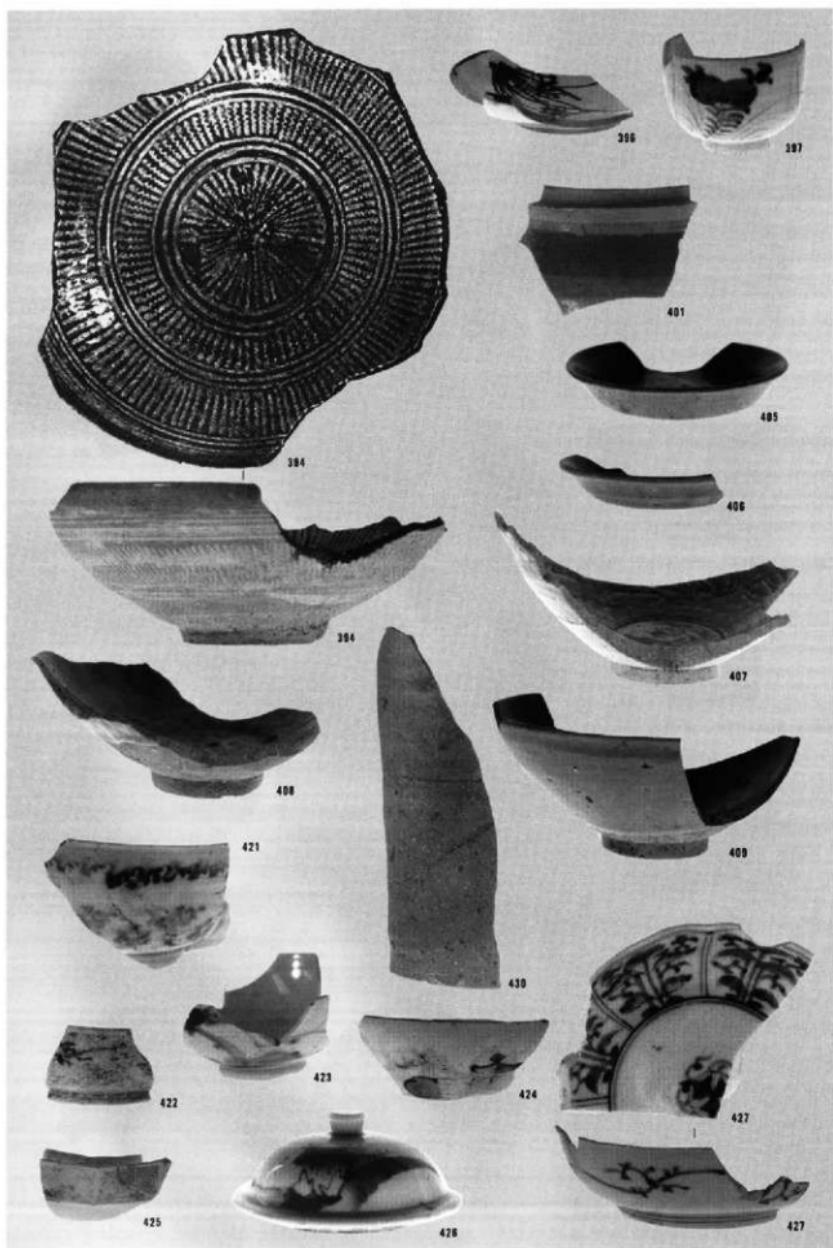


(3) SE-02 検出状況 (南東から)





出土遺物 1



出土遺物 2

**博 多 59**

福岡市埋蔵文化財調査報告書

第532集

平成9年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区大神1丁目8-1

印刷 株式会社 川島弘文社

福岡市東区船崎ふ頭6丁目6番41号

